

が素直に歩いた。

『其處に石があります、怪我をしてはいけませんよ……此處です……もう来ましたよ……近いでせう。』小門を開けて、アルブーゾフを先きに入れながら、騎兵少尉は言った。

騎兵少尉クラウゼの住んでゐる側家の玄関は眞暗で、軍隊料理の香がふうんと鼻をついた。騎兵少尉は扉のハンドルを探つて、アルブーゾフを部屋の中に入れた。彼は燐寸を捜して、洋燈に火を點すと歩きながら外套を脱いで、再び玄関に出て行つた。

『ザハルチェンコー』彼は誰かに斯う叫んで、後は小聲で少時話してゐた。

『承知いたしました、間違ひなく……』兵卒らしい者の聲がした。

クラウゼは歸つて來た。

『火酒は直ぐ來ます。』彼は言つた。

先刻騎兵少尉に置き去りにされたまゝ、アルブーゾフは部屋の眞中に突立つて、ちつと床を見詰めてゐた。クラウゼは少時考へてゐたが、聽て彼の肩に手を掛けて、洋机の傍へ坐らせた。アルブーゾフは素直に腰を掛けて、病的な物珍らしさうな微笑を浮かべながら、初めて見るやうに室内を見廻した。

『なか／＼居心地のよい部屋だね。』彼は愛想よく言つた。

『さうですとも、居心地の悪いやうにはしない。』騎兵少尉クラウゼは言つた。『私は慰安を愛します。』

部屋は大きかつた。獨身者には廣すぎる位だつた。衝立の後方には寢臺があつて、壁の所には土耳其風の安樂椅子が置いてあつた。大きな文机は良質の大理石のやうに輝いてゐた。搖椅子もあつた。床には狼の毛皮を敷きつめて、安樂椅子の上には毛氈が掛けてある。毛氈の上には洋劍や銃器や連發拳銃が金屬製の半圓を描いて、ニッケルの部分は暗く光つてゐた。樂譜架が部屋隅にあつた。ヴァイオリンセロの長い琴頸は謎のやうに袋の中から覗いてゐた。煙草や氣息の匂ひがする。

從卒が火酒や、杯や、鹽漬の肴の載つた盆を持つて來た。そして洋机の上にそれを置くと、直ぐに出て行つて了つた。

『直ぐサマワールも來ます。』騎兵少尉クラウゼは言つた。

『サマワールだつて、冗談ぢやない！火酒を飲めばいゝんだ。』アルブーゾフは遮つた。彼は火酒を注いで、杯を飲み干した。

クラウゼは自分の杯に唇を觸れなかつた。アルブーゾフは何杯となく杯を重ねた。

『ねえ、君！君は戀を信じるかい？』彼は顔を歪めて笑ひながら突然に訊いた。

『私は戀の經驗がない。ですから斷言は出来ませんな。』クラウゼは答へた。

『戀の經驗がない？ 君は幸福だ……併し兎に角君は信じるかい？』

『勿論この感情を無視する事は出来ませんさ。』騎兵少尉クラウゼは言つた。『恐らく感情の最も激しいものでせう。』彼は思案顔に言ひ加へた。

『併し君！ 僕は戀に迷つたんだ……飲まう！』

『飲りませう！ 私は能く知つてゐる。貴方は不幸な人です。』クラウゼは言つた。

アルプーゾフは片方の眼を顰めながら、彼の顔を凝視した。

『知つてゐる？ そんならい……併し僕にとつては、此のアルプーゾフにとつては不幸ぢやない。何でもないさ……クラウゼ君……酒を飲んで忘れるんだ……』

『人間は皆な不幸なものでせう。』騎兵少尉は眞面目になつて遮つた。『貴方のやうな金満家だつて、矢張り他の人間のやうに苦しむんでせう。火酒で紛らす事は出来ません。』

『人間は皆な不幸だと言ふのかい？ さうだらうか？ 幸福な人間はないだらうか？ 總てが意のまゝになる人は何うだらう？ 才能も成功も女も足許に跪いて……』

『それは幸福ぢやない。』騎兵少尉は遮つた。『才能は幸福よりも寧ろ苦痛を齎らします。成功は比較上の問題です。また一人の女では生活を充實させる事が出来ません。』

『併し僕の生活を充實させた。』

『たゞさう云ふ氣がするんですよ。貴方は子供の時分から嬌養おまやかされてばかりゐて、苦勞といふものを知らないからですよ。何時も希望が遂げられるから、一度でも思ひ通りにならない事があると、もう總てが破滅して、その女ばかりに幸福があると思つて了ふんです。併したゞさう思ふだけですよ……女が貴方を戀するやうになれば、貴方にとつてはもう無意味なんです。或は邪魔になるかも知れませんよ。』

アルプーゾフは黒い毛髪かみを額に垂らして、頂垂れたまゝ聽いてゐた。

『勿論私は貴方のやうに戀をした事ありません。けれども生や戀に就いては随分考へて斯ういふ解決を得たのです。』

アルプーゾフは急に笑ひ出した。

『君は獨逸人だ……實に念入りなもんだ。冥想する、解決を得る、加算かざんや減算ひきざんをする……何が出て来る？ 結論に達する理由がない。自分自身を加減しない以上、熟慮も加減もあつたもんぢやない。戀が何だか君は知つてゐるか？』

『それはもう話しました。』騎兵少尉クラウゼは言つた。

『まあ待ち給へ。』アルプーゾフは少尉の肩を掴んで、彼を屈かませながら遮つた。『僕が言は

う……君が理性を失つて、胸を悩ます時に、戀は初めて燃えるのだ。嫉妬を起し、女を憎み、女を侮辱しながらも、矢張り女と離れて生活が出来ない……君が一度戀に陥ると、君はその女を通して世間を見るやうになる。窓の下に一晩立つてゐる事もあるだらう、足に接吻する事もあるだらう、すべてを赦すだらう、すべてを堪へるだらう……更に苦痛の増す事を願ふやうになるかも知れない。女が君の機嫌もとらずに、眉毛を顰めてゐたら、君は毎晩泣くだらう、離別に優しく接吻して呉れたら、君は唄を歌うて微笑ふだらう。酒を飲む、道樂をする、賣笑婦を買ふ……けれども聽ては身體を洗つて、髪を梳つて、こつそり女の所へ歸つて来て、犬のやうに女の眼を覗く……喉を引摺む、殴る、苛める……けれども少時すると可哀さうになつて涙を流す、疵になつた所を舐めてやる……それから……』

『どうも私には解らない……何の話なんです？ まるで狂氣の沙汰だ。』騎兵少尉クラウゼは迷惑さうに言つた。

ルブーゾフはなほさら堅く彼の肩を掴んだ。

べき獨逸人だ！ 幸福も狂氣も此處にあるのさ……全く氣が狂つて了つたら何んな。身體を寸断々に引き裂いたら何んなに……だらう。女は掌を拍つて笑つ

『何が幸福なんです。苦痛ぢやありませんか。』

『苦痛の中に快感がないと思ふのか？ 君は何にも解らないのだ。熟考して解決を得ても、何にも解りやしない。そんなら君が暗闇に突立つてゐる時、女は著物を掲げながら、君の傍を通つて、他の男の所へ行くとする。君は突立つてゐて、壁ごしに見てゐる……と、女は羞かしさうに顔を赤らめながら入つて来る……何のために入つて来たのだか、何んな必要が男にあるのだか、直ぐに分るさ……男は衣を裂いて、忙しさに揉む……君は腕より他に素肌を見た事がないのに、此の男のためなら、女は羞かし氣もなく になる。女を何うしようといふのだらう……君の神聖なるものを賣笑婦のやうに轉がしてゐる。女は男のなすがままに委せて、男が を與へて呉れた運命に感謝して……男の手に接吻する。聽て男は疲勞して、煙草を喫ひ始める……もうこの上は女に用がないんだ。戸外が明るくなると、女は再び君の傍を陰影のやうに通つて行く……髪は亂れてゐる、著物は皺になつて、だらしが……疲勞しきつてゐる……けれども君は矢張り突立つてゐる、矢張り突立つてゐるんだ……飲み給へな、クラウゼ君！』アルブーゾフは叫んだ。

彼は謔言のやうに言つた。彼の不條理な言葉の意味を掴むのは困難な事であつた。

『飲んでみよですが……』騎兵少尉クラウゼは言つた。『貴方の話は怖ろしい事ばかりで

す。何うしてそんな事を知つてゐるんだか、私には解らない。』

アルプーゾフは愉快げに笑つた。

『解らない？ 僕にだつて解らない……何にも解りやしないさ。君は可愛い、獨逸人だ。僕はそれを経験したんだよ。』

『貴方が？』

アルプーゾフは、どろんとした重苦しい眼で彼の顔を見た。

『僕がさ……』彼は言葉すくなく答へた。『飲まう！ そんな事は何うでもい……飲まうよ。』

クラウゼは火酒を注いだ。二人は杯を飲み干した。アルプーゾフは頬杖をついて、考へ込んだ。面長なクラウゼは黙然と腰を下したまゝ、ぢつと彼の顔を見詰めてゐた。

『さう……』アルプーゾフは漸く自分にかへつて、躊躇するやうに言つた。『クラウゼ君！ これは數學ぢやないよ。幸福も苦痛も生活も數學とは違ふ。總ての物を通分する事は、決して人間には出来ない。その結果……まあ待ち給へ。僕はすっかり酔つて了つたやうだ……三日間といふものは飲みつゞけたもの……併しまだく飲むぜ……』

『お飲みなさいとも。』クラウゼは賛成して、火酒を注いだ。

『クラウゼ君！ 聽いて呉れ！』アルプーゾフは言葉をきつて、ゆるやかに言つた。『僕が若し人を殺したら何うなるだらう？』

『さうすりや殺人犯ですさ。』騎兵少尉クラウゼは言つた。

アルプーゾフは笑ひ出した。

『そりやさうさ……君は伶俐な獨逸人だ！ 勿論殺人犯さ……それだけの話だ。殺人も飯を食つたり、便所に入るのと變りはない……苦しむ事も、悩む事もないさ……要するに殺人は殺人だけの話だ。僕は犬を殺した事がある……連發拳銃で射殺してやつた。その後少時は眠れなかつたね。忘れかけたかと思ふと、雪の上に乗せて、四足を藻掻いてゐたことを、夜半になつて急に思ひ出す。併し少し経つと忘れて了つた。僕は得意になつて、その時の感情を女達に話した事が二三度あつた。僕は一種の誇さへ覺えたね。殺した所で何でもない……斯ういふ無神経な男さ。狩獵にしたつて同じ事だ……未だ生きてゐる鳥の頸を絞めるのは餘りいゝ氣持ちぢやないや。併し絞めて了ふと、忘れるだらう。雑作ないものさ。クラウゼ君！ 君は人を殺した事がないだらう……けれども人間の方が犬よりは氣が利いてゐやしないか？』

『私には解りませんな……そんな事は考へてもゐない。』騎兵少尉は答へた。

『僕だつて考へてはゐないさ……僕は人殺しをするかも知れない。たゞ誰を殺していいか分らない。男を殺すか、女を殺すか、それとも自殺するかが問題さ。君は何う思ふ？』

『男を殺すのが一番正當でせうな。』騎兵少尉クラウゼは考へながら言つた。

『もつともさ！ それが正當だらうさ。併しその男を愛してゐた場合には？』

『その時は女ですか……それとも自殺ですか……』

『何方さ？』アルプーゾフは執拗く訊いた。彼の眼は暗かつた。

『まあ自殺でせうね。』

『何故？』

『女を殺して御覽なさい、生涯憐憫の情に苦しみますぜ。』

『なるほどそれも一理ある。併し最後の瞬間に僕を見た女の顔などは忘れて了ふぜ。哀れな小さな者と思ふかも知れない……併し僕は殺して了ふ。クラウゼ君！ 自殺よりは優しだらう？』

『それは優しでせう。』

『僕が自殺して見給へ……女が僕の墓場を通つて、男の所へ行くのは、最後の瞬間にも分らないぜ。僕は地の下に腐れてゆくんだが、男はその女を にする……男が安心して抱

擁するために、僕は引退して、自分で自分の身體を墓の中に埋めるやうなものだ。クラウゼ君！ その時墓の土を食つてゐられるかい？』

『到底堪へられませんか。』クラウゼは斯う言つて、眉毛を動かした。

『堪へられない？』アルプーゾフは悲しさに繰返した。『君には解らない。誰にだつて解るもんか。信じる信じないは別として、君には解つてゐない。理窟詰めにして、解つたやうな氣がしても、心の奥では解つてゐないんだ。靈魂が肉體を離れて、單獨に世界を彷徨するなんて考へられるか。これより莫迦らしい話はない。併し正直の所を言へば、その莫迦らしさも解らないんだ。莫迦らしいんだか何うだか、それも解らないんだ。怖るべき事だ。』

『さうです、怖ろしい事です。』クラウゼは言つた。

『この世界に恐るべき事は何にもない……孰れも平凡な事ばかりだ。併し此處に破滅がある。人間が破滅に近づいて行くのは怖ろしい事だ。僕は親父の死を今でも憶えてゐる。屍は机の上に横はつて、威嚴のある顔をして、灰色の髯は上の方を向いてゐる……僕は父を見て、泣いた……僕は父を愛してゐた。尼僧は經を讀む、蠟燭は顫へる……何でも夜半だつた。僕は父の鼻を撮んだら何んなものだらうと思つた。僕は恐怖に襲はれた。古めかしい聖像は壁の所から此方を見てゐる、眼ばかり光つてゐる……僕は手足の麻痺れるのを感じ

た。何か怖ろしい事が起りさうだ……気が狂ひさうだ、死人は帷子を著たまゝ立ち上つて、私を呪咀する、空は震へる……けれども腕は推される……怖ろしい、胸は塞がる、冷たい汗が額に流れる……手は伸びてゆく、撮つままうとする……そして撮んだ。』

『で、何うでした？』騎兵少尉クラウゼは物好きさうに訊いた。

『冷たい鼻だつた。』アルプーゾフは懶げに答へて、ぢつと黙つて了つた。

クラウゼも黙つてゐたが、少時すると彼は急に噴き出した。アルプーゾフは怪訝さうに彼の顔を見詰めた。

『何うしたんだ？』

クラウゼは猶更笑ひ轉げた。彼の長い面は皺だらけになつて、メフ・ストのやうな細い眉毛は縮まつた。口は耳まで裂けた。アルプーゾフは何故か不愉快になつた。

『廢せ。』彼は言つた。『廢せと言ふのに！』

併しクラウゼは聽かなかつた。彼は椅子から跳び上つて、背中を圓くしながら、部屋の中を歩き廻つた。彼の全身は哄笑に顫へてゐた。

『何うしたんだ！』アルプーゾフは泥酔よらばらひ漢らしい微笑を浮べながら叫んだ。

『ワハ、ハ、ハ。』クラウゼは噴き出した。彼は全身を屈め、咽せ返つて、鼻を鳴らしながら手を振つた。

アルプーゾフは不可解な恐怖に捉はれた。クラウゼとは全く別の人間が笑ひ轉げてゐるやうにさへ思はれる。

『黙らないか！』彼は騎兵少尉の肩を掴みながら叫んだ。『殺すぞ！』

クラウゼは急に靜かになつた。彼は自分の顔を伸ばして、三日月形の眉毛を品よく逆立てた。そして腰を下すと、落著きはらつて言つた。

『飲みなほさうぢやありませんか。』

此度はアルプーゾフが物好きさうに彼の顔を見詰めた。

『ふん、癢に觸る獨逸人だ！』アルプーゾフは言つた。

沈黙が訪れて來た。洋燈ランペンは朦ぼんやりと机の上に點つてゐた。火酒に濡れた洋机掛の上は居酒屋のやうに亂れて、銃器は暗く毛氈の上に光つてゐる。戸外は優しい夜で、悲哀に包まれた蒼白い新月が、澄み渡つた空に輝いてゐる。

## 十六

從卒が早朝クラウゼを起した。

アルプーゾフは昨夜二人が痛飲した部屋の安樂椅子に未だ眠つてゐた。洋机の上には汚れた盆や杯や酒壺が依然として散らかつてゐる。何となく息苦しかった。火酒や長靴の匂ひが鼻をつく。アルプーゾフは著物も脱がずに俯伏してゐた。片方の腕は挫折したやうに突き出て、床の上に垂れ下つてゐた。鎧屏の透間には金色の日光が射し込んでゐた。虹色の埃の柱は樂しげに顛へながら、室内の薄闇の中に廻轉してゐる。洋机の上には金色の帯が斜に横はつて、壊れた杯は白い星のやうに煌々光つてゐた。

クラウゼは客を起すまいとして、密々身體を動かしながら、こざつぱりとした重服や、銀色の飾帯や、洋劍をつけた。彼は急に瀟洒とした、美しい、立派過ぎる位な士官になつた。

宅地へ出ると、空は青く澄み渡つて、朝の空氣は新鮮だつた。朝露を拂ひ落すやうな大音響がした。

朝は未だ早かつた。太陽は地平線の近くに美しく輝いて、樹木や垣根の下には濕つた青い陰影が横はつてゐた。大抵な家は未だ鎧屏を鎖してゐる。雀は歡喜のあまり組打つやうに、此の心地よさを争うて啼いてゐた。道路を通行してゐるのも、水差や籠をさげて市場へ行く百姓女位のものだつた。街の方から單調な鐘の響が間を置いて聞えて来る。朝の禮拜の鐘を

撞いてゐるのであらう。

綺麗に梳られたクラウゼの赤毛の乗馬は、朝日の光を受けて、金色に光つてゐた。傳令卒は彼の背後に馬を走らせた。二つの長い影は馬の足と絡んで、二人の後方から埃つぽい道路を走つて行つた。すべての物は朝の色彩の中に判然として、何となく爽やかだつた。

教練は埃つぽい道路に面した街外れで行はれた。二人の歩兵が狭い堡壘の所に立つてゐた。路傍には藁の案山子が立つて、挫折したやうな腕を喜悲劇的に突き出してゐた。恰も菜園を威嚇してゐるやうである。教練はもう始つてゐた。兵卒は重なり合ふやうにして、圓場に馬を走らせてゐた。軍馬は頭や尻尾を振つた。

顔色の蒼ざめた、頬髯の濃いツレーネフ大尉がクラウゼに挨拶した。

『いゝ天氣ですね！』彼は斯う言ひながら、暗い眼で兵卒の方を見て、圓場の真中へ馬を飛ばして行つた。

輕快を誇るやうに躍りながら、赤毛の馬が何頭となく、大きな圓を描いて走つて行く。彼等の長い影は纏れながら、跡に荒らされた地面を這うて行つた。

『廻れ左！』ツレーネフは號令をかけた。

すべての馬は突然その場に躍り上つて、忽ちの中に方向を變へると、以前のやうに頭や尻

尾を振りながら、反対の方向へと再び圓場を走つて行く。

『廻れ左！』

再び躍り上る。再び反対の方向へ動く。各々の馬は、先へ進む馬の尻尾に結びつけられてゐるやうだ。

太陽は昇つて来た。路端の猫柳の下には陰影が落ちて、赤い著物を著た百姓女や子供達が雀のやう饒舌りながら、其處に腰を下してゐた。彼等は兵卒を見ては笑つた。

程なく道路の真中に横木が置かれた。長い隊伍は斜めに延びた。クラウゼは乗馬の短い手綱を掴んで右翼に止つた。

ツレーネフの號令が遠くの方から切々に聞えた。

と、クラウゼの命令もないのに、馬は躍り上つて、殆んど棒立ちになつた。障碍物との間の距離は見る／＼中に近づいて来る。長い棒が足の下にチラリと見える。心臓は鼓動する……障碍物は彼方に過ぎた。クラウゼは跑で走つたが、少時すると歩をゆるめて、ツレーネフと並んで止つた。向側には大きな老馬に跨つた、顎髯の濃い軍曹が立つて、兵卒の方を腹立たしげに視てゐた。

口髭の白い若い兵卒が右翼を離れる。彼の乗馬は烈しく砂を蹴つてゆく。クラウゼは乾

いた土地を浴びた。前足を折り重ねて、後足を延ばした赤毛の馬や、眞白な襦衣が、チラ／＼動く。整列した隊伍を一人々々離れては、馬を跳ばして来る。顔を緊張させながら、馬もろとも軽々と空中に躍り上つて、柵を跳び越えると、遙か先方に再び隊伍を組む。

栗色の馬に跨つた一人の兵卒は、柵の方へ跳んで来たが、馬は急に尻尾を上げながら、側の方へ躍り上つて了つた。

『後方へ！』ツレーネフは腹立たしげに叫んだ。

兵卒は後方へ戻つた。猫柳の下では笑聲が起つた。

兵卒は再び馬を走らせた。馬は更に烈しく砂塵を蹴つて、柵の方へ突進して来た。風よりも軽く柵の向側へ跳び越したかと思ふと、急に足が弛み、可笑しな跑到に絡んで、尻尾を上げながら柵の側に躍り上つて了つた。横木は轉がつた。

兵卒は吃驚したやうな顔をして、再び後方へ戻つた。猫柳の下にゐた子供達は大喜びに囁し始めた。

『馬鹿め！』ツレーネフは斯う行つて、嚴と軍曹の方を見た。

顎髯の長い軍曹は馬を走せられて、兵卒の後を従いて行つた。

クラウゼは、下顎を震はしてゐる兵卒の蒼白い顔を遠くの方から見た。そして彼の乗馬が



三度自信もなく、苦しうに跳んで行くのを見た。馬は耳を逆立て、柵の方へ走つて行つた。兵卒は忌々しさうに手綱を引締めた。兵卒の延ばした足や、白い腹部が瞬間的に見えただけ、不恰好な重々しい物の方向は忽ちの中に變つて、塵埃の雲を立てながら、地面の上に轉げ落ちた。

クラウゼもツレーネフも軍曹も兵卒達も彼の方へ駈けて行つた。

兵卒は腕に凭れて起き上つた。そして妙に背中を屈めて、足を突張つたまま、横様に倒れた。馬は少時立つてゐたが、聽て後足を曲げて、犬のやうに坐りこんで了つた。けれども程なく體軀を起して、全身を震はしながら立ち上つた。馬は急に瘠せ衰へた、泥だらけな、哀れな驚馬のやうになつた。傷けられた小鳥のやうに顫へてゐる兵卒は運ばれて行つた。

『だから貴様に言つたんだ。』ツレーネフは荒々しく叫んだ。

『主なる原因は……大尉殿！』頸髯の長い軍曹は驚いたやうに辯明した。『後退りしたので……私も試してみましたが……指を觸れて……併しこの……』

クラウゼは柵に近づいて、横木の滑りを檢べようとした。併し彼はそのかはりに野原へ馬を走らして行つた。

彼方の地平線はうす青く消えて、空は藍色に澄み渡つてゐた。すべての物も此の廣大の

中にあつては、峻酷なアイロニイのやうに思はれる。吃驚したやうな眼をして、顔中の皺に血の流れてゐる、皮膚を剝ぎとつたやうに眞赤な頭と、落馬した兵卒が起き上らうとして、力なく倒れた見苦しい動作は、太陽や、瑠璃色の空や、優しく融けて行く地平線の中に見える。

## 十七

ツレーネフは埃だらけになつて、苛々しながら家に歸つた。

門の所で馬を降りると、彼は傳令卒に馬を託して、騎兵らしく曲つた足を不器用に運びながら、宅地の中を歩いて行つた。従卒は彼の洋剣を玄關で受取つた。

『大尉殿！ 御來客で……』

『誰だ？』

『アウグーストフ副宮殿とトーツキイ中尉殿であります。』

ツレーネフは眉毛を擧めた。彼は聯隊に於ける同僚と共に、アウグーストフの横柄な美しい顔や、高慢ちきに突き出た顎や、副官アウグーストフその人に堪へる事の出来ない一人だつた。

副官と中尉とツレーネフの妻は客間に腰を掛けてゐた。ツレーネフは未だ隣室で顔を洗つてゐた時から、媚を含んだ妻の甘つたるい笑聲や、侮蔑と思はれるほど落著きはらつた副官の丁寧な言葉を耳にした。

『あゝ貴方ですか……我々は貴方を待つてゐた……』副官は迎へるやうに身體を起しながら言つた。

『今日は晩かつたのね。』妻は微笑ひながら言葉をかけた。

『用事ですか？ それともたゞ遊びに？』ツレーネフは態とらしく微笑つて、妻には返事もせずを訊いた。

今朝二人は夫婦喧嘩をやつた。彼女が斯んなに物優しいのも人前ばかりで、客が歸つて了へば再び今朝の莫迦らしい悶著が續くの、ツレーネフは能く知つてゐた。

『すこし談話があるんです。お邪魔はしません……』副官は軽く頭を下げながら答へた。

ツレーネフは無言のまま二人を書齋に招いた。

扉が閉まると、トーツキイ中尉は洋机の傍に腰を下して、肥満した、血色のいゝ男の、平常の、誇張した表情とは似もつかぬ、いやに眞面目くさつた顔をつくりながら、口髭を頻りに捻り始めた。ツレーネフも腰を掛けた。副官は部屋の中を歩き出した。

『知つてゐるでせう、スチエバーンツロフキーモヴィッチ！』彼は軍隊で命令書でも読み上げるやうに、冷やかな聲で滑らかに言つた。『俱樂部でアルプーゾフと演つた芝居を貴方は観た筈だ。』

『あの時俱樂部にゐましたもの。』ツレーネフは不得要領に答へて、鬱陶しさうに髭を捻り始めた。

『さうでしたね。』副官は言葉を續けた。『貴方も知つてゐる通り、私は用務を帯びて、あの翌日出張しました。併しあのまゝに抛棄しては置けない。若し決闘が餘儀なく成立した場合には、私の介添人になる事を拒絶しないで下さい。』

ツレーネフは黙つてゐた。彼は絨毯の上を正しく歩いてゐる、綺麗に磨かれた副官の長靴を忌々しさうに見て、實際アルプーゾフが此の高慢な横面に鞭を加へ損うたのである事を思ひ出した。

『中尉は承諾して呉れました……私に友誼を示す事を。』副官は矢張り冷やかな聲で言つた。

『アルプーゾフ君の所へ行つて、私の果狀を渡して貰ひたいんですが。』

ツレーネフは黙つて頭を下げた。

『私の希望としては、決闘は飽くまで嚴肅にやりたいのです。その意味で貴方の盡力を願

ひたいのですが。』

ツレーネフは無言のまま、再び無愛想に點頭いた。

『元來僕の意見は斯うです。』眞面目な聲で中尉が不意に言つた。『決闘をするのなら、決闘らしくすべきです。さもなければ見戯に過ぎない。』

彼の全身には血液が漲つた。彼は得意になつて、白い口髭を捻つた。彼の顔は寒氣に火照つたやうに赤かつた。

副官は冷やかに彼の言葉を聞いた。

『全く私と同意見だ！』彼は言つた。

中尉は更に顔を火照らして、小さな眼を威嚇するやうに見廻した。

『莫迦め！』ツレーネフは彼の顔を鬱陶しさうに見て、斯う思うた。

副官はツレーネフの前に立ち止つて、きつちりと洋袴を穿いた足の上に震へながら言つた。

『能く解つてゐるでせうが、ステュバイン・ツラファームヴィッチ、貴方には敬意をはらつてゐるつもりです。勿論貴方の意見を聴く必要もあります。私が満足を要求するのは正當でせう。』

ツレーネフは彼の顔をチラリと見たが、直ぐに視線を落して了つた。

彼は、副官が他人から満足を要求する権利などを全然有たない卑劣漢であると言つてやりたかつた。彼は副官の行つた數多の忌はしい鞘當を胸に思ひ浮べた。併しツレーネフにはそれを實行する事が出来なかつた。彼は今日に限らず、自分の理想を實現させた事がなかつた。五月蠅い女と同棲し、不愉快な軍務に服して、彼は下士を打擲する同僚に忠告を與へた事もなければ、自分の意見を發表した事もない。彼は生涯意志の薄弱に苦しんだ。彼は虚偽と自覺しながらも斯う答へた。

『勿論ですさ……それを要求するのは。』

副官は聯隊の噂をしながら、巻煙草を燻らして、部屋の中を彼方此方歩いてゐたが、應て少時すると軍帽を手にとつた。ツレーネフは前室まで二人を送つて行つた。彼は苦しいほど客に歸つて貰ひたかつたのであるが、また一方には二人を歸すまいとして、出来るだけ談話を延ばした。彼は妻と二人きりになるのが怖ろしかつた。

『今日は私の隊で下士の負傷がありましたね。』

『さうですか。』扉を開けながら、副官は冷やかに言つた。

『では今日俱樂部で會ひませうか？』ツレーネフは惱ましさうに言葉を續けた。

『いゝでせう。』副官は斯う答へて、背後の扉を鎖した。

ツレーネフは書齋に戻つた。彼は何處へでもいゝから身體を隠したかつた。妻の毒舌にはもう一言も堪へられない。愚にもつかない事から始つた争論は、どれほど無益な無意義なものに思はれたらう。彼は殆んどその原因さへも憶えてはゐない。彼は哀傷に捉はれた。そして聞き馴れた優しい足音が扉の外から聞えた時、ツレーネフの顔は全く別人と思はれるほど、苦痛と憎悪の表情に歪んで了つた。

『スチエハ……』妻は斯う言つて、扉口の所に現はれた。

彼女の聲は悔むやうに、嬌えるやうに、殆んど愁訴するやうに響いた。恐らく今し方顔を洗つたのであらうが、彼女の濡れた、幾らか腫れ上つた眼には涙の跡が見えてゐた。喧嘩が終つてから數時間、彼女は彼と同様に心を落著けてみて、その愚かしさに漸く氣がついたのである。彼女は男が自分に加へた亂暴も、自分に吐きかけた悪口も忘れて、たゞ自分が夫に侮辱を加へた事ばかりを氣にかけてゐた。彼女はたゞ和解を望んだ。そして従順な、哀願するやうな眼で夫の顔をぢつと見詰めてゐた。

ツレーネフには妻の眼附が能く解つた。併し自身の過失を最初に承認したのが彼女であつたために、彼は今が今まで自分を罪人と思つてゐた事も忘れて了つた。彼は妻を不憫に

思つてゐた事も、妻に容赦を乞はうとしてゐた事も忘れて、たゞ彼女が自分に對して不徳である事を譴責せねばなるまいと思つた。

『何んだ？』彼は冷やかに訊いた。

妻は蔷薇色の腕を素肌にして、書齋の中へ入つて來た。彼女は言葉よりも自分の魅力に頼る積りで、無意識に嬌態をつくりながら、髪の毛を態とらしく顔に撫でつけた。けれども自分の美容で罪を償はうとする哀れな希望は、ツレーネフの心を柔げるよりも、寧ろ彼に冷酷な態度をとらせる力を與へたのであつた。

『ふん……既うこれだ！』斯んな考へが勝ち誇つたやうに彼の頭腦の内部を過ぎた。

『怒つてゐるの？』妻は兩手を彼の肩に置いて、謝罪するやうに夫の眼を覗きながら訊いた。

懐かしい素肌の腕に觸れ、黒い愛らしい眼に接すると、ツレーネフの心は忽ちの中に柔らいで來た。しかし一度位は自分の體面を保つて、彼女を叱責してやらねばなるまいと思つた。

『そんな権利が俺にあるのかい？』彼は皮肉に訊いた。

彼女の眼には瞬間的な怒りがチラリと光つた。併し彼が驚いて、再び争論を起しさうな

自分の言葉を悔むより先に、彼女はそれを言はせまいとして、しつかりと彼の身體を抱擁して了つた。

二一六

『いゝぢやありませんか……そんな事は。』彼女は言つた。態とらしく嬌つたれた彼女の聲の裡には、苦痛と憤懣が聞える。

ツレーネフは愕然とした。

『さうか……』彼は言つた。

彼女は柔かい唇で夫の口に接吻した。ツレーネフは微笑を洩らした。これは愛情と倦怠と疑念とを含んだ曖昧な微笑だつた。彼はこれが單に一時的のものであつて、到底永續的の和解に堪へられない事を知つてゐた。

『苛々させる、苦しめる、その後で接吻する……ユダの接吻だ！』ツレーネフは斯う思つた。

彼女は下から男の眼を見詰めてゐたが、少時すると蒼薇色の圓々とした自分の腕の關節にある水色の窪みに眼を移した。そして再た彼の唇と眼を見上げた。

『何うしたんだい？』彼は煩ささうに訊いた。

『接吻して！』彼女は元氣のない聲で嬌えるやうに言つた。

ツレーネフは彼女の柔かい冷たい皮膚に温順しく唇を觸れた。

『もう一度して！』彼女は媚びるやうな聲で彼の耳もとに囁いた。この囁きも嘗ては音樂のやうに響いたのであるが、今では普通の人間の私語と何等の相違する所がない。彼は身體を屈めて、いま一度接吻してやつた。

再び彼の意志を奪うて、彼を生涯この勞役に服せしめる忌はしい感情が起る。彼女の肉體の匂ひや、女の肌の肉感的な冷たさが彼の胸を動揺させる。彼は無意識に素肌の腕を掴んで、愛情や魅力や倦怠を一時に感じながら、眼を閉じたまま接吻した。

『まただ！』彼の頭腦には斯んな事が閃めいた。

最後の動作まで既に何千度となく繰返されてゐる同じ習慣的な慾望に刺戟せられて、さらに數十年の間、同じ手を接吻するのであらう。彼の胸には平常のやうに斯んな考へが浮んだ。彼の眼前には未知の、うら若い、不思議な女の青白い幻影が、到底達し難い距離を隔てたやうにぼんやりと動いた。彼の胸は烈しい悲痛に捉はれて了つた。

『草臥れたの？』妻は柔かい肉體を彼の方に寄せながら言つた。『腰を掛けませう。』

彼女は男を安樂椅子の所に連れて行つて、情慾に燃えた、撫愛を哀願するやうな眼で彼の顔を見詰めた。

彼女の言葉も身振もツレーネフには悉く解つてゐた。そして、何が如何に起るかといふ正  
確な怖るべき認識の裡にあつた物は悲痛だつた。彼は厭々女に従つた。

『何故そんなに悲しさうな顔をして……私が厭になつたの？』彼女は機嫌をとりながら言つ  
た。

『何故そんな事を言ふんだ……すこし頭痛がして……』ツレーネフは瞬きをしながら、氣が  
なさうに答へた。

『可哀さうに……酷く痛むの？』

彼女は柔かい温かい手を彼の額にあて、胸と胸とが觸れ合ふ程、男の身體に寄り添うて  
きた。

何時でも自分の自由になる、柔かい、燃えるやうな女の肉體は、自分の傍にある。情慾に燃  
えた女の眼は惚々と自分を見詰めてゐる。彼は女の手に接吻した。肩に接吻した。次には  
胸に接吻した。

『矢張り俺は他の女を愛してはゐないんだ。』彼は斯う考へた。

斯う思ふと、彼の眼には愛しさの涙が流れて來た。何故自分達は喧嘩ばかりしてゐるの  
だらう。互に愛し愛されてゐながら、何故苦しめ合つてばかりゐるのだらう。二人がいます

こし自由であつて、彼の手足を縛め、爽快な感情の可能を彼から奪ふ彼女の呪ふべき嫉妬が  
なかつたら……彼は再び妻の胸にかへつたかも知れない。

彼は以前の情熱を喚起して、他の女の存在を忘れようと努めながら、豊かに縫うた朝服を  
透して、優しい波のやうに彼の女を抱きかゝへた。柔かい、冷たい女の肉體を接吻した。彼  
女は男に寄り添ひながら、接吻をするに任せて、男の身體をぐつと抱きかゝへた。

ツレーネフは安樂椅子の上に妻の身體を優しく放した。炎のやうな情熱は實際いまだに  
消え失せない。口論や悲痛は誤解か何かのやうに忘れる事が出来るだらう……彼は少時の  
間は斯んな氣持になつた。

彼は立ち上つた。彼は満たされた希望が疾うに消えて、再び倦怠と嫌惡が襲うて來るのを  
感じながら、身體を火照らして、氣息を喘いでゐる自分の妻が、亂れた髪を撫でつけてゐる  
のに眼を觸れまいと努めた。

『今日は何うして……』彼女は斯う囁いて、感謝の接吻をするために夫の身體を引き寄せ  
た。

併しツレーネフは煙草を喫ひたかつた。何處へでもいゝから出て行きたかつた。彼は再  
び先刻の悲痛に捉はれて了つた。

『矢張り同じ事だ！ 矢張り同じ事だ！ 永遠に斯うなのだ！』斯んな言葉が彼の頭腦をチラ／＼過ぎる。

『放して呉れ！』彼は我慢が出来なくなつて言つた。『私は頭痛がするんだ。花園へ行つて見るよ……すこし散歩して来る。』

女の眼は曇つた。痛々しい嫉妬の皺が彼女の口もとに現れた。彼女から見れば、夫の心には既う秘密といふべき物がなかつた。假令瞬間的な感情であつたにしても、男が意識するより先きに、彼女はそれを了解した。二人は冷めた情慾が満足される毎に、斯ういふ無自覺的な怖ろしい場面を繰り返すのであつた。

『いらつしやいとも、何處へでも好きな所へいらつしやいな！』彼女は荒々しく言つて、侮辱されたやうに立ち上つた。

ツレーネフは吃驚した。

『またこれだ……何をまた怒つてゐるんだ？』喧嘩さへ避けられるならば、大抵な屈辱は忍ぶ積りで、聲に邪氣のない驚愕を含ませようとしながら、彼はおど／＼して言つた。『ほんたうに頭が痛むんだつたから……』

『ふん、無論さうでせうさ……だから私は怒つちやゐませんよ、邪推ばかりして……行つて

いらつしやいな、散歩していらつしやいつてば……』

彼女の聲の裡には辛くも堪へてゐる憎悪の情が聞える。明かに彼女は落著き拂つて『行つていらつしやい』と言つた。自分の憤怒を否定して、彼の言葉に承諾を與へた。ツレーネフが委れたのは全く此處にあつた。最も怖ろしい場面は、平靜を装うてゐる此の種の言葉や、今も腫に浮んだ、容赦し難い憎悪の暗い表情のやうな物から發するのであつた。近年毎日のやうに演つてゐる芝居が、今日もまた始まるのであらう。涙だ、沈黙だ、哀願だ、叫聲だ、ヒステリックだ、密閉した扉の前の祈禱だ、(何故か此處から離れる力がない) 續いては激怒の來襲だ、扉の亂打だ、莫迦と叫ぶ怒號だ、次には再た和解だ……次にはまた……。これを避ける事さへ出来るなら、何事でもしよう。疲労した胸は僅か一分間でもいゝから、安靜を求めてやまない。

『まあお聴き、莫迦らしいぢやないか。涙が出てゐるよ……何を泣いてゐるんだね？ 私は何にもお前を怒らせるやうな事を言ひはしないだらう？ 私には譯が解らない。何の事だか解りやしない。』彼は叫ぶやうに言つた。

妻は返事もせずに部屋から出て行つた。

『ねえ、お聴き……カーチャ！』

ツレーネフは感情を隠すまいとする自分を叱咤して、彼女の後を追うた。彼は腕を振り上げてやりたかつた。響を引摺んでやりたかつた。力まかせに張り倒してやりたかつた。此の最後の希望は堪へられないものである。怖ろしいものである。幾度彼はこれを實行したろう。その結果は、妻に對して限りない憐憫あはれみを覚え、自分に對しては限りない輕蔑さげすみを覺えるのだ。

『あゝ……何時になつたら萬事は終るのだらう!?』彼は一言一句を怯々おどくして言つた。そして何を言つてゐるのだから自分にも解らなかつた。

眼を泣き腫した妻の冷酷な顔は、彼の方を振返つて見た。  
『今から心配するには及びませんよ!』彼女は憎々しく言つた。

ツレーネフは胸を搔擽られるやうな氣がした。一分間とは續かないにしても、彼はこの威嚇に耐へる事が出来なかつた。もう一秒もすれば、妻の横面を張倒すといふところで、彼は急に顔を反そむけて、髪の毛を搔擽りながら、部屋から駆け出して行つた。

花園は明るくて暑かつた。梢には梅の實が青く見えて、懶だらけるほど歡樂を恣ほしいままにしてゐるやうに思はれた。伸びた雜草の上にも穩やかな生は進行してゐる。嚴いめしい侍從武官の服装をした甲蟲が莖くきに添そうて無器用に這つてゐたが、不圖足を踏ふみ外はして、地面の上に落

つこちた。甲蟲は自分の冒險の思ひがけない失敗に面喰つて、少時の間は身動きもしなかつた。聽て怪我の有無を檢べるやうに注意深く身體を動かして、侍從服の皺を綺麗に延ばすと、再び撓たがまずに根氣よく這上つて行つた。

ツレーネフは長椅子に腰掛けて、ちつと甲蟲を見詰めてゐた。彼の頭腦あたまの内部うちには煙のやうに眞黒な、切れぬ考かんがへが湧いて來た。

彼は殘酷な無情な人間にならうと幾度誓つたらう。渾沌としてはあるが、自由な新生活が眼前に楽しく浮んで來る。若い、美しい、金髪の女が夢のやうに現はれる。彼は花を慕ふ蜜蜂のやうに近づいて、恐怖も知らずに、楽しく、心地よく歡樂を味ふと、野原の風のやうに束縛もなく、先へ先へと飛んでゆく。

世界は限度なく廣い。世界の歡喜よろこびは藍色の海である。ツレーネフは、狂氣の如く自由に憧憬こぼれした。しかし無期徒刑囚のやうに絶望である。自由は既に幾度となく近づいた。愛し愛されてゐる二人の者が、あらゆる侮辱を相互に加へ、憎惡を喚び起し、忍び得ぬ苦痛を招く、狂的な、怖ろしい舞臺の後では、最後の一言を口にして、二人は遂に離別してしまひさうに見える。幸福に對する自分の十分な分前を生活から得るために、めい／＼自分の進むべき道に向へばよいのである。しかし此の言葉の發せられた例たとひがなかつた。離婚が殆んど



事實となつて、投げ出された旅行鞆や、引摺り出された抽斗の間に、破壊された生活の空虚が冷やかに動く時、呪ふべき愛情は突然炎のやうに燃え始めるのであつた。今日から二人は赤の他人となつて、歡喜や苦痛を共にした十年の歲月が、もう不必要な思ひ出ばかりになると思ふと堪へられなくなる。明日になれば、二人は遠く離れて、相手の生活には何等の權利も有たないことになる。胸は憐憫に塞がる。『左様なら！』と云ふ言葉のかはりに、涙や、パセチックな執望や、寛恕の懇願や、接吻のやうなものが始まる。和解は麻痺するやうな情慾の流れの中に肉體を融けさす。二人の肉體は抑制しがたい微妙な撫愛の中に纏れ合ふ。涙に濡れた唇は、炎のやうに思はれる。つゞいては、魂を奪はれるやうな氣持になつて來るのであつた。

『何故私達は喧嘩ばかりしてゐるんでせう？』妻は動悸をうつてゐる優しい身體を寄り添へながら言つた。

ツレーネフは彼女を慰めながら、これは單に一時的な痴情であつて、今といふ今はすべてが終り、更新された生活は愛情に満たされて、楽しく心地よく送られて行くだらうと言つた。斯うして二三日の間は——時とするとい週間は初恋の日のやうに過ぎる。十年の結婚生活は夢のやうで、自分が嘗てあれほど苦しんだ、親戚との間にあれほど悶著を起した、

あれほど憧憬れて涙を流した頃の戀しい少女のやうに彼女が思はれる。

太陽は彼等の家に輝いて、子供達は嬉しさうな聲をあげながら、部屋の中を駆け廻つてゐた。これこそ幸福である。これこそ世人が幻想してゐる理想的な永遠の戀の幸福である。

次第に満足を感じて來る。生命を刈込む剪刀の刃に似た以前の倦怠が、再び毒蛇のやうな鎌首を上げる。彼は譯が解らなくなつた。

『俺は妻を愛してゐるんぢやないか……確かに愛してゐるんだ。』ツレーネフは頭を抱へながら考へた。『他の女と換へて堪るものか……俺は決して妻を忘れやしない。考へても見ろ……彼女が他人の所有になるなんて……』

彼はそれを想像しようと思つた。黒痣までが自分にとつては魅力である彼女の優しい肉體は、他の男に抱擁され、他の男に弄ばれてゐる……斯う考へると、頭腦は溢血して、何とも言へないほど息苦しくなる。彼は故意に自分を苦しめて、悪夢のやうな想像を極端に淺猿しい詳細まで進めようとした。併しそれは不可能だつた。——それほど怖ろしいことだつた。

『何といふ事だ？ 俺はたゞ安價な慰安を求めてゐるのだらうか？ 多情のために新しい女の肉體を求めてゐるのだらうか？ 莫迦にも程がある……彼等は三度も呪はれた女ぢやない

か。』

彼等の愛は眞實なものであつて、他に戀人といふものがなかつた。それ故に當然幸福を齎らすべきであるが、その幸福を缺いてゐる。そこで時々他の肉體を求めて、暫く時を経てから歸つて來ればよい事になる。併しこれは不可能な事だつた。彼が若し他の肉體を求めるとすると、彼女も多情の權利を有する事になる。彼が他處へ慰安を求めに行けば、矢張り彼女にも戀人を呼び寄せる事が許されねばならぬ。彼にはこれを想像する事さへ出來ないだらう。

彼は萎れ返つて、自分を犠牲に供さうと決心した。彼は彼女一人を見て、他の女を忘れようと努めた。

斯うして一二週間も過ぎると、更に怖ろしい、更に穢らしい幕が突然に開かれる。子供達や下女や下宿の壁に對しても羞かしくなる。斯ういふ舞臺では、二人は相互に讓歩といふ事を罵り合つて、何方が先きに寛恕を乞うたかを思ひ出す。そして相手の弱點を嘲笑するのである。

年月は永久に實現されぬ、到底有り得べからざる幸福に就いての煩悶に充たされたまゝ過ぎ去つて行つた。聯隊に於ける同僚にせよ、彼が鋭い眼と荒々しい聲で、兒童でも叱るやう

に威嚇する兵卒にせよ、此の毛もくぢや、らかな決斷的な男に、こんな不幸があらうとは疑はなかつた。

『あゝ』ツレーネフは這上つて行く甲蟲を見まもつて、口髭を捻りながら考へた。

上へ這上つては、再び埃の中に落ちる甲蟲を見てゐるのが、彼には苦しくもあつたし、心地よくもあつた。丁度毒性の傷口を搔き捲る病的な快感に似てゐる。

## 十八

チーシユは家に坐つて、巻煙草を巻いてゐた。

太陽は既に沈んで、花園の向うには、夜に限つて治まる塵埃が金色に光つてゐた。涼しい黄昏は開放した窓の外で樂しげに囁いてゐた。樹蔭の綠草ももう黒ずんで、夜露にしつとりと濡れてゐるが、空には未だ太陽の透明な光線が射してゐて、樹木の梢はその光の中に悲しく消えていつた。

チーシユは窓を見なかつた。彼は窓際に立つて、小さな箱を胸に當てながら、匂ひの強い煙草の詰つた巻紙を、一本々々洋机の上に推し出してゐた。

チーシユの部屋は狭苦しくて、窓は僅か一つしかなかつた。白い壁は裸だつた。書籍や雜

誌や假綴の本は、古新聞で掩はれた机の上にも、椅子の上にも、寢臺の上にも轉がつてゐた。室内の亂雑は、落著きのない鋭い顔をして、額の上に毛髪の亂れた、動作の神経質なチーシ、その人のやうである。

洋机オランダの側には身長の高いクラウゼが腰掛けて、斜めな眉毛を上げながら、チーシの器用な指先を注意深く追うてゐた。

『僕はたゞ聽いてゐるのが厭なんです。』チーシは忿怒を帯びた聲で言つた。『そんな泣言は解らない。また解りたいと思ひません。人生の無意義に就いてなら幾らでもお論じなさい。貴方の無氣力に過ぎないと、僕は矢張り言ふばかりです。考へてこらんなさいな、生は迷ふ事も醒める事も出来る我々の戀人です。第一貴方は何んにも使命を受けなかつたんだ。天は貴方といふ者を貴方に任せた。だから工場でも、寺院でも、退屈してゐる女の閨房でも……好きなものを建てる事が出来る……實際驚嘆すべき事だ！』

『それほど人生が無差別なものだと思ふんですか？』メフ・ファストのやうな眉毛を動かしながらクラウゼは詰つた。

假綴の本を下にして、寢臺の上に横はつてゐたミーシユカは起き上つて、箱から落ちたばかりの巻煙草を手にとつた。そして吸口を振斷つて、火を點けると、再び頭を抱へながら寢轉

んで了つた。

チーシは此の醜態に眼もくれないやうな様子をした。吸口の振斷つてある煙草を喫へば、態々自分の指先で振斷るより、何れほど手数が省けるか知れない。

『無差別ではありません……自然には劃然と描かれた輪廓がある。けれども自然との戰鬥に於て、人間は自分の行く道を選択する自由を有つてゐる。我々が生活と名稱するものを創造するのは此の選定です。若し自分の生活が重荷であつて、満足といふものを與へない場合には、他の戦術をめぐらすがい……幸ひにして發見する事が出来たら、我々は勿論満足を得る事が出来る、その意義が明白になつて来る……たゞ奮闘と探索とを重ねる必要がある。泣言ばかり並べてゐるのでは埒があかない。』

『で、何うすればいゝんだ？』ミーシユカは氣がなさうに訊いた。

『何うする？ 何うにもしようがないさ。』ミーシユカが頷した巻煙草の山を無意識に積み直しながら、チーシはアイロニカルな聲で言つた。『理性のある人なら自分の進むべき道位は知つてゐる。かりに知らないにした所で、他人に尋ねはしない。世界は養育院ぢやない。周圍は争鬪ばかりだ、國家は自由のために戦ふ、科學は進歩する、藝術は新しい道を求める……手を拱こまぬいてはゐない。見給へ、人類は空へ昇つて、舊生活を破壊した……君達は寢轉んで、

足を上げながら、何うしようと言つてゐるんだ……將棊を戯つて……莫迦な！」

ミーシユカは瞬きをして、巻煙草の煙を見まもつてゐるやうな様子をしてゐた。

『貴方の主義は正しいのかも知れない。兎に角面白い議論でさ……幸福が自然と奮闘する戦略の選擇にある……』クラウゼは品よく言つた。『併しその手段を探索する義務を人間に負はす権利がありますか？』

彼は眉毛をつり上げて、怪訝さうにチーシユの顔を見た。

チーシユは腹立たしげに煙草を巻いた。

『私が自然との争闘を全然希望しない人間だとして……』クラウゼは相手の返事も待たずに言葉を續けた。『幸福さへも希望せずに……敢て幸福を拒絶しようとする人間だとしますね……』と、私は罪人といふ事になるんですか……何人に對してでもいふです。』

『罪人ぢやない、木偶漢だ！』チーシユは叫んだ。『それは死にかけた人間の言ふ事だ……狂人の言ふ事だ……その上私慾にのみ走つて、人類の向上を無視してゐる人間か、さもなければ……』

『で、私が全然それを無視してゐたら？』クラウゼは落著きはらつて言つた。

チーシユは幾らか狼狽した。彼は恰も罵倒するやうに此の言葉を發した程、何物かを信仰

し、何者かに向つて突進するのを、人間たる者の義務のやうに心得てゐた。『何物をも信仰しない、私慾にのみ走る人』といふのは、彼から見れば、無頼漢とまではゆかなくとも、白痴と言はれるのに等しかつた。これ程の非難を受けたら、大抵な人なら『黙れ！』位の事を叫ぶのが當然であらう。

『僕は第一にこれを信じない……第二に……貴方はた……痴人なんです。』

『それは何方どちかにしてもいゝ。』騎兵少尉クラウゼは威嚴のある聲で遮つた。『さう呼びたいなら、お呼びなさいな。』

『貴方は死人だ！』

『それは違ふ、私は生きてゐる。』矢張り威嚴のある聲で、クラウゼは再び遮つた。

『私は呼吸してゐる——即ち生きてゐるんです。』チーシユは机の上に巻煙草を投げ出して、可笑しさうに笑つた。『併し生存と生活とは意味が違ふ。貴方が自分自身を譏謗しないのであるのなら、祖先から代々傳つて、生の源泉であつた流れが、貴方の肉體の中に涸れて了つたのです……貴方は話す事も、歩く事も、考へる事も、呼吸する事も出来る。併し貴方を掩うてゐるものは生ではない。死です。數百萬の人々に傳つた流れは、貴方の代になつて涸れ、貴方によつて終つたのです。その最後といふのが既に腐敗の初めですから、生きた人々の間

にある腐敗しかけた屍を意味する事になる。クラウゼさん！怒つちやいけない。社會はその利害關係から、斯ういふ人間を撲滅しなければならぬ。」

『それはお勝手だ！』ひよろ長いクラウゼは肩を縮めた。

『こいつは酷いや！』ミーシユカは調停するやうに言つた。

『何んにも酷い事はないさ。』チーシユは荒々しく答へた。『人道は勞役の山を積み、無数の犠牲を齎らし、非常なる勞苦を以て、大建築物の礎を置いた……我々が此の貴重な遺産を受けて、これを子孫に傳へるために……流血の波濤に乗せて、我々を此處まで導き、その大事業を我々の手に委ねた……けれども御覽なさい……意氣地のない奴等は、恐怖や危険に遭遇すると、直ぐに泣言を並べ始める。何處にそんな必要がある。莫迦の骨頂だ。自分といふものを犠牲に供した貴方のやうな大人物は、要するに白痴なんです。』チーシユは此の愚かしさを嘲笑した。けれども彼の嘲笑には快活な所がなかつた。

何故悲しい音楽が、激昂した皮肉な冷笑の中に響くのであらうか。彼はそれを説明する事が出来なかつた。これは殆んど自分にも意識されぬ自覺の奥底に閃いた考へだつた。

『私はさうは言はない。』クラウゼは言つた。『貴方の見地から行けばさうかも知れない、併し私の……』

『若しさうなら……』チーシユは耳も傾けずに言葉を續けた。『他人に觸れることもなく、自分一人で萎れ返つてゐるが……さうするが……。信仰もなく、社會の要もなく、靈魂も人生も無意義なら、鐵砲で額を射貫いて、何處へでも死んで行くが……少くとも眞實だ……空氣は汚れないだらう。』

『それが私の主義でない誰が言ひました？』クラウゼは眉毛を動かしながら遮つた。

チーシユは思はず彼の方を見た。けれども眉毛の斜めな彼の長い顔は、平常通りの落着いた威嚴を保つてゐる。若い大學生の背中はぞく／＼して來た。併し此等の言葉が、冗談や爭論以外の目的のために發せられたとは、何うしても信じられなかつた。

ミーシユカも振返つて、矢張り騎兵少尉の顔を見詰めた。

『すると、自殺しようといふ事になるんですか？』チーシユは態とらしく微笑ひながら言つた。

『この獨逸人の奴め、好きな事を言やがるだらう。』彼はチラリと斯んな事を考へた。

『そんな事になるでせう。』騎兵少尉クラウゼは更に言葉すくなく答へた。彼の顔は見る見る中に冷たく固くなつて來た。恰もチーシユが彼を締めつけてゐるやうに見える。

チーシユは再び狼狽した。併し彼は讓歩するに忍びなかつた。彼は最後まで論理を立てる

積りだつた。

『さうですか……さうなれば貴方の主義も徹底する。』彼は斯う言つて、自分の言葉に驚かされた。

『さう思ひますか？』クラウゼは眞面目になつて訊いた。

チーシユは憤むっとした。何故なれば、これは最後の言葉を強請するやうなものだ。彼を壁に押しつけるやうなものだ。

『さう……さう思ひますね。』彼は憎々しく答へた。

騎兵少尉クラウゼは彼の眼を探るやうに見ながら、少時の間は口を噤んでゐた。チーシユは無意識に顔を反そむ向けて、小箱の中から煙草の巻紙をとり出した。併し煙草巻の上には未だ紙が載つてゐた。

『さう……』クラウゼは奇妙な表情をしながら言つた。彼は立ち上つて、小さな軍帽を手にとつた。

『左様なら！』

『まあ、いゝぢやありませんか。何處かへ行くんですか？』

『私は少時しばらく一人になりたい。』クラウゼは冷やかに遮つて、扉口の方へ足を運んだ。

『まあ、お聴きなさいな。』チーシユは努めて微笑ひながら言つた。『貴方は……』

彼は『立派に自殺なさい！』と言つてやりたかつたのだ。併しそれは餘りに唐突たがひである。餘りに愚である。言葉は喉に絡んで出なかつた。

『お待ちなさい……クラウゼさん……實際これは……』

クラウゼは返事もせず扉を鎖した。

『何うでもするがいゝ。』小さな大學生は物狂ほしく叫んだ。『まるで狂人だ！』

長い間寝轉んでゐて、髪の毛の亂れたミーシユカは、起き上つて、両手で寢臺に凭りかゝつたまゝ、腰を下した。

『些ちらない事を言つてたな。』彼は言つた。

『何を言つた？』

『彼奴は、何時も自殺の事ばかり言つてゐるんだぜ。君は突き落すやうな眞似をやつたんだ。』

チーシユはすつかり腹を立てゝ了つた。

『何處へでも行くがいゝ……併し僕は……僕の知つた事ぢやないさ。自殺するなんて言つてる奴に限つて、なか／＼死にやしないよ……事實だから仕方がない。それより散歩に出よ』

う。』

『うん、行つて見よう。』ミーシユカは気がなまじうに承諾した。

寝て了ふにしても、散歩に出るにしても、何にもしないでゐるにしても——彼にとつては同じ事だつた。

十九

市街は黄昏の蒼白い悲哀に包まれて、物思ひに沈んだ少女のやうに美しくなつて来た。頭上には清らかな星が輝いて、空は殊更に高く高く思はれた。

チーシユとミーシユカは人通りのない街を當處もなく歩いて行つた。

チーシユは退屈だつた。ミーシユカは口を喋んだまゝ、彼と並んで歩いてゐた。何を考へてゐるのだから分らない。街は森然として、窓の暗い家が盲人のやうに過ぎて行く。空は高く、冷たく、よそ／＼しい。閃く星の群は永遠に不可解な物語の世界を靜かに動いて、運命の青白い矢は眞黒な地面に落ちて来る。四邊は森然として、人氣がなかつた。小さな大學生の胸は石に敷かれた蛇の子のやうに惱ましかつた。眼前の闇の中には、依然として騎兵少尉クラウゼの長い白い顔が見える。彼の物々しい聲が聞えるやうな氣もする。

『譯が解りやしない。』チーシユは妙に倦怠を覺えて、苛々しながら考へた。『まだ一年でも二年でも此の呪はれた街に住んでゐるが、もうすこし氣の利いた風をして首を縊るがよい。』

チーシユは平常のやうに此の小さな街を罵倒して、大きな騒々しい世界の幻影を描きたかつた。彼は此の生活に憧憬れてゐるのであるが、何故かそれが退屈な、愚鈍な、そして全く無分別なもの、やうにも思はれてならない。青い靜かな夕暮は不可解な悲哀を漂はせて、陰鬱な散漫な思想を喚び起させる。眼前には三日月形の眉毛を冷やかに釣り上げた、長い白い顔が執念深く現れてゐる。

『ミーシユカ！ 何を考へてゐるんだ？』チーシユは悲しさうに訊いた。

『え？』ミーシユカは遠方から答へるやうに言つた。

『何を考へてゐるのさ？』小さな大學生は繰返して言つた。

『さうか……何でもないよ……將棊の事を考へてゐたんだ。』ミーシユカは無意識に答へた。

『莫迦！』チーシユは腹立たしげに唾を吐いて、虐められた子雀のやうに髪の毛を逆立てた。

『下らない遊戯にばかり凝つてゐると、仕舞ひには狂人になるぞ。』

『多分そんな事だらう。』ミーシユカは無頓著に答へた。

彼等は再び黙々として歩いた。チーシュは空の星を見ながら、生が數多の不可解な謎に充たされてゐる事を考へてゐた。莊嚴な創造の繪巻物は、底知れぬ闇に明るく描かれた、大空の、神秘的な、永遠の記號の中に展つてゐる。ミーシュカは將莖の事はかり考へてゐた。透明な織細いコンビネーションの網は、彼の眼前に編み合されてゐる。彼も矢張り星を見詰めて、あの大きな蒼白い星で、大熊星座から隅の方にある星へ『王手』とやつたら、何んなものだらうと思つた。大星座の秤衡は桂馬の手を想像させた。

彼等は暗闇の中で幾度か肩を衝突けながら歩いた。けれども二人は、一人で自分の事ばかり考へてゐた。二人の考へてゐた事を距離の上に置いて見たらば、肩を並べて歩いてゐるチーシュとミーシュカの間には、彼方の空の寂しい星位の懸隔であつたかも知れない。

『今晚は。キリール・ヅミートリエヴィッチ！』誰だか小さな大學生に聲をかけた。

チーシュは顔を上げて、白い著物を著た女と一緒にゐるミハイロフの姿を見た。彼は氣難かしさうに言つた。

『今晚は！』

程なく彼はこの娘が、自分の教へてゐる子供達の姉であるのに氣がついた。彼は娘を邪慳さうな眼で見て、『この女もか！』と思つた。

彼は自分の考へに還りたかつた。そして今し方までは非常に重大な、非常に興味のある問題に觸れてゐたやうな氣がした。併しそれが何であつたか思ひ出す事は出来ない。彼はその代りに自分の傍を通り過ぎた美しい娘の事を考へ始めた。チーシュは無邪氣に驚いたやうな灰色の眼や、丸々とした肩や、爽やかな姿を思ひ浮べた。

『健康さうな娘だ！』彼は忌々しさうに斯んな事を思つた。

何故か小さな大學生は、彼女がミハイロフと相識になつたのが、急に腹立たしくなつた。

『何うでもしろ！ 俺の知つた事ぢやない。』彼はぶり／＼獨語を言つた。

彼は再び自分の考へに還つた。併しそれはもう以前のものではなかつた。チーシュは偉大なる人生の繪巻物や、その不條理に就いての憤慨の代りに、自分の生活といふものを考へ初めた。彼は初めて自分の生活が灰色であるのに氣がついた。

中學校に通つてゐた時分には、何時も學科に忙しかつたが、大學生になつてからも、學科には矢張り追はれ勝ちだつた。講義も聴いた。プログラムや計畫の事で、友人や反對黨の者と争論もやつた。祕密出版物を工場に配りもした。無趣味な人間を鞭撻しもした。困難や舌勞や動搖も随分に多かつた。併しすべての物は灰色の長い道路へ集つて來たのである。彼は三十歳になるまで此の道路を彷徨うて來たのだが、何のためなのであるか今だに判明し



ない。道路で射撃が始まる、群集が赤旗を翻して行く、すべての物は舊を脱する——此の時などは既う目的が達して、新しい生活が始まるに違ひないとさへ思はれた。併しそれとても一瞬間だつた。程もなく人々は以前のまゝ——寧ろ以前よりも悲惨な生活を送らなければならなかつた。旗揚げの時には人々も全く平生通りの家畜だつた。或はそれ以上だつたかも知れない。革命となるまでは共通の憎悪が彼等を勵まして、心と心を結びつけてゐたが、愈々決定的な時になると、彼等はプログラムに關する些らぬ意見の衝突から、遂には争闘を惹起したのである。プログラム一つが恰も生命のやうに……其後チーシは長い間牢獄に繋がれてゐた。彼はもう労働者の勝利を叫ばなかつた。彼はたゞ無聊に苦しんで、散步廢止に異議を申し立てた。彼の生活は監房の四壁と、哀れな現存の興味に集中せられた。少時経つてから彼は故郷へ追放されたが、社會は路傍に残された哀れな大學生を忘れて、先へ先へと自分の道を進んで行つた。

すべてが終つて、再び未來に憧憬れた生活を送つてゐる今日では、過去の事件が無意義で愚かしく思はれてならない。哀れな微生物のやうな彼が馳せ廻つたり、跳び廻つたりした所で、結局はたゞの滑稽に過ぎなかつたのだ。

希望から希望へ惶急しく移りながら、自分の前半生を過して了つた事が、恰も絶望的な宣

言でも記載されたやうに、彼の頭腦の内部には深く刻み込まれた。最初は中學校を卒業して、大學に入學しようと思つた。次には革命を待ち焦れた。その次には自由の世界へ脱れ出る日の幻を描いた。彼は今警察の監視の期限がきれる日を待つてゐる。併し、いづれは再た何事かを期待して、明日こそ眞の生活が始まるといふ希望を抱きながら死んでしまふのだらう。

殆んど意識では捉へ得ぬやうな考へが閃いた。宜しく無用な休息所を避けて、最後の目的へ突進すべきである。再び闇の中から騎兵少尉クラウゼの長い白い顔が現れて、何處か自分の後方へ招くやうに動いて行く。

## 二十

ミハイロフとリーザ・ツレグロヴァは眞暗な街を歩いた。

弱々しい星の光は少女の顔に映つて、數千年の昔から新しい幸福の約束をしてきた、物思ひに沈んだやうな美しさを彼女の顔に與へた。温かい夏の夜や、胸を騒がす春の宵は、現實的な太陽の光を受けるとお伽噺のやうに消える、若い女の謎を幾度深はせた事だらう。

ミハイロフは眉毛の黒い、無邪氣な眼をした白い顔を見て、夕闇の中で彼女の方へ身體

を凭せかけた。今日ほど愉快な事は今までにもなかつたやうに思はれる、彼は、たゞ此の美しい少女が自分を抱擁して、自分の肉體に快感を與へる事ばかり願うてゐた。彼は此の愛撫になれて、何時も容易くこれを受けてゐるので、抑制し難い接吻の要求に此の時は既う身震ひがしてゐた。彼は何か話さなければならぬのが苦痛だつた。

『何うして私と相識になりたかつたんです？』女ばかりが理解する慾望の神祕的な力を、胸騒ぎに顫へた熱のある私語に集めて、少女の顔へ身體を屈めながら、彼は靜かに訊いた。

リーザは疾うから彼との交際を希望してゐた事を、今し方白狀したばかりであるのに、若い娘の本性として、素知らぬ顔に答へた。

『貴方のお噂を色々伺ひましたもの。』

『誰がそんな事を言ひました？』

『皆なが言つてゐますわ……此處の評判は御自分で能く御存知の癖に……だつて解りやしませんわね。』

『何うして解らないんです？』ミハイロフは彼女に先を言はせようと思つて、訝しさうな顔をしながら訊いた。

『當然ですわ。』リーザは胸を戦かしてゐるらしい。『貴方は藝術家でせう、貴方の事が活字

になりませう……それに……』

『それに何です？』

『あら……星が飛びました。』

『星は何うでもいゝです。』ミハイロフは彼女の無邪氣な狡猾に微笑を洩らしながら、調戲ふやうに手を振つた。『それから何うしたんです？』

リーザは聞えない様子をしてゐた。

『温かい晩ですわね。』

彼女は危く口が滑りさうになつたのに驚いた。しかし彼女にとつては興味ある問題であつて、彼女は此の事を話したくて堪らなかつた。禁制の幕に似た物が、胸を騒がせたり、脅かしたり、招いたりして、たゞ話したかつたのである。彼女の若い無邪氣な心と、娘々した健康な肉體を惹き寄せるある祕密は其處に潜んでゐる。彼女は、ミハイロフと様々な女との關係を訊きたかつた。ネルリの事も訊きたかつた。去年鐵砲自殺を企て、遠く南露西亞へやられた女學生の事も訊きたかつた。暗い罪惡の香のやうに、嚴とした燃えるやうな眼や、心の奪はれるやうな贅澤な衣裳や、誰一人として觀た者のない悲劇の驚異を市民の記憶に残して、一週間経つと街を去つた、ペテルブルグの美しい女優の事も訊きたかつた。

二四四  
リーザはミハイロフの顔や、暗い眼や、太い腕や、きつと結んだ脣を見た。それ等は戀に惱んだ女達の朧ろげな姿と、彼女の想像の中に纏れ合つた。あの脣で接吻したのだ。あの腕で女を裸體にして、あの腕で抱擁したのだ。リーザは彼の顔を見ながら、自分の肉體が女性であるのに氣がついた。不可解な恐怖を覺えた。とりとめもない慾望の起つたのを感じた。彼女の頬はそれがために緋らんで、胸は烈しく動悸をうつた。

ミハイロフには彼女が言はうとして、しかも言ひ得ないでゐる事が解つた。彼はこの娘を暗い罪惡の道に留めて置かうと思つた。

『そんな狡猾い事をしてはいけません。』彼は狼狽へた無邪氣な眼を見ながら、命令でもするやうに言つた。『私には解りますよ、話を變へましたね……貴方には言ひ難いやうな事を言つてゐるんですか？』

彼は少時口を噤んで、態々斯う言ひ加へた。

『そんなら餘ほど酷い事を言はれてゐると思はなければ……』

リーザは當惑した。

『否え……何にもそんな事は……』

『でも矢張り言ひ難いんですか？』

『さうぢやありませんけれど……斯んな事を申して居りますのよ……貴方は……貴方は艶聞が多くて……女といふものを隠分酷く觀ていらつしやるつて。』リーザは身投げでもするやうに思ひきつて答へた。

ミハイロフは彼女の顔を凝と見詰めた。彼の眼は光つて、小さな鼻腔は脹らんだ。

『で、何うお思ひになつたんです……眞實だと思ひですか？』

リーザは清らかに透徹つた眼で彼の顔を見詰めた。

『私分りませんが……眞實のやうな氣もしますわ。』彼女は侮辱された者のやうに、背を伸ばしながら答へた。

『何が眞實のやうなんです？』

『女を女として觀ていらつしやる事が。』

青春と純潔は彼女に力を與へた。彼女は男の眼を隠せずに見た。

『女を女としてとは何ういふ意味ですか？』ミハイロフは彼女を暗い罪の道へ突き放さうとして、狡猾さうに訊いた。

『お解りの辭に……』男の眼前で裸體になるやうな氣がして、少女は無器用に答へた。

ミハイロフは彼女の顔を見て、ぼんやりと微笑つた。リーザはこの微笑の下で、自分が女

である事や、自分には丸々とした肩や、美しい胸や、弾力のある若々しい肉體のある事を強く感じた。男は着物といふ薄い幕を透して、自分の肉體を覗いてゐるのだ。

『他を覗なければいけないんですか？』ミハイロフは鋭い聲で訊いた。

『何うしてですか？』女は人間ではないんですか？ 女にはたゞ……『娘は狼狽へながら遮つた。』

『人間が此際何んです？』ミハイロフは矢張り鋭い聲で答へた。『女としての女に對する戀愛は、女に對する尊敬を無視しますか？ 此處に侮辱を見るためには、もつと女性を輕蔑する必要が有ります。』

『否え、そんな事では……』リーザは當惑した。『貴方の見方は偏頗です……』

彼女は男が不安な争論に自分を誘うて、目的を遂行しようとしてゐるのに氣がついた。けれども彼女は自分の胸を騒がせてゐる談話から脱れる事が出来なかつた。

『それは女次第ですさ。』ミハイロフは遮つた。『私が今までに見て來た女達は、他には何等の功績もありませんでした。女は何時も自分の好き勝手な關係を求めませう……併し私は……私は女にのみ求め得るものを女に求めてゐるんです。若し人間に會ひたいなら、私は誰でもいゝから男の所へ出掛けます。少くとも現在に於ては、男の方が未だ聰明です、より以

上に經驗を積んでゐます、より以上に啓發されてゐます。藝術や科學や政治や……これに類似した事を、私が何で女と論じます？ そんな事を議論したいなら、畫家なり小説家なり學者なりに會ひますさ。私は美や撫愛や快感を女性に求めてゐるのです……私が女を愛するのは美のためです、肉體の……』

彼は妙に人を惹きつける聲で叫んだ。女といふ言葉は罪ある叫びのやうに響いた。男の熱い氣息は少女の頬にふりかゝつた。彼女は興奮した私語に頭腦を眩惑させられて、香氣のある息苦しい霧に包まれてゐるやうな氣がした。

『それは餘りですわ。』彼女は最後まで處女の純潔を守るやうに言つて、嚴とした厭味の無い眼で彼の顔を見詰めた。

『何が餘りですか？』ミハイロフは遮つた。『女といふものは——貴女だつてその一人ですが——戀のために生れたのです。これは自然の法則です。凡庸と愚鈍が泥濘を作らうとしてゐる清い美しい歡喜です。貴女は好きな物を作る事が出来るでせう……科學でも藝術でも好きな事が出来ます。併し貴女は戀をするに違ひない……貴方は若い美しい健康な女ですもの。貴女は何人かに戀をする、何人かを愛撫する……何人かに身を任せる……勿論その男が私である事を願ふ権利……ありますし、またなり得る権利もあります。』

彼は何時の間にか短刀直入になつた。けれどもリーザには解らなかつた。そしてそれに気がつくとも彼女は顔を眞赤にして、美しい髪で冠づけられた頭を俯向けたまゝ、啞のやうに黙つてしまつた。ミハイロフは彼女が冷静に還る間も、腹を立てる間も、二人の間に近づき難い冷情を置く間もあらせずに、自分の言葉を續けた。

『その時になれば、女に就いて貴女と哲學などは論じませんよ。たゞ貴女を抱擁して、接吻するだけです。』

リーザは驚いて身體を震はした。頬ばかりではなく、薄い著物を透して見える恰好のいゝ首までが眞赤に染つた。ミハイロフは餘りに事を急いたので、彼女が逃げ去りはすまいかと思つた。

『怒つたんですか？』彼は忽ち聲を變へて、優しい温かい聲で訊いた。そして身體を屈めながら、蔑すむやうに彼の顔を見詰めてゐる少女の眼を覗き込まうとした。

『怒つたんですか？ 赦して下さい……貴女を侮辱する積りぢやなかつたんです。』

リーザは急に可笑しくなつた。ミハイロフの聲は全く謝罪するやうな、哀願するやうな、そして愁訴するやうな聲だつた。

『さうぢやありませんけれど。』彼女は漸く氣を柔らげて言つた。『何故そんな事を仰しやる

の？』

『何故とは？ 私はたゞ事實を言つただけです。』ミハイロフは力強く答へた。

リーザは當惑したやうに肩を縮めた。

『それを想像するのは差支へありませんまい？ 差支へないでせう？ 何を想像しようとして、それは勝手ぢやありませんか……』

彼女は、男が自分を捉へようとしてゐるのに氣がついた。けれども彼女は脱れ出る術オウを知らなかつた。

『そりや……無論……差支へはないでせう。』彼女は無意識に答へた。

『想像して差支へないものなら、何故ありのままに話してはいけないんです？ 何故嘘いつはりを言はなければいけないんです？ 可笑しいぢやありませんか。私は貴女を接吻したい。だからそれを口に言つたのです。』

『そんなら仰しやい！』リーザは總てを冗談にする積りで呟いた。

『併し實行しないではゐられなくなるでせうね？ さうでせう？』突然ミハイロフは少女の耳もとで囁くやうに訊いた。

彼女は燃えるやうな、男の唇を感じないばかりだつた。彼女は蒸暑い霧に襲はれて、頭腦

が眩々するやうな気がした。禁制の好奇心は恐怖や忿怒の情よりも強かつた。少時の間は、それが興味ある事柄のやうに思はれて、彼女は男がそれをする事を願ひさへもした。恰も深い谷底を覗きたいやうなものである。

『私知りません。』彼女は思はず口を滑らして了つた。彼女は今にも男が接吻しさうなのを知つたのであるが、逃げようとするのでもなければ、男を突き退けようとするでもなく、たゞ全身を隠れるやうに縮めてゐるのであつた。

ミハイロフは逞しい腕で彼女の婀娜やかな若々しい身體を抱擁し、燃えるやうな唇を天鵞絨のやうな頬に觸れて、彼女の唇を捜しながら、物狂ほしく接吻した。彼女は男の胸を両手で突張りながら、更に烈しく身體を藻掻いた。けれどもミハイロフは片方の手で、彼女の柔かい頂を抱へて、濕つた前齒の冷たさを感じるほど唇を唇で壓した。リーザは自覺を失はぬばかりに氣息を喘がせて、絶望的に身體を藻掻きながら、男の胸から脱れると、周章て、垣根の方へ跳び退いた。

『酷い事をなさるのね……よくそんな事が出来ますね？』情性で轉ぶまいとして、しつかりと垣根に掴まりながら、彼女は聲をあげて叫んだ。

帽子は阿彌陀になつた。髪は亂れた。身體は震へて、顔は火のやうに燃えた。心臓は破裂

するやうに鼓動した、彼女は苦しさうに喘いで、今にも泣き出しさうだつた。

ミハイロフは此の時も、彼女が冷靜に還つて、再びよそ／＼しい女になるまでの時間を與へなかつた。

『赦して下さい。』彼は温なしく言つた。『貴女を侮辱しました……赦して下さいね。私は貴女が斯んな……宜しい、私は歸りませう……』

彼は可笑しいほど無邪氣な事を、何だか未だ言つてゐた。餘り男が萎れ返つて温なしいで、リーザには腹を立てる事も出来なかつた。

『私怒つちやぢません……私が悪かつたんです。だけれど、もう斯んな事をなすつちや厭ですよ。』彼女は漸くこれだけの事を言つた。彼女の無邪氣な眼には涙が浮んだ。

『赦して下さいね。』ミハイロフは更に優しく、更に悲しさうに言つて、何事かを再び尋ねるやうに、彼女の眼を下の方から見詰めた。この根氣の強い力は彼女の武装を解かせ、彼女を混亂させて、つん／＼した言葉も全く睨みのない物にしてつた。

『そんなに仰しやらなくつても宜うござんすよ。』彼女は狼狽へながら言つた。『私は怒りやしません……もう澤山です……左様なら。』

彼女は此の時自分の家の門前に、二人が餘程前から立つてゐたのである事を知つた。

『また會つて呉れますか？ 私を赦して下すつたんでせう。そんなら私を赦した證據を見せて下さいな。會つて呉れるでせう？』ミハイロフは彼女の眼を覗きながら、哀願するやうに命令するやうに言つた。

『え……分りませんけれど……お目にかゝりますわ。』彼女は眩惑を覚えて、殉教者のやうに叫んだ。彼女は急に著物を掲げ、頭を振つて、小門の扉を鳴らしながら、宅地の中へ逃げて行つた。

ミハイロフはたつた一人残された。彼は鋭い眼で彼女の後を見まもりながら、其處に佇んでゐたが、少時すると微笑を洩らして今來た道を歸つて行つた。

彼は二人が再會して、彼女が戀に陥る事を知つてゐた。

## 二十一

ドクトル・アルノリヂイは、自分に負はせられた、チェーネチカを慰める責任を、忠實に果した。彼はアルブゾフをすゝめて、郊外にある白樺の林に野遊レクニツクを開かせた。そして指定された日には、未だ日暮れ前に、自身でエヴゲニヤ・サモイロヴナのところへ馬車を寄せたのである。

彼はチェーネチカにすつかり用意をさせた。彼女は平常ポツコウの通り眞赤な服装をしてゐたが、今日は莫迦に著物が軽く、莫迦に透徹つて見える。豊かななよやかな肉體の美しさは、これがために一入明かに流れ出る。陰鬱な冷靜なドクトルさへも、著物の裂目に白く見える彼女の肩の曲線には、思はず眼を惑はかされたのであつた。

『出掛けませうか。』彼は訊いた。

『用意はすつかり出來ました。』若い女は帽子を被りながら楽しさうに言つた。

彼女にとつては蒼白い顔をした二人の女と、この陰鬱な家にゐるのが矢張り苦痛だつた。一人は悶えながら死の訪れを待ち、一人は微笑を洩らすでもなければ、愛想ひとつ言ふでもなく、朝から晩まで氣難かしさうな顔をして働いてゐる。生の漲つた肉體は自由を求め、賑やかな聲の方へ走り、燃えるやうな男の眼に惑はかされた。自分のために野遊レクニツクが開かれて、今日は若い興味ある人達に會へるかと思ふと、彼女はたゞ子供のやうに此の遠足を喜んだ。彼女は華やかな自分の美貌を知つて、野遊の中心になるのが自分である事を疑はなかつた。

彼女が鏡の前で帽子を被つてゐる間、マリヤ・パーヴロヴナは優しい微笑を浮かべながら、彼女の姿を見まもつてゐた。病女優は斯ういふ歡喜よろこびが自分のためには全く亡びて了つた事にも慣れて、別にチェーネチカを羨む心も起らなかつた。併し悲哀を覺えないでもない。彼

女は此の悲哀を顔に現はしたくなかつた。

『先生！』彼女は言つた。『ディーネチカをお預けしますよ。氣晴しをさせてあげて下さいね。御覽なさい、綺麗ぢやありませんか。彼女が面白く遊んだのを知つたら、私だつて嬉しいわ。……氣の毒ね、私と一緒に……』

『マーシャ！ そんな事を言ふのは止して頂戴よ……私厭だわ。』エヴゲニヤ・サモイロヴナは言つた。

彼女はマーシャが死にかけてゐるのに、自分ばかり斯んなに若くて、美しくて、健康であるのが、何となく氣まづかつた。彼女は不可解な感情に苦しめられた。彼女は薔薇色の唇に何時の間にか浮んで、黒い眼に輝いた歡喜の微笑を隠さうと努めた。そして自分は全く遠足を望んでゐるのではないが、たゞ世話好きなドクトル・アルノリヂイの好意を無にしないために出掛けでもするやうな様子を作つた。

『貴女退屈しやしくつて？』彼女はマリヤ・パーヴロヴナに接吻しながら言つた。『そんなら私は行かなくつてもいいわ。』

『否え、退屈なんかしやしくつてよ。行つて頂戴……さうすれば私も満足するんですから。』病女優は強ひて微笑を洩らしながら答へた。

エヴゲニヤ・サモイロヴナは思はず溜息を吐いた、少時の間は遠足のことを考へるのも苦しくなつた。けれども背後に扉が閉つて、悲しい病室を後方にした時には、浴場の冷水のやうに、足の爪先にまで浸み渡つた歡喜の感激を隠してゐる事が出来なかつた。彼女はドクトル・アルノリヂイか陰鬱な老人であるのも忘れて、彼と腕を組んだまゝ、階段を一緒に駆け降りた。

『急ぎませう、先生！ 行きませう、行きませう。あゝ氣持がい……私今日はお酒を飲むわ、唄を歌ふわ、舞踏を躍るわ……何故そんな詰らなさうな顔をしていらつしやるのよ。羞かしくもないの？ 先生！ 今日だけは快活になつて下さいね。』

肥満したドクトルは、彼女の背後で急ぎながら、苦しさうに溜息を吐いた。けれども野原の微風に顔を撫でられた彼女は、黒い眉毛や眼を光らせながら、道々無言の同伴者を頻りに調戲つてゐた。

太陽はもう地平線に近づいて、夕焼の赤い火事の中に揺めいてゐた。沫端の白樺の梢には火の子のやうな斑點が燃えて、緑葉が金色に煌々光る。けれども林の奥の細い幹は、もう青味を帯びて、暗い茂みは相互に密接し合つてゐた。疎らな白樺が太陽に赤く映えてゐる邊には、峻峻な絶壁が川の方へ崩れて、幅の廣い川は砂地の上を物靜かに流れてゐた。川向うに



は葦が青々と茂つてゐる。田舎家の屋根が鳥の巢を亂したやうに雑色をしてゐる。川は眩い反射もなく、極めて滑らかに流れて行く。たゞ銀色を帯びた小波の襲が、砂地に添うて微かに光る位のものだった。

アルプーゾフの馭者は野遊用の洋机デイクを組立て、白い洋机掛でそれを掩うた。側の方にはサマワールが沸つてゐた。小さな釜が藪蚊を追ひながら燻つてゐた。酒肴の入つたトランクが草の上に投げ出されたまゝ轉がつてゐた。灌木林の後方ゴッラには馬具の解かれた馬がゐて、温なしさうに頭や尻尾を振つてゐた。透明な金色の箭のやうな太陽の光線は樹枝の間に射して、林の奥では蜘蛛の巢のやうに入り亂れてゐた。

チーシュとミーシュカとダヴィチュンコは、崖下へ水浴に出掛けて行つた。アルプーゾフとツレーネフとクラウゼとナウーモフは、草原の上で麥酒を飲んでゐた。けれどもミハイロフ一人は、絶壁の上に腰を下して、川の向岸や、點綴された白い百姓家や、夕日を受けて薔薇色に映えてゐる靜かな川面や、水の中に若々しく輝いてゐる學生達の裸體姿を眺めてゐた。

彼は草の上に帽子を投げ捨て、川上の涼氣を胸いっぱい吸つた。そして彼は全身が泡立つた新酒のやうな、森の氣力と輕快に充たされたやうな氣持になつた。

彼は楽しさうな、物思はしさうな微笑を洩らしながら、夕燒の色を見まもつてゐた。彼の

眼前には灰色の無邪氣な眼と、美しい髪を有つ、戀を知り初めた少女の、興奮した綺麗な顔が浮んで來た。不手際な接吻や、初々しい肉體の戰慄や、彼の愛撫から脱れようとする努力が再び思ひ出される。

例の晩から二人は殆んど毎日のやうに密會した。少女は既に彼と戀に陥つたのを知つて、男が抱擁したり、接吻したりするのを別に拒むやうな事もしなかつた。時には可笑しいほど子供らしく、自分で男を接吻するやうな事もあつた。密會の度毎にミハイロフは何時も彼女の怯々した單純な戀に不満を感じながら別れるのであつた。彼はもつと接近したかつた。彼女のすべてを所有したかつた。そして此の先きが何うなるかといふ事は念頭に置かず、たゞ何うして彼女を自分の部屋に連れて來たらよからうかと云ふ事ばかりに、頭腦を悩ましてゐた。自分の部屋で二人きりになりさへすれば、彼は少女が自分の撫愛や要求を拒絶しないだけの確信を有つてゐた。斯う考へただけでも、堪へられない情慾の疲勞に、彼の全身は心地よく震へるのであつた。

少女は訪問を容易に承諾しなかつた。そして清らかな眼を無邪氣に瞪りながら訊いた。

『何故です?』

で、ミハイロフが彼女一人に會つて、自分の作品を見せたいのであると云ふ事を説得させ

た時、リーザは彼の眼を訝かしさうに見詰めた。彼女は自分にも原因の解らぬ悲哀かなしみを覺えた。彼女の睫毛には涙が浮んだ。

彼は遂に説き伏せて了つた。リーザは明日の訪問を約したのである。

明日は彼女が訪れて来る、周圍おたけには誰一人ゐない——ミハイロフの胸には、未だ誰にも帯を解かない彼女の初々しい肉體や、丸々とした腕や、恰好のいゝ足や、初めての情慾や、羞恥に曇つた眼が浮んで来るのであつた。彼は痙攣的に指を握りしめた。髪の毛もとから、心地よい程度に痛んでゐる膝のあたりまで、彼の全身に漲つてゐたのは誘惑的な肉慾の衝動であつた。

彼は川の上に腰を下して、彼女の事を考へてゐた。彼女の裸體姿も想うた。著物を脱ぎかけた姿も想うた。寢臺の上に横はつた姿も想うた。彼の膝に凭れかゝつた姿も想うた。けれども彼の全身は夕日の柔しい温暖おたかみと、濕氣を帯びた川の涼氣に浸されてゐた。

高い話聲や車輪の響きが聞えた。鈴を振るやうな女の笑聲が、急に夕暮の森の靜寂しんじやくを破つて、物思ひに沈んでゐるやうな川の方へと消えて行つた。

ミハイロフは好奇の眼を瞠つた。

緑色の草原の上に集つた男達の中に、すらりとした女の姿が眞赤な一點のやうに浮んだ。

髻だらけなツレーネフは身體を屈めながら、差し伸ばした彼女の手に接吻した。片方の手は大學生のダヴィチェンコが握つてゐた。眞赤な著物を纏うた彼女の婀娜なまなまやかな姿は、二人の男の間に磔刑はりつけにでもされたやうだつた。彼女は綠草の上に立つて、薔薇色の生々した顔の黒い眉毛や眼を光らせながら微笑んだ。

『私一人きりなのね。』周圍が男ばかりで、女が一人もゐないのに幾分か當惑しながら、彼女は快活に言つた。

腋下に汗の滲んでゐる帆木綿の背廣を著たドクトル・アルノリヂイは、彼女の背後に元氣なく突立つてゐた。彼は近づいて來たミハイロフをエヴゲニヤ・サモイロヴナに紹介した。

若い女は潤んだやうに光つてゐる眞黒な瞳で、彼の顔を物好きさうに見ると、すぐに顔を反向け笑ひ出した。彼女は長い眞赤な裾に纏れながら、何處へゆくのだか、轉びさうになつて駈けて行つた。そして水浴びをするのだと言ひ出した。

『併し溺れやしませんか？ 此處はかなり深いですよ。』ひよろ長いクラウゼは訊いた。

『大丈夫よ……私お魚のやうに泳ぐわ……だけれど此處に脱衣場はないの？』

『まあ私達に信賴なさいな。』ツレーネフは言つた。彼の暗い眼は輝いてきた。

『餘り信賴も出來ませんよ。』ダヴィチェンコが言つた。『貴女は、僕等の掌中にあるんですか』

『よくつてよ。』ジューネチカは黒髯を狡猾さうに振つて、彼を指先で脅かした。そして四方から浴びせられる冗談を臆面もなく相手にしながら、著物を捲り上げて、絶壁の方へ駆け出して行つた。

彼女の不意の出現や、眞赤な著物や、白い肩や、黒い眼の輝きに、彼等の心は奪はれて了つた。そして彼女の姿が絶壁の向うに隠れて了ふと、男達は強ひて遠慮深く川から顔を反向けて、長い間口を噤んでゐた。

併しだん／＼に落著いて来て、彼等は洋机の椅子に腰を下した。ナウーモフは跡切れてゐた談話を再び續けた。

『そんなら自殺は卑怯である、不自然な現象であると言ふんですね。』彼は戦闘に臨んだやうに髪を逆立てゝゐるチーシユに向つて、忿怒を帯びた鋭い聲で言つた。『私には肯定する事が出来ない。勿論非難が出来ないと同様に、自殺を讃美する事は出来ません。兎に角生命を絶つには意志の力を要します。現世のあらゆる死の中で、最も自然なのは何です……自殺ぢやありませんか。』

假令無益な謔言であるにしても、神経を激引させる彼の熱辯には、すべての者を謹聴させ

るだけの何物かが潜んでゐた。彼の荒んだ異様な眼は薄氣味悪く光つた。

『蓋し僻論だ。』チーシユは茶碗を引きよせて、氣難かしさうに言つた。

『僻論ぢやない。』ナウーモフは鋭く遮つた。『自然の法則にせよ、すべての死は不自然です。人類に加へる暴力です。この點で自由なのは自殺ばかりです。若し生に執著しながら、私が死んで了ふのなら、それは自然とは言はれない。併し生を全然無意義なものとして、これを單純に厭惡する時、私が心の欲するまゝに死んで了つたら、それを不自然な行爲とは言へません。』

『解らないかな。』チーシユは鈍感な相手に平凡な眞理でも説明するやうに言つた。『自然不自然は非論理的な最後にあるのぢやありません。貴方が人生を嫌惡するなら、自殺は勿論正當でせうさ。併し生きた人間が死を希望するのは第一不自然だ。病人か、狂人か、臆病者か、常規を逸した者でもなければ、額を射貫いたり、首を縊つたりする事を考へる理由がない。』

すべての者は小さな大學生の言葉に耳を傾けた。そしてナウーモフの反駁を待設けてゐた。たゞ騎兵少尉のクラウゼ一人は、斜めな眉毛を傲然と釣り上げながら、眞面目な顔をして、冷やかに見てゐた。そして將棋に心を奪はれてゐるミーシユカは、亂れた髪を掻き撈り

ながら、林の方を見詰めてゐる。

『不合理も甚だしい。』ナウーモフは痛みでもするやうに唇を引いた。『人生がその本質に於て不幸なものである事を、苦い経験によつて肯定しながら、従来彼等は死が救極であるのを知らなかつた。無益な苦痛を永遠に断つために用ゐ得る良薬である事を知らなかつた。生に執著する事が何うして自然です？ 謎であり苦痛であるがために死を怖れるのは道理です。併し彼等は生に執著してゐるんです……私には解らない。幸福な人生といふものを見たことがありますか？ 恐らくありませんまい？』

『何うして！』大きな肩を縮めながら、ダヴィデニコは怪訝さうに言つた。

『貴方が見たんですか？』ナウーモフは彼の方を向いた。『私は見た事がない。幸福な戀愛を見た事がない。幸福な結婚を見た事がない。自分の運命に満足してゐる人間を見た事がない。病患や苦痛や嗚咽を知らぬ人間を見た事がない……貴方は見たんですか？ あるなら私に見せて下さい……私は何時でも自分の理想を捨てる。』

『貴方に理想があるんですか？』こいつは面白い。』チーシは調戲ふやうに言つた。

ナウーモフの言葉は彼を激昂させた。小さな大學生は、何故か自分が不幸な青年である事も、苦悶しない日や、幻想を描かない日が、一日としてない事も忘れて、危険思想を抱いて

ゐる此の愚かな男を嘲笑し、彼の思想を論破してやるのを自分の義務のやうに思つた。

『ありますとも。』殆んど掴み得ないやうなアイロニーを見せて、ナウーモフは彼に頭を下げた。『若しお望みなら、私の理想を述べませう。』

『こいつは聴きものだ。』チーシは嘲弄するやうに鼻を鳴らした。

『私の理想は人類の撲滅です。』小さな大學生の嘲弄などには耳も貸さず、ナウーモフは自信のある聲で言葉を續けた。

『驚いた！』チーシは斯う叫んで、憤激のあまり立ち上つた。『何を言ふんだか譯が解らない。』

ひよろ長いクラウゼは更に眉毛を釣り上げて、素早くナウーモフの方を振り向いた。

『何のためにです？』

ナウーモフはクラウゼの顔を見詰めた。恰も騎兵少尉の長い白い顔に、他人が氣のつかぬ物を見てゐるやうである。

『私は自分の考へを言ふ。自分の信する所を言つてゐる。何のためにですつて？ 無意義な苦痛を絶たせるためにです。人類は數千年の昔から生存してゐる。幸福に對する愚かなる希望は彼等を數千年の間扶養し、彼等の生命を維持せしめた。人生の眞の意義より見れば、

幸福の如きは到底あり得べきものでない。幸福とは昏睡を意味する事になる。苦痛や缺乏や恐怖を知らぬ人間は終に努力を忘却して了ふ。苦痛の中に向上することを忘れて了ふ……そして牡豚のやうに、愚圖々々歩いては横になる。人類は苦痛によつて動かされてゐる——これは周知の事實です。幸福があるなら、私の眼前に出して御覽なさい。私は決して其處へ赴かない。我々は幸福を追ひ廻してゐます——これが我々の全生涯です、人類は何が故に斯の如き苦悶を続ける？ 世界の歴史は鮮血の絶間ない流れです。悲哀、苦痛、病患、怨恨——人間の幻想の中に存在する暗黒なるものゝすべて——これが人間の生活なんです。人類はその怖るべき事を、もういゝ加減に知つてもいゝ時分だ。過去數十億の人間が経験して來た永遠の苦痛を掃蕩する力のない事を、もう知つてもいゝ時分だ。人類は理性を失つてしまつた。苦痛の中に身體を縮め、日毎に自分の生存を呪咀しながらも、生命を維持しようと努めてゐる。何の事です？ 獸性と言はうか、痴愚と言はうか、傲慢なる惡魔の狡計とでも言はうか？』

『幸ひにも、これが貴方の主義に必勝的に反抗する性慾といふものですさ。』チーシユは憎々しく言つた。

『残念ながらそれは事實です。』ナウーモフはきつぱりと言つた。『ある忌はしい力は我々の心に本能といふものを與へました——我々の呪詛も其處にあるんです……併し人類は空しく時を過しはしなかつた、空しく本能と戦ひはしなかつた。若しこれが本能であるなら、直ちにこれを撲滅する必要がある。』

『人類を改造しなければならぬのも、このためなんです。』ダヴィチェンコは激昂して言つた。

『必要があるなら、改造もやりますさ。』ナウーモフは落著きはらつて言つた。

チーシユは苦笑ひした。

『併し何のために？』彼は苛々しながら叫んだ。

『無意義な苦痛を絶つためである事はもう言つた筈です。』

『不成功に終る事は請合ひだ。』小さな大學生は眞面目になつて言つた。

『何うしてさう思ひます？』ナウーモフは俯向いたまゝ、ゆるやかに訊いた。

『何故といつて、性慾は根絶されずまい。草にも蟲にも本能はあります。如何に狡智な文句でも、これを掃蕩する事は出来ずまい。』

『文句ぢやないです。なるほど根絶されないかも知れない。併しそのかにはりには自滅します。』

『貴方の話ばかりは、何が何だか些とも解らない。』チーシは怒りきつて叫んだ。

『すべての物は滅亡します。』ある暗い信念をもつてナウーモフは答へた。『すべての物は生長する、満開となる、そして散つて了ふ。法則が斯うです。貴方は何故靈魂をこの法則から除外します？ 頂點に達し、凋落を來して、沼澤の霧のやうになる時も、早かれ晩かれ到來する。人間はすべてが厭になつてしまふ……相互の争闘を何時まで喜んでゐられます……永遠に政變を繰り返し、繪畫を描き、患者を癒し、書物を著し、塑像を捏ね、劇場を建て、田畑を耕し、煉瓦を固め……何時まで生き存らへて……考へて御覽なさい、第一退屈で莫迦らしい。人類の活動する原野も遂には荒地となる時機が到來する……人間は氣散じに鐵砲を射ち合ふ、群をなして水に溺れる、首を縊る、絶壁の上から身を投げる。母親は妊娠して、不必要な不利益な赤兒を養育するのを苦痛に思ふ……一人として自分の子供に幸運の恵まれてゐる事を信ずる母がない……幸福に満たされてゐる搖籃の中にさへ、彼等はたゞ來るべき不幸や、苦痛や、病患や、痴愚や、墮落を見るばかりです。彼等は無情にも出産を忌避する、そして生れたばかりの子供を其場に投げ捨てる。』

ナウーモフの聲は鋭く響いた。彼の荒んだ眼は眞黒な炎のやうに燃えて、遠く人間の運命を見るやうに、聽者の頭越しに見てゐた。神の激怒といふ事で暴民を威嚇した豫言者達も

斯んな眼をしてゐたに違ひない。

彼等の胸には惡寒が射して來た。物怖ろしくもあつたし、何となく不安でもあつた。チーシもへも氣難かしさうに眉毛を擡めながら、口を噤んで了つた。世界に響くべくして響かなかつた、恐らく人の口には乗るまいと思はれてゐた眞理が、突然彼等の前に現れたのである。彼等は夫れ夫れに自分達の生活を顧みた。何れほどそれが哀れな薄暗いものとなつて、彼等の眼前に現はれた事だらう。

『私は生に宣戰した。』ナウーモフはきつぱりと言つた。『私はこれを認めない。否定してゐる、呪咀してゐる……私は血塗れた惡戯の中止を絶叫する……從來人類のあらゆる事業は生の支持とその永續を目的としてゐました。人生を讚美し、靈魂を不滅なりとなす者は、人類の恩人の如くに思はれてゐた。寺院や記念碑は彼等のために建てられたのです。私は彼等を人類の仇敵とする。名譽も良心もない反逆者と呼ぶ……絶間ない責苦に、苦痛に、死に……人類を殺戮に導くのである事を知らなかつた筈はない……思想家、豫言者、詩人、學者——みんな呪ふべき人間です。彼等は我々に幸福を夢想させる、怖ろしい事實の前に眼を閉ざす事を教へる。恐怖と嫌惡とを起して、永遠に生を見捨てるために、我々が眼を開かねばならぬ時、彼等は我々に信仰といふものを強ひた。』

『お聞きなさい。』チーシュは殆んど病的に叫んだ。『辯護士ぢやあるまいし、何を言つてゐるんです？ 滑稽だ！ 誰が貴方の談話に耳を傾けます？ 誰が貴方などを信じるものか！ 何のためにそんな思想を抱いてゐるんです？』

『一千年も経つて私が眼を覺したら、此の小山の上には軍隊屠殺場を見るでせう、彼處の川岸には憔悴した労働者に満たされた工場を、此の林の中には墓場か療養所か瘋癲病院を……その時になつたら斯んなことを言へるかも知れない。』私の言葉に間違ひはありません。しかし貴方がたは耳も傾けなかつた……自分の胸を譴責なさい。』併し貴方の説にも一面に於ては眞理がある。私はあまり興奮した……今日は争論しに來たんぢやない、遊びに來たんでしたね。最早いゝ加減に止めませう。』

ナウーモフは口を噤んで了つた。

緊張した沈黙は長い間続いた。陰鬱な言葉は様々な想像や幻想や痙攣的な思想の瞬きを彼等の胸に起させた。恐らく彼の説に同意した者はあるまい。狂氣と妄想を認めずに過ぎないだらう、けれども此の言葉の中には、秋の落葉が風に弄ばれるやうに、不安な心を蒼ざめた人々の胸に擾亂させる何物かあつた。

『何と言ふんです……その理想は？』

チーシュが最初に沈黙を破つた。

『人道主義ですさ。』ナウーモフは忽ち遮つた。

『人道主義が聞いて呆れる。』小さな大學生は憎々しく言つた。『人間に自殺を勧告する人道主義か。』

『世界には、人間が數限りなく生存してゐる……それが數十億人であるとしても構はない……まあ、何れほど不幸な人間が來世紀に於ける自分の順番を待つてゐるでせう。此の苦悶してゐる無數の畜群を想像する事が出來ますか？ 彼等は宇宙の果からやつて來るのであらうが、彼等の頭の中に林檎の落ちる事はまづあるまい。私は彼等のために人類撲滅論を唱へるのです。私は自分の主義が、人類の頭脳に嘗て浮んだ事のない最も人道的なものである事を信じてゐます。』

チーシュは両手を擴げた。

彼の頭脳の内部には、數多の論駁が忙しく馳せ廻つた。何の一つをとつたところで、この病的な謔言を論破するのは容易いことのやうに思はれた。けれども、言葉が出て來ない。團體や、平等や、自由や、社會主義の勝利に關するチーシュの知識は、全く此の場合に適用すること事が出來なかつた。なるほど、ナウーモフの主義には理論はあるけれども、生きた人

間の肉體といふものがない。此處ではたゞ肉體から——獸類のやうな單純な生の歡喜から反駁しなければならぬ。そして、小さな大學生は、斯うした言葉を見出すことが出来なかつたのである。

『全くだ！』燃えるやうな眼でナウーモフの顔を今まで黙つて見詰めてゐたアルプーゾフは、突然に口を開いた。『世界の八方から火を放つて、風の勢に任せるが……つく……世の中が厭になつた。』

『それは口だけですさ。』チーシユは薄い唇を震はさぬばかりにして遮つた。『貴方がたは皆な人生を呪咀する。併し喉を痛めでもすると、直ぐ醫者の所へ駆けつけるんだ……その時になれば前言は綺麗に忘れて了ふ。』

『それは反駁にはなりませんまい。』騎兵少尉のクラウゼは細い眉毛を釣り上げながら冷やかに言つた。

『勿論の事です。』暗い眼を光らせてナウーモフは懶げに答へた。『死の怖るべき事は既に言つた筈です。それが法則です。嘗て私は自分の思想によつて熱誠を極端にし、自殺に對する熱望を人々の胸に喚び起させようとした……しかし自殺は餘りに困難である、餘りに苦痛が多い……他の手段を選ばなければならぬ。そんな手段が発見される時も來ませうさ。既に

に生活してゐる我々にして見れば、光榮ある未來を約束して、無智な人間を欺いたり、更に不幸な者を出したりしなければいゝですさ。』

チーシユは再び口論を始めた。彼は恰もナウーモフの言葉が、自分自身にさへ隠してゐる弱點にでも觸れたやうに激昂した。ナウーモフは黙つてゐた。騎兵少尉クラウゼは眉毛を動かしながらチーシユに反駁した。ドクトル・アルノリヂイは脂ぎつた臉の中に隠れてゐる不可解な賢しい眼で、二人の顔をかはるくに見くらべた——何方に味方してゐるのだから分らない。

## 二十二

チーシユとナウーモフとの論争を聴きながら、ミハイロフは深く物思ひに沈んでゐた。そしてナウーモフが口を噤んで了ふと、苛立つた鷓鴣のやうに相手に喰つて掛る小さな大學生や、騎兵少尉クラウゼから顔を反向け、突然胸の内部に騒ぎ始めた不可解な哀傷に耳を傾けてゐた。此の奇妙な狂人は彼の胸に一種の病的な感情を喚起させた。彼は物怖ろしくなつて來た。緑色の林や、黄昏の明るい空や、靜かな川の蔭から、眞黒な幻影が現れて來たのである。



争論の聲は微かに揺れてゐる白樺の細い枝の下に鋭く響いた。ミハイロフと並んで川の方を眺めてゐたミーシユカは、急に身體をもじく／＼させて、顔の色を赭らめた。ミハイロフは無意識に彼の見てゐる方へ視線を向けた。彼は今までの考へが一瞬間の中に跡方もなく消えて、全身の血潮が一時に頭脳へ昇つて來るのを感じた。

白樺の白い幹の間に、川岸の砂地や、太陽の最後の光線を受けて薔薇色に映えてゐる川面や、砂の上に脱ぎ捨てたジューネチカの眞赤な著物や、裸體のまゝ川岸に立つてゐる彼女の姿が、恰も繪畫のやうに判然と見える。

彼女は遠くから見られてゐるのに氣がつかぬらしい。首に絡つた黒髪から、水際に近い薔薇色の足の爪先までを見せて、夕日の光を浴びながら、落着きはらつて砂の上に立つてゐる。白い細い腕は指先に黒髪を絡めたまゝ、頂のあたりに組まれてゐた。眞中に肉感的な優しい曲線のある婀娜やかな背中は幾分か前の方に屈んでゐるが、頭だけは遠く此方岸の先方を見詰めてゐるやうに、後の方へ振り返つてゐた。

ミハイロフはすべての物が黒ずんで來て、周圍に融け合つて行くのを感じた。すべての物は瞬間的な興奮と歡喜に燃えた彼の眼前に、彼女一人を残して消えて行く。滑らかな砂地に立つてゐる、髪の黒い、薔薇色をした裸體の女ひとりを残して……。

彼は誰かが自分の方を見てゐるのに氣がついて、漸くこの恍惚状態から正氣に返つた。アルプゾフの暗い眼が、妙な表情をしながら彼の方を見てゐる。

『見給へ、畫家が見惚れてゐるぜ。』彼は皆なに聞えるやうな聲で言つた。

ミハイロフは眞赤になつた。彼はアルプゾフの聲の中に何か侮辱に似たものを感じた。彼は何故か皆なが彼女の姿を見るのを快く思はなかつた。けれどもクラウゼとツレーネフが彼の眼を追うて、周圍を見廻した時、川岸にはもう誰も見えなかつた。川は靜かに暮れて行つた。水面の輪も鎮まつて、彼方の岸にはもう夜の霧が降りてゐた。太陽は沈んだ。

間もなくジューネチカの姿が現れた。最早彼女は眞赤な著物をつけて、微笑を浮かべながら歩いて來た。彼女の頬は冷たい水にほんのりと焼けてゐた。全身が爽やかに匂ふ。眞赤な衣の下に隠された弾力のある胸の上部が著物の間に見える。

『此處の水浴はほんたうに氣持がいいのね。皆さんには解らないでせう。』彼女は遠くから樂しさうに言つた。『お茶を頂戴！ お茶を……私喉が渴いて死にさうだわ。』

彼女はコップを受取つた。エヴゲニヤ・サモイロヴナは洋机に身體を屈めて、一同を潤んだ黒い眼で伏眼に見ながら、チビリ／＼と啜るやうに茶を飲んだ。

『あんな大きな聲で、まあ何を議論してゐたの？』彼女は訊いた。

『人間の運命に就いて。』チーシュは皮肉に斯う言つてナウーモフの方を嘲けるやうに見た。  
 『まあ、人間に就いて！』エヴゲニヤ・サモイロヴナは笑ひ出した。『そりや些と問題が大き過ぎるわ。自分の運命でも論じた方がいゝぢやありませんか……私の母はツイガンよ……だから私は賣トを知つてゐるわ……誰方か占て上げませうか？』  
 『僕が貴女を占て上げます。』ダヴィチュンコが遮つた。『手をお貸しなさい。』  
 『貴方知つてゐるの？』

『ちよつと觸れば直ぐに解りますさ。』小さな爪を綺麗に剪つた彼女の薔薇色の手を取りながら大學生は言つた。居合した人達は薔薇色の小さな掌を無意識に見た。その上には面白い筋が可愛らしく亂れてゐた。

『えゝ、結婚はなさいません。』ダヴィチュンコは賣ト者のやうな口調で、顔を擧めながら言つた。『百歳までお生きになります……戀をして……えゝ、幾人も夫を持ちますね。』

『夫を幾人も？』ジーネチカは笑ひ轉げながら言つた。『だつて結婚しないつて言つたぢやありませんか。』

『だから結婚はしませんさ。』小露西亞の女のやうなアクセントをつけてダヴィチュンコは遮つた。『けれども夫は幾人も出来ませぬ……一人……二人……三人……四人……六人……十

人……十五人……二十一人……。』

『随分ね！』ジーネチカは手を振り放して、狂女のやうに笑ひ轉げた。

『筋がさう示してゐるんだから仕方がありませんよ。』

ひよろ長い騎兵少尉クラウゼは草原の上を黙つて歩いてゐるナウーモフの方へ近づいた。四邊はもう暗かつた。今しがたまで燻つてゐた薪も、物思ひに沈んだやうな白樺の下枝に、鈍い光をチラ／＼投げてゐる。騎兵士官の長い白い頭も、このチラ／＼する光の中に、赤く映つた顔の半面を擧めてゐるやうに見える。

『ちよつと。』彼は冷やかな聲でナウーモフに言つた。『貴方の思想をもつと詳細に亘つて論じたいのですが。』

ナウーモフは彼の顔を探るやうに見て、少時何事かを考へてゐた。

『全體何が解ればいゝんです？』彼は無愛想に訊いた。

『今日には限りません。この次に伺ひませう。』騎兵少尉は斯う遮つて、ナウーモフから離れた。

ナウーモフは物思はしげに彼の後姿を見送つた。

闇は漸々に濃くなつた。白樺は一つの物怖ろしい塊の中に融けて行つて、楽しい林も何時

の間にか眞黒な密林のやうになつて了つた。幹のあたりに明るい顔が怪しく見え隠れする。硝子製の笠の中に蒼白く燃えてゐる蠟燭の光を、眞黒な影法師がチラ／＼させる。

エヴゲニヤ・サモイロヴナは笑ひ轉げたり、鈴のやうな聲をあげたり、男達に調戲つたりしながら、草原の上を駈け廻つてゐた。影の中に入ると眞黒になるが、焚火の傍に現はれる毎に、彼女の眞赤な著物は鮮血のやうに燃え上つた。笑聲は静かな森の中に遠く響いて行つた。

『見給へー 見給へー』闇の中からミーシュカが叫んだ。

彼の突立つてゐる絶壁の上から、村落の焚火が手に取るやうに見えた。川越しに人聲が聞える。何か唄を歌つてゐる。此處で聴いてゐると、それが如何にも悲しい美しい曲のやうに思はれる。眞黒な影が焚火の中にチラ／＼して、炎は消えて了つたり、星のやうに煌いたりする。

『何でせう？ 綺麗ね！』エヴゲニヤ・サモイロヴナは絶壁の端まで駈けて来て叫んだ。

對岸の焚火の光りは、怖ろしいほど大きく冷たく見える眞暗な川を越して、彼女の赤い著物や、眞白な顔に光つてゐる黒い眼を微かに照らす。

『さうだ。今日はクパーラのお祭だ。』ダヴィチェンコが思ひ出した。『僕等も火渡りをやらう

ぢやないか。ミーシュカ、やらう！』

『よませうよ！』ジューネチカは闇の中で命令するやうに言つた。『それより村へ行つた方が何れほど面白いかわれないわ……私未だ一度も見つた事がないのよ……イワン祭の晩の焚火を……』

『そんなら川を跳び越さなければ。』ダヴィチェンコが調戲つた。『さあ、いち……に……』

『渡船で行けるがな。』アルブゾフが暗い聲で言ひ出した。『渡船がありますよ。』

『行きませう、行きませう……ねえ貴方……私貴方を可愛がつてあげるわ。』ジューネチカは夢中になつて彼の手を掴んだ。

『ほんたうに可愛がつて下さい。』アルブゾフは暗い微笑を浮かべながら言つた。そして森中に響くやうな聲で叫んだ。『パーヴェル！ 渡船を呼ぶんだ！』

砂や小石を水の中に蹴落しながら、馭者が川の方へ降りて行くのが聞える。

『わ……た……た……し……わ……た……し……』下の方で馭者が叫んだ。

『オ……イ……オ……』遙か中流のあたりで聲がする。

『ダヴィチェンコ、君にやつて貰はう。』ミーシュカが言つた。

體格のいゝ大學生は絶壁の所にやつて來た。彼は兩手を口にやつて、向岸で反響のするほ

ど大聲に叫んだ。

二七八

『オ……イ……此處へ来るんだ！』

『貴方……耳がガンとするわ。』ジューネチカは笑ひ轉げた。

『ア……ア……ア……ア……』何處かで嚇すやうな反響がする。

『反響が……』アルプーゾフは證明するやうに言つた。

向岸では唄が靜かに續いてゐた。炎の舌が煌いたり消えたりする。川は廣さと謎のやうな力の冷氣を吹き送る。何か黒い物が岸を離れて、明るい水を切つて来る。

『何だか氣味が悪いわね。』エツゲニヤ・サモイロヅナは言つた。

渡船は漸々に黒くなつた。動いてゐないやうでも、漸々に形が大きくなつて、船と岸との間の明るい水面は次第に狭まつて來た。船綱の音がする。船頭の荒々しい聲が聞える。

彼等は川の方へ降りて行つた。エツゲニヤ・サモイロヅナは笑ひ轉げながら、傾斜面から落ちさうになつた。

『捕へて……落つこちるわ！』彼女は聲をあげた。

『手をお出しなさい！』姿は見えないが、ダヴィチュンコが低い聲で言つて、彼女の方へ熊のやうにやつて來た。

『お、君をね……』何處かでツレーネフが言つた。彼も下の方へ降りて來るらしい。何故なれば土塊が周圍に飛び散つて、小石が水の中にボチャ／＼落ちて來た。

眞黒な渡船は軌りながら著しく岸の方へ傾いた。彼等は笑つたり、冗談を言つたりして、足下に動揺れてゐる朽れた船板の上に跳び乗つた。顔の見えない眞黒な船頭が、しつかりと船綱を引擱んだ。船は軌るやうに鳴つた。船と岸との間は次第に廣くなつて、再び明るい水面が其處に見えた。

『沈みはしないでせうか？』冷たい水底を物好きさうに見ながら、エツゲニヤ・サモイロヅナが訊いた。水面には蒼白い星の光や、焚火の眞赤な炎が流れてゐる。

唄は愈々高くなる。既う小露西亞民謡ののんびりした文句が一言々々聞き分けられる。パスが響く。女の甲高い聲がすべてを集めてゆく。焚火は物狂ほしい炎をあげながら燃える。薔薇色に映えた百姓家が、薄暗い水を見詰めながら川岸に立つてゐる。

彼等が焚火の傍まで來た時、唄は突然びつたりと止んで了つた。炎に照された數十人の異様な顔は、不思議な闖入者を八方から見詰めてゐる。好奇心に驅られた、敵意を有つたやうな眼は、彼方にも此方にも闇の中に光つてゐる。

『あら、何うしたんでせう……皆な驚いてゐるのよ。』エツゲニヤ・サモイロヅナは恍惚して

言った。

二八〇

見捨てられてゐた焚火は見る／＼中に燃え上つた。薪はパチ／＼割れた。花飾りをした姿が可憐にも野鄙にも見える若い男女は、ちつと口を噤んだまゝ、闖入者を見詰めてゐる。此方も一塊になつた。美々しく著飾つた、質樸な夜の場面に相應あはしくない連中は、自分の處置に窮して、頗る手持不沙汰だつた。ダヴィヂェンコが先づ進み出た。

『諸君！何うしたんだ！』彼は叫んだ。『踊つて呉れなくちや……エヴゲニヤ・サモイロヴナ……さあ……』

若い女は微笑んで、男の蔭に隠れた。眞赤な焚火の炎は、眼のキラ／＼光つてゐる彼女の美しい顔を照らした。彼女の顔も何となく荒すんで見える。身體にびつたり合つた赤い衣を著け、綺麗に磨かれてゐる女靴を穿いた都會の女ではなく、恰も凄艶な夜の怪しい女のやうに思はれるのであつた。

『さあ、何うしたんです……さあ！ ミーシユカー！ 君が跳ぶんだ！』ダヴィヂェンコは叫んだ。『君からやるさ。』何處か後の方でミーシユカーが答へた。

體格のいゝ大學生は駈け出して行つて、見事に炎を跳び越した。ミーシユカーも不意に跳び出て来て、羽毛よりも軽々と焚火を跳び越えた。

『さあ、エヴゲニヤ・サモイロヴナ！ 貴女の番ですよ！ 跳べない事があるもんですか。』闇の中から戻つて来たダヴィヂェンコは、氣息をきらしながら叫んだ。

彼女は微笑つた。彼女の眼は希望と怯懦に光つた。

ひよろ長いクラウゼは進み出て、難かしい顔をしながら焚火の方へ駈けて行つた。そして眉毛を釣り上げながら躊躇ためらうてゐたが、聽て鶴のやうな恰好をして炎を跳び越した。

笑聲が起つた。

此の時エヴゲニヤ・サモイロヴナは、誰かに突き飛ばされでもしたやうに、黒い靴下や靴の見えるほど裾を掲げて、軽々と炎の方へ駈けて行つた。眞赤なものが跳び上る。火の子が地面に落ちる、靴下の上の薔薇色の素肌がチラリと見える。彼女の姿は勝利の笑ひのやうに再び燃え上つた炎の向側へ消えて了つた。

『見事！ 素敵！ プラーヴオー！』ダヴィヂェンコもツレーネフもミーシユカーもその他の連中も聲をあげた。

これが障碍物を除外したやうな結果を齎らした。娘達は裾を捲り上げ、帯のあたりまで素肌を見せて、續々ジーネチカの跡を追うた。男も一人跳んで行つた。ダヴィヂェンコは再び炎を重々しく躍り越えた。彼と結びつけられてゐるやうに、蓬髪のミーシユカーも煌いて行つ

た。彼等は狂的な興奮に捉はれて了つた。エヴゲニヤ・サモイロヴナは顔を火照らし、髪を振り亂して、駈けて行つては跳びあがり、跳び下りては笑ひ轉げた。男達は薪を加へる。炎は樂しげに燃え上る。二人の子供が兩側から駈けて来て、衝突しながら火の中へ轉げ込みさうになつた。草原の上には笑聲が漲る。火の子や煙は空へ昇る。恰も樂しい安息日が闇夜の中へ控へてゐるやうである。上からは冷たい不動の星の群が見下し、下からは暗い沈黙の川が夜の濕氣を吹き送る。

彼等は疲労して了つた。エヴゲニヤ・サモイロヴナは黒い眼を光らしながら、苦しさうに氣息を喘いで、草原の上に身を投げ捨てた。

『私もう駄目！』彼女は唸るやうに言つた。

## 二十三

彼等は再び渡船に乗つて、暗い涼しい川を横切つて行つた。焚火は彼方に暗くなつて、明るい水面は次第に擴がつて來た。再び唄が聞える。そして漸々に消えてゆく。

生き延びるやうな興奮や、火を跳び越える美しい姿や、遊戯や、物騒ぎが終つてから、夜は訝しいほど莊嚴に美麗になつて來た。星は靜かに瞬く。川は神祕を帯びて滑かに光る。嚴

かな靜寂が四邊を支配する。

岸では馬具をつけた馬がもう闇の中で鼻息を鳴らし、アルーゾフの三頭馬車の鈴がコロコロ鳴つてゐた。

『もう戻りませう。』ドクトル・アルノリチイは疲労しきつて歸つて來た若い幸福な人達を迎へるやうに起き上つて言つた。『何うでした……愉快でしたか？』彼はエヴゲニヤ・サモイロヴナに優しく訊いた。

『あゝ氣持がいい。先生！ 何故いらつしやらなかつたの？』

『別に何うといふ事ありませんけれど、此處で麥酒を飲んでゐたんです。』肥大な老醫師は冷やかに答へた。

『私家に歸りたくないわ。』若い女は愁訴するやうに言つた。丁度寢室に連れて行かれる子供といつた恰好である。

『では斯うしませう。』ダヴィデニコが言ひ出した。『馬車は後から從つて來る事にして、我々は道路を歩いて行つたら何うです。』

眞暗な林の中を通るのは一苦勞だつた。思ひがけない所から、樹木が幽靈のやうに現はれる。平坦とばかり思つてゐた所に穴ぼこがある。彼等は樹の根に躓いては笑ひ轉げた。聽て

林端に出て、彼等は野原の中を行つた。曠原の微風が遠慮なく彼等の顔を撫でてゆく。

『あゝ氣持がよい。』ダヴィチェンコやミハイロフと皆なより一足先きを歩きながら、エヴゲニヤ・サモイロヴナは絶えず斯う繰り返してゐた。『これより氣持がよくならないでもいゝわ。』

『あのねえ。』彼女は何か考へながら言つた。『私達の中の誰かにとつては、今日のやうな晩よりもつと好きな物があるのよ。最も望んでゐるものがあるんだわ。誰が何を自分の生活から望んでゐるでせう。』

『僕は……』ダヴィチェンコは低い聲で言ひ出した。

『いゝえ、お待ちなさいよ、私が言ふから。』エヴゲニヤ・サモイロヴナは彼の言葉を遮つて言つた。『貴方には……貴方は強い人になる事を望んでゐます……世界中で一番強い人に。何て言つたらいいでせう、何んな物でも兩肩に載せる位な……』

『これだ！』ダヴィチェンコは侮辱されたやうに遮つた。『貴方はあんまり僕を……』

『あらさう！』ジューネチカは笑つた。『御免なさい……貴方は國民の自由と革命の勝利を望んでゐるのね……さうでせう？ 私占つて見たのよ……だけれど、さう直ぐには解らなかつたわ。ツレーネフさんはあの白樺の樹位に髯が伸びる事を望んでゐます。』

皆な笑ひ出した。ツレーネフは狼狽へて、闇の中で思はず髯を引張つた。そして彼女の言も事實からかなり遠いと思つた。

『アルノリヂイ先生は皆さんから静かにさせて置いて貰ふ事を望んでゐます。チーシュさんは皆さんが社會民主主義になる事を、ザーハル・マキシムウイチは世界を丸呑みにする事を、セルゲイ・ニコライウイチは……』

『貴女を望んでゐます。』ミハイロフは彼女一人に聞えるやうに、低い聲で囁いた。

『まあ酷い！』別に狼狽する事もなく、ジューネチカは早口に斯う答へた。

『何だつて言つたんです？』ダヴィチェンコは物好きに訊いた。

『何でもないのよ……些つまらない事なの。』エヴゲニヤ・サモイロヴナは早口に答へた。けれども彼女の聲には妙な響きがあつた。ミハイロフの言葉が嬉しかつたやうにも思はれる。

『ナウーモフさんは……』ジューネチカは言葉を續けた。

『人類が生活から休養する事を望んでゐます。』チーシュが闇の中から嘲るやうに言つた。

『ある程度まではそれも穿つてゐる。』ナウーモフは穩やかに言つた。

『あら、随分極端ね。』ジューネチカは笑ひ出した。『何故なんです？ 斯んなに楽しく暮してゐるのに。』

『クラウゼさんは鐵砲自殺を望んでゐます。』何處かから、ミーシユカが愚弄するやうに叫んだ。

二八六

暗闇の中で彼等は自分とも思はれない言葉を、自分とも思はれない聲で言つた。胸の中は軽々として、何となく笑つたり巫山戯たりしてみたかつた。或る者は議論を戦はした。或る者は後の方から愚圖々々歩いて來た。また或る者は他人に構はず先きの方を歩いて行つた。笑聲や叫聲は遠く野原の中に擴がつた。

ミハイロフはダヴィチュンコとジーネチカの幾らか遅れて従いて行つた。彼の眼前は歩行につれて揺れ動く彼女のほつそりした腰部が、闇の中に朦りと見えてゐた。赤い著物も今は眞黒に見える。黒髪の下の襟脚は白かつた。香水の匂ひや、今だに揺れてゐる生々した匂ひが、彼女の方から漂うて來る。

ミハイロフは彼女の眞白な襟脚や、ほつそりした腰のあたりを見てゐた。彼はジーネチカに抱きつきたかつた。此の臆面のない美しい女の心を動かす位の冗談でも言つてみたかつた。彼は直ぐにでも彼女に話す事の出来るのを知つた。そしてダヴィチュンコがチーシユと何か議論をし始めた時、ミハイロフはエヴゲニヤ・サモイロヴナに追ひついて、興奮のあまり思はずも身體を縮めながら、小さな聲で言つた。

『エヴゲニヤ・サモイロヴナ！ 水浴びをしてゐる所を見られたら、貴女も定めし厭でせうね。』

『何の事なの？』彼女は直ぐに振り返つた。

異様な表情を浮べた眞黒な瞳はミハイロフの眼を眞正面に見詰めた。ミハイロフも視線を反らさなかつた。一分間ばかり二人は黙つて顔を見合はせてゐた。聽て、少時すると何物かが彼女の眞黒な瞳に閃いた。彼女は恐らく顔を赧らめたのであらう。慾望に燃えてゐる鐵面皮てつぺんしい眼から脱れ得なかつた自分の裸姿が、ジーネチカには、此の男の眼の中に映つてゐるやうに思はれたのである——恰も鏡でも見るやうに。

『私平氣だわ。』彼女は挑むやうに言つて、自分の頭を軽く揺ぶつた。そして微笑わらひながら駈け出して行つた。

『先生！ 先生！ 何處なの……私を放り出して置いて。』ミハイロフは妙に響きのある彼女の聲を耳にした。彼は何故か彼女の眼が煌々光つて、鼻息が荒いやうに思はれてならなかつた。

皆なが腰を下して、誰と誰とが一つ馬車に乗るんだとか言つて争うてゐる間、ミハイロフは馬車の傍でジーネチカを迫ひ廻してゐた。肥大なドクトルは老人らしく喉を鳴らしなが



ら腰掛けてみて、二人には注意も向けなかつた。

『セルゲイ！ 僕と一緒にだ……此方へ来ないか？』アルプーゾフが遠くから言つた。

『直ぐ行く。』ミハイロフは答へた。『ちや、左様なら！』彼は微笑を浮べて、両手を差し伸べながら、エヴゲニヤ・サモイロヴナに言つた。

彼女は彼の男らしい美しい顔を忘れまいとする者のやうに、ちつと彼を見詰めてゐたが、臆て微笑を洩らして、思ひきつたやうに両手を差し出した。

『左様なら！』

ミハイロフは彼女の小さな温かい手を、何事かを語るやうに長い間握り締めてゐた。そして暗闇の中でさへ光つてゐる彼女の眞黒な瞳をちつと見詰めた。

『兎に角私も見ましたよ。』彼は意味ありげに言つた。

エヴゲニヤ・サモイロヴナは顔を染めた。

『まあ、體裁が悪いわ！』羞恥の弱點を隠さうとして、彼女は魅するやうに答へた。

ミハイロフは漸く無遠慮になつた。

『ちつとも體裁の悪い事はありません……ちつとも……』彼は白い歯を見せながら遮つた。

『何んなに美しかつたか貴女が知つたら……全身が素肌で……』彼は肘搖を抑へる爲に震へ

た聲で斯う言ひ終へた。

『貴方さう思つて？』若い女は眞面目くさつて訊いた。そして急に笑ひながら手を振りはなして、馬車の階段の上に跳び乗ると、妙な聲で呼び寄せるやうに言つた。

『左様なら！』

馬車は動き出した。

ミハイロフは眩惑するやうな力や若さや不明瞭な希望に充たされて、全身の神経を一つ一つに感じながら、自分を呼んでゐるアルプーゾフの方へ駈けて行つた。

## 二十四

襟の低い白い薄い著物をつけ、美しい髪にメリンスの衣を掛けたリーザは畫室の眞中に立つて、無邪氣に眉毛を釣り上げながら、ミハイロフの繪を見てゐた。

彼女は初めて此の畫室を見た。初めて男の家に一人で来た。彼女は間が悪くもあつたし、怖ろしくもあつたが、それにも拘はらず一種の興味を覺えたのであつた。彼女は眞面目になつて、ミハイロフには構はずに、繪畫ばかりを見ようと努めた。彼女の手はヴェールの端を羞かしさうに弄つてゐた。頬には薄紅が潮したり消えたりした。

ミハイロフは彼女の背後うしろに立つてゐた。透徹るばかりに薄い著物一枚で掩はれた彼女の健康な肉體の接近は、頻りに彼の胸を騒がせてゐた。

直ぐ眼の前には日光に焼けた、恰好のいゝ彼女の頸筋が見える。胸衣の終つてゐる所には、彼女の健康な肉體の眞白な素肌が隠れてゐる。彼の眼は、思はずも此の眞白な素肌に觸れた。そして弾力のある肉體全體が、若々しい魅力の中に隠されてゐる邊まで見えぬのが惱ましかつた。リーザが身體を動かす度に、柔かい腰や、丸々とした肩の曲線が著物の下に動くのが見える。湯上りのやうに清々すがすがしくしい若い女の肉體の香が、彼女の方から流れて来る。

貪慾な無作法な男の眼が自分に注がれてゐるのを意識したやうに、リーザは時々周圍を見廻した。そして男と視線が合すると、眞赤になつて顔を反向けた。彼女も斯ういふ時には、たゞ無心に接吻してやりたい程、温なしい可愛らしい娘に見えた。

『何うです、氣に入りましたか？』ミハイロフは訊いた。

リーザは薔薇色に染つた顔を、肩越しに振り返らせた。そして子供のやうに恍惚うつつして答へた。

『無論ですわ！ いゝ繪ですことね……貴方は幸福ですわね。』

ミハイロフは薔薇色に動いてゐる彼女の唇を見詰めた。そして接吻の優しい希望に堪へ

られなくなつた。此の時彼の眼は危険な炎で燃えてゐたに違ひない。何故なればリーザは無意識に彼の眼を見、彼の唇を見、再び彼の眼を見て、急に繪の方へ視線を反らして了つた。ミハイロフは美しい髪の被さつてゐる彼女の小さな耳が眞赤になつたのを見た。

『なんですね……何時まで見てゐるんです……まあ此處にお掛けなさいな。』ミハイロフは言つた。『さもないと私は自分の繪に嫉妬を起しますよ。』

彼は少女が此の長椅子に腰を掛けて、ヴェールを脱ぎさへすれば、いますこし打解けて来るだらうと思つた。リーザもこれを悟つたらしい。彼女は腰も掛けずにオド／＼して、彼の眼を避けるやうにしてゐた。

『いゝえ、私はほんの一分間の積りで……直ぐに歸らなければなりません。』彼女は臆病に豫防線を張りながら遮つた。

『貴女はたゞそれを言ふために來た譯なんですか？』ミハイロフは彼女の顔を覗きながら、調戲かほふやうに言つた。

リーザは當惑さうに笑ひ出した。

『さうぢやありませんけれど……家に知れますから……直ぐ歸るつて言つたんです。』

『お父さんやお母さんが怖いんでせう？』ミハイロフは調戲かほつた。彼の愛撫するやうな聲の

裡には、斯んな言葉が聞える。(莫迦な娘だ！ 俺の部屋から出て行つた所で同じ事ぢやないか。歸りたいならさつさと歸るがい。)

『私は誰も怖れやしません。』リーザは斯う遮つて、顔を赧らめた。

『誰も怖れませんか？ そして何んにも怖れませんか？』ミハイロフは瞬き乍ら訊いた。

『え、何んにも。』リーザは半ば子供のやうに強情を張つて答へた。そして再び顔を赧らめた。

『さうですか？』ミハイロフは矢張り不得要領に言つた。『怖ろしい強いお嬢さんですね。そんなら證據を見せて下さいな……先づ私の傍に腰掛けて……』

彼は手を伸ばして、彼女の髪に掛つてゐるヴェールに觸れた。リーザは男の手先に驚かされて、男から隔たるために後退りしながら、自分でヴェールを脱つた。

『え、掛けますわ……だけれど此處で何をしませう？』彼女は寢椅子に腰を下しながら言つた。

彼女は黙つてゐるのも變であるから、たゞ無意識に斯う言つたまでの事で、ミハイロフが妙な微笑を洩らした時に加つたやうな、そんな暗い厭らしい意味は、此の言葉の中に決して含まれてはゐなかつたのである。

# 欠

# 欠

やうになつた。恰も無邪氣な少女ではなくて、立派に一人前の女のやうである。

ミハイロフは返事に窮した。

『何故そんな事を仰しやるんです？』少女は胸を鎖める事も出来ないし、凌辱を忘れる事も出来ないやうに言葉を續けた。『みんな虚言うそぢやありませんか。』

『何故私をそんなに苦しめるんです？』ミハイロフは復讐するやうに言つた。

『何を苦しめました？』リーザは無邪氣な眼を彼に向けた。

『貴女だつて解つてゐるでせう、男といふものは戀をすると、女性の有するすべてを自分の物にしたいんです……その肉體も……解るでせう？』慾望に齒をガタ／＼させながら、ミハイロフは言つた。

『知つてゐます……』少女は俯向きながら、微かな聲で答へた。

『それで？』ミハイロフは力強く言つた。

リーザは直ぐには返事をしなかつた。彼女は薔薇色の唇に浮んだ言葉を恥ぢて、恰も残酷な戦闘の中にでも立つたやうに俯向いて了つた。

『それで？』ミハイロフは繰り返した。

『それで何んです？』少女は聞えるか聞えない位の聲で言つた。そして両手で顔を掩うた。

ミハイロフは貪慾な残忍な眼で彼女の顔を見詰めた。彼の暗い眼には、嘲るやうなものが光つた。幾度彼は此の質問を耳にしたらう。

『貴女は怖いんでせう？』彼は幾らか控目に言つた。

少女は頭を振つて、更に手の中に顔を埋めた。

『私に希望さへなければ、そんな事はしやしませんよ。』自分の無作法によつて彼女を驚かさないう程度の言葉を求めながら、彼は露骨に斯んな事を言つた。

少女は急に身體を動かして、暑さと息苦しさに堪へ兼ねたやうに踰越めき出した。

『私歸ります……私には出来ません……歸して下さい。』男の傍を抜けて、扉口の方へ逃げようとしながら、彼女は途方に暮れて呟いた。

『そんならお歸りなさいな……』ミハイロフは無情く答へた。彼はこれが一時的の別離である事を知つてゐた。

『左様なら！』彼女は斯う言つて、扉口の方へ出て行つた。

ミハイロフは燃えるやうな眼で彼女を見送つた。彼は少時考へてゐたが、聽て彼女の後を追うて行つた。

花園では緑の影と新鮮な空氣が二人の心を捉へた。廣々とした美しい空は藍色を帯びて

來た。彼等は堪へられないほど暑苦しい息苦しい燠爐の中から脱れて來たやうな氣分になつた。胸騒ぎも落著いた。リーザは微笑を洩らして、ちつと男の顔を見詰めた。そして自分の強情に對する寛恕を眼附で願うた。ミハイロフも微笑を浮べた。

『では左様なら、強情張りなお嬢さん！』彼は優しく言つて、彼女の手に接吻した。彼女は男の讓歩に感謝したのか、平生のやうに手を引込めはしなかつた。

『あら！』彼女は顔を上げながら言つた。

ミハイロフは耳を澄ました。

『鐘ですね。』彼は間を置いた鐘の響を耳にして言つた。

『お葬儀の鐘ですわ……誰か死にましたのね。』少女は嚴肅さをチラリと眼に浮べながら言つた。

『他人の事は何うでもい……私達は生きてゆきませう。』ミハイロフは氣輕に答へた。リーザは男の顔を見て、心を奪はれたやうに微笑つた。

『左様なら……』彼女は斯う囁いて、殆んど聴きとれないやうな聲で言ひ加へた。『私の戀しい人……』

程なく彼女は振り返つて、ヴェールを髪に掛けると、小門の方へ駈けて行つた。

老教授イワン・イワーノヴィッチは死んだ。

死に到るまで三日間、彼は全く口を噤んでゐた。ドクトル・アルノリヂイの來診も、ポリナ・グリゴリエヴナの氣遣ひも、遂に彼の返答を得るには至らなかつた。彼と生との間には眼に見えぬ城壁が築かれて、生を有する人々から彼を永遠に隔離して了つたらしい。その城壁の向うでは、何人にとつても不可解な生と死との最後の戦闘が進行してゐた。

彼に何事かを質問すると、老人は殆んど言葉も亂さずに、條理を立て、簡単な返事をした。彼は正氣に還つて、遂に何事かを理解するのであるが、現在の自分を表示せぬために、口を利くのも怖れて、此の怖ろしい祕密を胸の内部に藏めてゐるのであらうとも思はれる。彼は何時間たりとも他人を煩はさずに、化石したやうな震へた頭を掌に埋めながら、ちつと肘掛椅子に腰を下して、眼を閉ざしたまゝ考へ込んでゐた。

ポリナ・グリゴリエヴナは彼の傍でひとり氣を揉んでゐた。彼女は遠からぬ夫の最後を豫感したやうに、あらゆる自分の考へを忘れ、あらゆる疲労を忘れて、愛情と憐憫に充たされた温順な女となつてしまつた。白髪のイワン・イワーノヴィッチが毎晩起き上つて、寢臺の

上に坐り込む時でも、彼女は常に眠つた様子をしながら、たゞ夫を見まもつてゐるだけで、彼を寝かせつけもしなければ、口も利かないし、彼に煩さく附纏ひもしなかつた。

嚴かな物怖ろしい沈黙は彼等の家に凝結した。恰も永遠の靜寂の最初の波動が訪づれて來たやうだつた。

少しでもポリナ・グリゴリエヴナが身動きをすると、イワン・イワーノヴィッチは周章で、密そりと横になつて了ふ。けれども彼女が眼を閉ざして、氣息を潜めさへすれば、彼は再び起き上つて、密に彼女を見まもりながら、寢臺の上に座を構へる。そして忙しく物を咀嚼するやうに、弛んだ唇を頻りに動かすのであつた。

ポリナ・グリゴリエヴナは此の時初めて彼が祈禱してゐるのに氣がついた。これは彼女にとつては、全世界の表面に滄桑の變を來したと思はれる程、思ひがけない事でもあつたし、怖ろしい事でもあつた。

四十年の間彼と同棲したが、彼女はイワン・イワーノヴィッチが祈禱してゐる所を見た事がなかつた。彼は教會に出席した事がなく、常に僧侶を罵倒し、宗教を嘲笑して、教會に就いては蝕ひ入るやうな諷刺文まで發表した事があつた。嘗ては信仰の厚かつた愚かな彼女は、宗教や神に對する夫の惡戯に駭いて、神が夫に懲罰を加へはしまいかと思つてゐた。そして

隨分夫と口論を重ねた。併しそれも何時とはなく習慣になつて、彼女は夫の感化の下に信仰の刺戟を忘れ、宗教は僧侶や教會や十字架や祈禱と共に、恰も二人には無關係な娛樂の如く、彼等の生活から除外されて了つた。斯うして彼女が病床についた時も、近親の者や老教授の知人が死んだ時も、此度のゆるやかな怖ろしい死病が起つた時も、聰明なるイワン・イワノヴィチをして、冥府の生活や、神や、祈禱に近づけようとは、誰しも胸に思はなかつたのである。

併し今は全然別人である。襯衣一枚の瘠せ衰へた老人が、イワン・イワノヴィチの寢臺に横はつて、他人に見られぬ夜の靜寂の中で、不可解な自分の思想と相對して、ひとり神に祈禱つてゐるのだ。

ある夜ポリナ・グリゴリエヰナは、彼が周圍を見廻しながら、周章て、十字を切つてゐるのを見た。一度十字を切ると、少時の間考へてゐて、再びまた十字を切つた。そして骨と皮ばかりの震へた手先を額や胸や肩にしつかりと當てながら、何事かを會得したやうに繰り返し／＼十字を切つてゐた。彼の唇は顫へて、頭は揺れ動いてゐる。ポリナ・グリゴリエヰナは早口の怪しい私語を耳にした。

「神よ、爾の大きいなる恵を以て我を救し給へ……、神よ爾の……」

恐らく老教授はこれ以上何事も思ひ出せぬのであらう。病み衰へた頭腦は、必死の努力を奮つて、記憶から拭はれた少年時代の簡単な祈禱の文句を、過去の暗闇の中から呼び返さうとしてゐる。併しそれは綺麗に忘れられて、跡方もない。イワン・イワノヴィチは老の衰れな涙を流して、惱ましさうに同じ文句を繰り返した。

「神よ爾の大きいなる恵を以て我を救し給へ……」

翌日彼女は何にも言はなかつた。彼女は此の夜の祈禱の中に、他人が敢て手を觸れようとしない一種の不可思議な神祕を覺えたのであつた。彼女は恐怖に捉はれて、たゞ怯々と夫の面を見てゐた。

死に到るまでの二日間、同じ祈禱は不可解な怪しい怖ろしい力を漸々に加へて、夜になりさへすれば繰り返された。

洋燈はぼんやりと點つてゐた。——もう餘程前から洋燈は夜中點け放しだつた。闇は隣室に跨つて、怖ろしい眼附で此方を見詰めてゐるやうに思はれる。ポリナ・グリゴリエヰナは夜著の中に氣息を殺してゐた。

イワン・イワノヴィチは重苦しい頭を枕に深く埋め、瘠せ衰へた腕を夜著の上に延ばして、仰向きになつたまゝ、二時間ばかり身動きもせず横はつてゐた。細い膝を立て、腹

部が怖ろしく凹んだ彼の細長い身体は、骨ばつた輪廓を夜著の上に描いてゐる。果して彼が眠つてゐるのか、それとも思考に耽つてゐるのであるのか——老夫人には見當がつかなくつた。併し何物かが近づいて来て、部屋の中に擴がり、彼女の胸を壓しつけるやうな氣がする。ポリナグリゴリエヴナは恐怖のあまり、身動きもせず、身體を縮めてゐた。惡寒に似たものが彼女の足を走る、心臟に達する、心臟を締めつける、細長い指先で腦髓を冷やりと撫でる……彼女は聲をあげて、イワン・イワーノヴィッチを呼ぼうとした。けれども言葉は喉に消えて、心臟が烈しく鼓動するばかりである。

イワン・イワーノヴィッチは急に身體を動かした。白髪の顫へた頭は墓の中から這ひ出るやうに持ち上つて、死人のやうに暗い眼をポリナグリゴリエヴナの方へ向けた。そして彼女の方を向いたまま動かなかつた。洋燈は彼の顔を真正面に照らした。墓から這ひ上つて来る死人の顔は、暗い、底光りのする、狡猾な、惡意のある眼をして、何處とも云へず兇猛な所があつた。

ポリナグリゴリエヴナは身動きもしなかつた。けれども彼女は髪の毛が頭の上に動いて急に汗ばんで來た膚の上を、細かい小蟻が這ひ廻つてゐるやうな氣がした。

イワン・イワーノヴィッチは、長い間ぢつと眼を据えてゐた。靜寂は刻一刻と澄んで來て、殆んど果がないやうに思はれる。彼は靜かに横を向いた。彼は白髪だらけな頭を、蠟人形のやうに廻して、寢臺の上に起き上つた。起き上つて了ふと、ぢつと耳を澄して、再び動かかなかつた。四邊は靜まり返つて、たゞ耳鳴りがするばかりである。

ポリナグリゴリエヴナは氣が狂ふのではあるまいかと思つた。併し身體を動かす事も出來ないし、聲をあげて夫を呼ぶ事も出來なかつた。

此の時イワン・イワーノヴィッチは怖ろしい力で起き上つて、骨と皮ばかりの兩足を寢臺から下した。關節のあたりは蒼ざめて、黄色い爪には全く血の氣がなかつた。鈕とリボンのついてゐる白い襯衣を不恰好に著た骸骨の上には、死人の頭が普通外れて大きく見える。

彼は足先で頻りに何かやつてゐるのであるが、何にもそれが出來ないらしい。兩手で寢臺に凭れる、頭を振る、身體を震はす、ぐつたりと肩を落す……彼は漸く床を探つて、氣を勵ましたながら立ち上つた。ポリナグリゴリエヴナは彼が部屋隅を見てゐるのを知つた。其處には既に餘程前から忘れられた、過去の遺物とも云ふべき聖像があつて、聖像の前には嘗て點された事のない綠色の角硝子の豆洋燈が懸つてゐた。ポリナグリゴリエヴナはその内部が埃と蠅の死骸だらけであることを知つてゐた。

イワン・イワーノヴィッチは、顫へた曲つた足で脊いつばいに立ち上つて、もう一度妻の寢臺



の方を見た。彼は跪かうとしたが、身體を支へて居られなくなつて、哀れにも床の上に崩れて了つた。そして骨ばつた指先で椅子を掴んだまゝ、彼はちつと動かずにゐた。

同じ不思議な力はポリナ・グリゴリエヴナの喉にも叫聲をあげさせなかつた。何故か彼女は何人もこれを見るべきでないやうな氣がして、堅く眼を閉ざしてゐた。

イワン・イワーノヴィッチは靜かに身體を動かした。骨らしい物の奇妙な音が彼女の耳に聞えた。けれども彼女にはそれが解らなかつた。と不意に熱の籠つた狂氣のやうな私語が部屋の中に響いた。

『天に在ます我等の父よ……願はくば爾名を尊崇めさせ給へ、兩國を臨らせ給へ、爾旨の天に成る如く、地にも成らせ給へ、……我等の日用の糧を今日も與へ給へ、我等に負債ある者を我等がゆるす如く、我等の負債をも免し給へ……父と子と聖靈の爾名によりて……神よ大いなる恵を以て我を救し給へ……我が負債を免し給へ……神よ我を救し……我を救し……』

此等の言葉は物凄く響いた。しまりのない老教授の私語は、堪へ得ぬ苦痛と、脱れ得ぬ苦惱の怖ろしい力のやうに響いた。

骨らしい物の奇妙な音が再び聞えた。ポリナ・グリゴリエヴナは眼を開いた。けれども

涙に曇つた眼には、床の上に動いてゐる白い物の他、何にも見えなかつた。

イワン・イワーノヴィッチは黙つてゐた。白い物は妙に屈んで、這ひ出さうとするや

た。併し物音ひとつ聞えない。ポリナ・グリゴリエヴナは自分がもう横はつてはゐずに、眼を見開き、腕を延ばして、白い髪を亂したまゝ、寢臺の上に坐つてゐるのにも氣がつかなかつた。

再び骨の音が微かに聞える。少時するとまたそれが繰り返される。イワン・イワーノヴィッチは不器用に禮拜しながら、額を床に打ちつけて居るらしい。少時靜かになつたかと思ふと、また頭蓋骨を烈しく床に打ちつける音がする。——此の時には唸聲さへ加つた。ポリナ・グリゴリエヴナは彼が起き上らうとして、空しく頭を敷板に打ちつけながら、床の上に身を掻搔いてゐる事を稻妻のやうに意識した。

彼女は絶望的な聲をあげながら、夫の方へ跳んで行つて、彼の手を掴んで、彼を起き上らせて、自分とも思はれない程の力で、彼を寢臺の上に坐らせた。イワン・イワーノヴィッチは手を動かしながら、失心したやうに何か呟いて、申譯のないやうな、憐れむやうな眼で彼女の顔を見詰めた。

『わしは、見たらう……祈禱をしようと思つて……なあに冗談にさ……久しく祈禱といふ

ものをしないからな……祈つて見ようと思つたんだ。』彼は頭を振りながら呟いた。彼は苦しい程羞かしかつた。聰明な知識に對する以前の自負心は疾うに消えて、彼の心はたゞ小さく、たゞ弱々しかつた。彼は保護を求めるやうに妻に寄り添うて、嬰兒のやうに歎息り上げた。

『わしは怖ろしい……怖ろしい、ポーレチカ……わしは死んで了ふのだ。』彼は斯う呟いた。

彼等は並んで寢臺に腰を下した。二人とも老の衰れな涙を流して潜々と泣いた。二人ながら白い襯衣を著た白髪の小さな老人だつた。突然希望の熱い波が彼女を榮光のやうに照らした。

『では……明日になつたら有難い聖像を拜借して來ませう……さうして謝恩讚美歌のお勤めをませう……神様は屹度全快させて下さいますよ。』彼女は斯う言つて、愛と憐憫の籠つた優しい指先で、彼の禿げた頭を撫で擦つた。

翌日彼等の家は朝から明るい期待に充たされてゐた。彼等は部屋々々を掃き清め、イワン・イワーノヴィッチには小綺麗なフロックコートを著せ、そして怯々した希望を抱いて胸を戦かしながら待つてゐた。

古ぼけた黒い聖像が白い洋机掛の上に置かれた。聖像の前には蠟燭が點されて、アルプー

ゾフが野原へ敲き出した例の赤毛の僧侶が、立派な袈裟を著けて、經を讀み上げたり、讚美歌を歌つたりした時、イワン・イワーノヴィッチは肘掛椅子から這ひ下りて、跪きながら潜々と泣いた。

太陽は窓に輝いて、金色の楽しい光は部屋隅に漲つてゐた。僧侶と讚美歌うたひの聲は朗らかに響いた。香爐の煙は物靜かに圓を描いた。時代に燦んだ聖像の不愉快な面は、此の光と煙と輝きの中に眞黒に見えてゐた。

ポリナ・グリゴリエヅナも泣いた。イワン・イワーノヴィッチも泣いた。妊娠してゐるリィダも泣いた。彼等の涙の中には一縷の希望と歡喜とがあつた。彼等は偉大なる太陽の光輝や、藍色の大空から、聖像の眞黒な面に集つて來た萬能の力の他には、何等の庇護も望みもない事を、今となつて初めて理解したやうに思はれる。

イワン・イワーノヴィッチは涙に曇つた眼を見開いて、聖像の眞黒な面を見詰めてゐた。涙は怖ろしい死の假面の皺に添うて、小川のやうに流れた。彼は亡びゆく生命の最後の力と、最後の暗夜のあらゆる恐怖と悲痛とを、物言はぬ凝視の中に溢れさせた。如何なる力も此の瞬間に於ては、雪白な洋机掛の上に置かれた黒い不思議の物から、彼の視線を奪ふ事は不可能であつたらう。

僧侶達の調子外れな聲が、一種異様のメロディに顫へながら、部屋の中に漲つた時、イワン・イワーノヴィッチの頬には涙が止處もなく流れて來た。此の時彼は自分の生活や、傲慢な心や、今まで自分を欺いて來た學識や經驗や理性を悉く否定して、此の従順な服従の中に彼を憐れみ、彼を赦し、彼を救はん事を、眼にも見えぬ力に涙ひとつで哀願するのであつた。

聖像は持ち去られた。赤毛の僧侶のニコライは袖を捲り上げて、ポリナ・グリゴリエヴナと街の出來事を噂してゐた。そして病人の全快を祈りながら歸つて行つた。青い煙は依然として圓を描いて、縫れ絡んだ細い絲は開放した風抜窓の方へ漂うて行つた。

イワン・イワーノヴィッチは安樂椅子に腰を掛けてゐた。彼の唇は今も顫へて、涙の滲んだ眼には子供のやうに純潔な信仰の光が輝いてゐた。皺だらけな顔も内部の光明に輝いてゐた。太陽は祝福するやうな光を彼の頭に投げて、彼を暖めながら、彼の身體を聖ならしめる。彼は白痴のやうな微笑を浮べながら、ポリナ・グリゴリエヴナと娘のリーダを物珍らしさうに見詰めた。

『まあ、ほんたうにいゝ鹽梅で……もう大丈夫癒りますよ。』老夫人は子供にでも言ふやうに優しい聲で言つて、痛せ衰へた彼の手を握つた。彼女の眼は愛情と希望に輝いてゐた。

イワン・イワーノヴィッチは、底光りのする眼で彼女の顔を見詰めた。彼の頬には透明な、子供のやうに清い涙が依然として顫へてゐた。彼の全身は、内部から照らされたやうに明るかつた。

陰鬱な皺だらけな顔をした肥大なドクトル・アルノリヂイが往診にやつて來た。イワン・イワーノヴィッチは彼に言つた。

『わしはその……祈禱をして……何と言つたかな……その聖餐をですな……貴方はドクトルでしたな？ 何んなものでせう？』

『結構です！』ドクトル・アルノリヂイは言つた。臉の腫れ上つた彼の賢しい眼を見ただけでは、果して彼が信じてゐるのだから、笑つてゐるのだから解らなかつた。

彼等は此處に腰掛けて、長い間談話を交はしてゐた。それもドクトルとポリナ・グリゴリエヴナとリーダが話したので、イワン・イワーノヴィッチは白い枕のついた安樂椅子に腰掛けたまゝ、楽しさうに三人を見てゐたのであつた。

少時すると彼は疲労を覺えたので、失禮して横にならうと言ひ出した。ドクトルは彼の顔をちつと見てゐた。そして斯んな事をリーダに言ひながら歸つて行つた。

『四時まで私は自宅に居ります。それから後はラズドリスカヤの家へ往診に出ますから、

御用がありましたらお使ひを其方へ願ひます。』

リーダには彼の提言の怖ろしい意味が解らなかつた。彼女は快活に言つた。

『宜しう御座います。併しお迎へに上るやうな事は御座いますまい……父は大變いゝやうで御座いますから。』

イワン・イワーノヴィッチは睡眠ねむりについた。リーダとポリナ・グリゴリエヴナは隣室に腰掛けて、何かひそ／＼話してゐた。

イワン・イワーノヴィッチは二時間餘りも眠つてゐた。彼は夜着を掛けて、安らかに横はつてゐた。リーダは彼が餘りに長く眠つて、寢息が少しも聞えないのを不審に思つた。彼女は不安な恐怖に捉はれた。

『起しちやいけなくつて？』

『起さない方がいゝだらう……寢かして置いておあげな……』

『けれども私は起した方が……』

二人の女は遂方に暮れて、病人の傍に立つてゐた。彼等の穩やかな歡喜は跡方もなく消えた。しかし眠れる人の面は安らかだつた。頭の頂の所は妙に逆立つてゐたが、先刻櫛を入れたばかりの白髪は綺麗に撫でつけられてゐる。フロクコーの胸は動かなかつた。

『何うしたんだらうね？』ポリナ・グリゴリエヴナは自分を信じられないやうに言つた。

『起ませう。』リーダも不安げに囁いた。『私怖い……ドクトルを呼びに……』

『起してお呉れ、起してお呉れ……』

『それとも起さないんですか？ 寢かして置いて上げるんですか？ 何うするんですよ！ 私起します。』

嚴かな教授服を着て、身動きもせず横はつてゐる病人の周圍には、言ふに言はれぬ不安が漂うてゐた。怖ろしい豫感と恐怖は二人の女を捉へた。召使はドクトルの所へ駆けつけた。リーダは遂に心を定めて、脈搏を見るために、血の氣のない腕をとつた。手は冷えきつて、護謨製の義手のやうに力がなかつた。彼女は恐怖の中に、骨と皮ばかりの小さな身體を揺ぶり始めた。

『お父さん、お父さん……』彼女は叫んだ。『お父さん……起きて頂戴！』

答へるものは沈黙ばかりである。

『イワン・イワーノヴィッチ！』

不意にイワン・イワーノヴィッチは眼を開いた。顔や身體は不動のまゝであるが、眼ばかりは怖ろしく見開かれた。これはもう全然生きた人間の眼ではない。硝子のやうに透徹つて、内

部の方を見詰めてゐる。彼には何んにも見えないらしい。靈魂の飛び去つた方から、彼を無理にも呼び戻さうとしてゐるのだ。リーダーは恐怖の中に、此の怖ろしい凝視から跳び退いた。

「あゝお母さん！」彼女は叫び出した。

「イワン・イワーノヴィッチ！ 何うしたんです！」ポリナ・グリゴリーエヴナは絶壁の上で彼を支へようとするやうに、夫の手をしつかり掴みながら言った。

死人の眼は徐ろに彼女の方を向いた。そして矢張り透徹つた、怖ろしい物を見てゐるやうな眼附で彼女の顔の上に止つた。

「イワン・イワーノヴィッチ！」何時の間にか怖ろしさも忘れて、老夫人は泣聲をあげた。

彼女は夫の身體を揺ぶつて、抱き締めて、死人の顔を涙に濡らした。

突然イワン・イワーノヴィッチは眞黒な洞穴のやうに口を開いた。骨ばつた舌は顫へて、無益な最後の緊張の中に突き出て來た。生きた人間に見られぬ恐怖によつて、彼の顔は歪められて來る。眼は眼窩からとび出る。——彼は微笑を洩らした。

此の微笑は怖ろしいものだつた。二人の女は恐怖の餘り跳び退いて了つた。

イワン・イワーノヴィッチは何處へも視線を止めずに、非常な速度で室内を見廻した。臆て胸

を突き出し、腹を締め、頭を後方へそらしながら、苦しさうに喘ぎ始めた。

彼の顔は見る／＼中に變つて來た。屍特有の莊重は彼の唇を石のやうに蔽うた。眼は閉ぢる、鼻は尖がる、脛は落ちる、黒い怖ろしい口腔が開く……

緑の樹木の間にも、藍色の海にも、大都會の中にも、太陽の光輝の中にも、月光の漲る中にも、イワン・イワーノヴィッチと呼ばれる人はもう存在してゐないのだ。生活し、信仰し、苦痛に悩み、思想に耽り、自己を愛したイワン・イワーノヴィッチはもう居ないのである。

屍の傍では白髪の老夫人が聲をあげて泣いてゐた。様々の人が忙しさうに歩いた。漸く駆けつけて來たドクトル・アルノリチイがゆつたりと動いた。けれども屍は身動きもせず、嚴然と横はつてゐた。そして屍の頭は、彼等の愚かな笑ふべき氣遣ひを譴責するやうに揺れてゐた。

大伽藍の鐘樓では鐘の音が響いた。鐘の音は暗い反響のやうに響いて、遠く家屋や花園の後方の曠原の中へ消えて行つた。其處では生きた人々が自分達の氣遣ひや談話や口論や笑聲を少時措いて、顔を上げながら斯んな事を言つた。

「誰か死んだんだな！」

臆て小さな鐘が愁訴するやうに調子よく鳴り始める。涙に妨げられるのを訴へながら、中

位の鐘の音が間を置いて響く。そしてまた重苦しい挽鐘が……………

三二六

## 二十六

リーザの明るい姿が花園の小徑の端に現はれた時、ひよろ長い騎兵少尉のクラウゼと小さな大學生のチーシュは、ミハイロフの畫室の扉口に行んでゐた。最初に彼女の姿を見出したのはチーシュだつた。彼は素早くミハイロフの顔を見たが、聽て視線を反らして、忙しうに言つた。

『ぢや、兎に角左様なら……併しあんな狂人の言葉いひかたですぜ。莫迦らしい……何を言つてゐるんだか譯が解りやしない……では左様なら。』

併しミハイロフの動搖にも、チーシュの訝かしい性急にも、リーザそのものにも氣のつかないひよろ長いクラウゼは、眞面目くさつて遮つた。

『貴方は彼の思想を理解しないから、さう言ふんでせうが……それは非論理的な所もありませうさ。併し偉大なる思想たる事は失ひませんね。』

『まあ、いゝですさ、いゝですさ……此の次に話すとして……今日は歸りませう。』  
『否や、待つて下さい……興味ある問題です。』クラウゼは言葉を續けた。『彼が自殺を認め

てゐないとか、自分の考へでは、單に怯懦に過ぎないのだとか云ふ事は遠らく措いて、彼の思想そのものは……』

『まあ、いゝからさ……歸りませうつて言へば！』チーシュは面倒くさうに言つた。そして幾らか顔を赧らめて、自分から視線を反らしたミハイロフに別れを告げた。

クラウゼも様子の何となく訝しいのに氣がついた。彼は視線をチーシュの當惑さうな顔から、ミハイロフのきよろくした眼に移して、眉毛を釣り上げながら言つた。

『そんなら歸りませう。』

ミハイロフは怖ろしく丁寧に挨拶した。併し心の中では二人を階段から突き落さないばかりだつた。彼は畫室に戻つて、胸を騒がしながら待つてゐた。クラウゼが蔑さげすむやうに何か訊いてゐるのが聞える。チーシュが氣がなさうに返事をしてゐるのが聞える。聽て門の扉が軋きしると、後は物音もしなかつた。リーザは何處かへ隠れたのか、さもなければ後方へ戻つて行つたらしい。彼女の聲は少しも聞えなかつた。

ミハイロフは柱時計を見た。丁度五時だつた。併し六時になればエツゲニヤ・サモイロフが尋ねて来る事になつてゐる。二人の女が自分の部屋で顔を合せるのかと思ふと、ミハイロフは肉感的な激しい身震ひを覚えるのであつた。彼は故意に二人を會はせようとした。

二人の女は彼を苛立たせた。一人は無邪氣な少女であつて、處女の純潔に守られてゐる最後の一足を怖れるが故に、彼に身體を委せようとはしない。一人は海山を越えた情慾の女で、譯も解らぬ片意地から彼を苦しめる。何時まで行つても限のない『いけません。』といふ言葉と、調戲ふやうな警告するやうな『まあ』といふ言葉は、女が全く自分の物となつて、堪へられない慾望に全身が緊張する最後の瞬間に於て、突然に彼を突き退けて了ふ。ミハイロフはこれ程長い抵抗に出會つた事がなかつた。彼は全く苛々させられた。彼も時には愛想を盡かして二人の女に斧を振り上げようとした事もあつた。併し女にチャホヤされて來た蕩兒の自惚は、容易にこれを見捨てさせない。此の時ミハイロフの腦裡には殘酷な考へが浮んで來た——それは二人の女を會はせて了ふ事である。その結果の如何は解らなかつたが、兎に角彼にはそれが殘忍な氣持のいゝ惡戯のやうに思はれてならなかつたのである。

リーザはやつて來ない。ミハイロフは花園へ出て見ようかとも思つた。その時階段の上に女の臆病な足音がして、扉をノックする音が聞えた。

『お入んなさい！』ミハイロフは胸騒ぎに噎れた聲で言つた。

リーザは入つて來た。

彼女は何となく蒼ざめて、部屋の中を茫然と見廻してゐた。チーシュと騎兵少尉がやつて

來た時、彼女は灌木の茂みに隠れて了つたのであつた。併し二人は、彼女の姿を見出したに違ひなかつた。哀れな少女は騎兵少尉の蔑すむやうな聲を判然と耳にした。

『新客ですね……艶福家だなあ。』

チーシュは煩さうに答へた。

『さあ、艶福家かも知れない……行きませう……随分色々な女が來ますよ。』

彼の聲の裡にはリーザを驚かせたものがあつた。チーシュが果して自分である事を知つたのか、それとも全然氣がつかなかつたのか、今となつて見ると彼女には分らなかつた。最初彼女は直ぐ家へ歸つて、もう決して此處へは來まいとさへ思つた。併し哀れな少女にはそれが出來なかつた。彼女は溜息を吐いて、ミハイロフの部屋へ駈けて來たのである。

彼女はほんの少時此處にゐて、最早到底こんな恐怖や羞恥を忍び得ない事や、彼の所へは以後斷じて立寄らない事を告げるつもりだつた。併し男の美しい眼や、愛らしい額や、柔らかない黒髪を見、聞きなれた男の顫聲を聞き、そして男が彼女のヴェールを脱つて呉れた時、リーザは急に氣が弱くなつて、涙を流しながら男の胸に寄り添うて了つた。丁度斯んな事を言はうとして居るやうである。『私は何時まで斯うしては居られません。此の羞恥や、此の恐怖や、自分自身に對する輕蔑から私を救つて下さい。貴方だつて少しは私を愛して下さい。』

せう！ そんなら私を可哀さうと思つて下さい、私は苦しくつて……貴方さへ愛して下されば、私だつて愛します……何時までも貴方と一緒に居られたら幸福だらうと思ふ事もありますもの。』

併し彼女は敢てこれを口にしなかつた。そして涙に潤んだ眼や、羞恥に赤らんだ顔を男が接吻した時、自分の優柔に對する寛恕を乞ふやうに、彼女は羞かしさうな微笑を浮べた。併し彼女は矢張り男の肩に寄り添うて、先日のやうに接吻から顔を隠した。

ミハイロフは彼女を寢椅子に掛けさせて、彼女の唇や眼に接吻した。そして隠れようとする顔を上げさせた。

『さあ、もういゝです。何にも心配する事はありませんよ……分るもんですか……私の所へは色々な人間が来るんですから。』

リーザは少し宛氣を落著けて來た。彼女は涙に濡れた顔を上げて、微笑を浮べ乍ら言つた。『私驚きましたわ……若し分りでもしたら！』再び彼女は恐怖に顔を蔽うた。

少時すると彼女は急に顔を見せて、熱情の籠つた眼でちつと彼を見詰めた。そして苦痛に喘ぐやうに言つた。

『あゝ何時になつたら貴方と始終一緒にゐられるんでせう！』

ミハイロフの眼には怪しい光が閃めいた。彼は無意識に身體を屈めて、彼女の腕に接吻した。

『それは貴女次第です。』彼は言つた。『貴女にはもう話したでせう……自分に身を委せもしない女と、自分の生涯を約束する事は出来ません……私に言はせれば、肉が完全に接近してのみ、眞實の戀は生れるんですね……不幸な結婚が斯うまで多いのは、男女が集つても、相互にたゞ遠くから相手を知らうとばかりしてゐるためです……』

『貴方は私を愛してゐないんでせう？』リーザは、殉教者のやうに指を握り締めながら言つた。

『否や、愛してゐます……併し中途半端な戀などは認めません……私は經驗を積んだ男です、知り過ぎてゐる位女といふものを知つてゐます……何にでも無鐵砲に跳びかゝれますか……』

『何故私が……』男が自分を欺かうとして居るのに氣がついて、リーザは自負心を喚起しながら言つた。

『貴女は十九歳です。』ミハイロフは答へた。

これは返答でもなければ説得でもなかつた。彼女の純潔な初戀から見れば、何時かは男に



對する戀の醒める時が來ようとも思はれないし、また假令如何なる疑念にせよ、永遠に彼と共棲する幸福から自分を止めようとも思はれなかつた。併し彼女は斯んな題目を論ずる柄ではなかつた。これを論ずるのは餘りに屈辱だつた。

ミハイロフは此の冷酷な悪戯に胸を躍らしながら、彼女が強情を張るのは、全く彼を愛してゐない爲めだとか、自分は始終美しい女に心を奪はれてゐるとか言ひ續けた。彼女はたゞ抵抗一つで男を退けた。

『故意に貴女を忘れさせようとするんですね。私は誰でも一番先きに離ないた女に運命を託して了ひますよ。』

リーザは侮辱されたやうな眼をした顔を上げた。

『と言ふと女は私一人には限らないと言ふ事なんでしょうか？』

『かなり當つてゐる！』ミハイロフは無意識に斯う思うた。併し口には出さなかつた。

『誰でもいゝ位なら、斯んなに執拗しつこくは言ひませんよ。』

彼女には信じられもしたし、信じられなくもあつた。彼女はこれを信じたかつた。リーザは力なく頸を垂れた。

此の時扉口でノックがした。リーザは思はず跳び上らうとした。

『お入んなさい！』ミハイロフは直ぐに聲を掛けた。

リーザは彼の顔を怖ろしさうに長た。彼女は立ち上がりたかつた。彼女は再び腰を下しはしたが、殆ど彼の腕に縋りつかないばかりである。ミハイロフは素知らぬ顔に繰り返して言つた。

『お入んなさい！』彼は斯う言ひながら立ち上つた。

裾の長い眞赤な著物をつけて明るい色の帽子を被つた身長たの高い、恰好のいゝ女が闖いの上に現はれた。リーザの姿を見ると、彼女は其處でちよつと足を止めた。ミハイロフは直様迎へに出た。

『貴女でしたか、エヴゲニヤ・サモイロヴナ！』彼は怖ろしく驚いたやうな聲で言つた。『よくまあ見えませんでしたね！』

彼は此の會合が宛ら意外な事件でもあるやうな眼附をした。

エヴゲニヤ・サモイロヴナは眼を瞬瞬いた。彼女の眼には嫉妬の光りが閃ひいた。けれども彼女は何喰はぬ顔をして、畫室の中へづか／＼入つて來た。

此の時の彼女の顔を言へば、全く戀敵といふものを知らぬ女王様が、寵臣の方へ近づいて行くやうなものだつた。そしてミハイロフが若い二人を紹介した時、リーザがたゞ狼狽うろたへて

途方に暮れてゐるのにも拘らず、エヴゲニヤ・サモイロヴナは厭に落著きはらつて、自分を早下するやうに打解けた態度をとつてゐた。

ミハイロフは二人の顔を追うた。彼は酷い心地よい動搖に捉はれた。彼は喜劇のために二人の女を裸にでもさせて居るやうな気がした。併しエヴゲニヤ・サモイロヴナは彼の顔も見もせず、氣味の悪いほど愛想よくリーザに言葉をかけた。

『此の街にお住ひで御座いますか？ 御退屈でせうね？ 此處の人と言つたら、興味のない灰色の人ばかりで御座いますもの……』

『でも私は慣れて居りますから。』自分の手が何うなつて居るのかも知らずに、リーザは怯と答へた。

エヴゲニヤ・サモイロヴナは此の質樸な田舎娘が、程もなく遭遇すべき危険を評價するやうに、彼女の姿や著物や腕や髪を批判の眼で見廻し始めた。彼女はなほ、些らない題目に就いて何だか話を續けてゐた。併し自分の扶助と保護を被つてゐる田舎出の下女とでも應對するやうに、何處までも氣輕な遠慮のない口調だつた。ミハイロフは二人の會話を聽いてゐた。彼は女が斯うまで芝居をするのには、思はずも驚かされた。不満と、或る間の悪い羞恥の感情は彼の胸を騒がせて來た。彼はエヴゲニヤ・サモイロヴナに、自分の作品を見ては呉

れまいかと言ひ出した。

『えゝ拜見するわ……見せて頂戴！』

恰も彼女の沈著と女優振が感傳したやうに、リーザも席から立ち上つて、繪の方へ近づいて行つた。二人は描きかけの油繪やスケッチを見ながら、絶えず親しげに批評を交はしてゐた。二人ともミハイロフには眼も呉れないやうな様子をしてゐた。聽て再び腰を下したが、二人は五分間ばかり矢張り繪の事を話してゐる。そして談話が途切れると、恰も何物かを期待してゐるやうに、二人の女はなほも談話を續けて行かうとするのである。ミハイロフには此の意味が能く解つた。彼等は相互に顔を見まもつて、相互に相手の歸るのを待つてゐるのだ。

リーザは自分が歸るべきであらうと思つた。そして、これが見苦しい必然の結果を持ち來す事も知つてゐた。けれども不可解な力が彼女を抑へて了ふ。エヴゲニヤ・サモイロヴナは時々彼女の顔を覗いて、氣輕に雜談を續けて行つた。リーザはその眼の意味も察した。併し足が彼女の言に從はない。

『ぢや、私歸るわ。』エヴゲニヤ・サモイロヴナは斯う言つて、立ち上つた。『左様なら！』彼女は怖ろしく丁寧にリーザの方を向いた。

リーザも立ち上つて、不器用に手を差し延べた。彼女は、自分ひとり此の部屋に残るのが苦しいほど羞かしかつた。そして自分も歸りますと言はうとしたが、何故か言葉が喉から出て来なかつた。ミハイロフは二人の美しい女が、手袋をはめた手を相互に握り合つてゐるのを、側の方から心地よげに見てゐた。彼等は親しげに見えるが、内心は嫉妬に燃えてゐるのだ。また假令内心は嗔み合つてゐるにせよ、自分には一人ながら身を委せようとしてゐるのだ。此の時馬鹿丁寧に挨拶してゐる二人の恰好のいゝ身體つきは、彼から見れば、もう裸體になつてゐるものとしか思はれなかつた。それほど美しくもあつたし、鋭くもあつた。

一人は裾の長い眞赤な衣裳をつけた、黒い手袋をはめた手の小さい、髪と瞳の黒い、敏捷な、大膽な、華美やかな女で、いま一人の方の女は當惑したやうな眼附をして、羞恥に顔を緘らめた、髪の毛の美しい、可憐な若妻のやうに飾氣のない、そして見るから弱々しい娘だつた。

エヴゲニヤ・サモイロヴナは、自分の黒い眼を彼女の緘らんだ顔に少時止めた。顔は俯向いた。リーザは途方に暮れて、モスリンのヴェールの端を弄り始めた。エヴゲニヤ・サモイロヴナは振り返つて、ミハイロフの顔を冷やかに見た。

『送つて来て下さいな。』彼女は肩こしに斯う言ふと、自分の権力を強めるやうに、すたく

扉口の方へ歩いて行つた。

彼女は廊下に足を止めて、調戲ふやうに冷笑すやうに訊いた。

『もう私も邪魔ものになつたらしいわね？　これで漸と安心したわ。可愛い、娘ぢやありませんか……ちつと百姓じみてはゐるけれど。左様なら。』

此の時ぐらゐ彼女が美しく見えた事はなかつた。ミハイロフは、彼女に對する堪へ難い欲求に眩惑を覺えた。彼は彼女の手を掴んだ。

『貴女は人を嘲弄する、苦しめる、併し……』

『併し彼の娘は苦しめないの？　今は苦痛もすつかり終つたわね。』彼女は瞬きをしながら、深く同情するやうな口調で遮つた。『さあ送つて来て頂戴よ！』

『また来て呉れませんか？』ミハイロフは或る慾望と、彼女を永遠に失ひはすまいかといふ不可思議な恐怖に震へながら、黒い手袋にきつちり填つた彼女の手を放さずに訊いた。

『何しに来るの？』エヴゲニヤ・サモイロヴナは調戲ふやうに遮つた。

『何しに？　私は貴女を愛してゐるんです。』黒く光つた冷たい瞳の中から何物かを得ようとして、ミハイロフは彼女に顔を近づけながら言つた。

彼女は頭を軽く振りながら、口を噤んでゐた。

彼女は胸を騒がしてゐる、待つてゐる、接吻は可能だ——ミハイロフは斯う思うた。彼は憚るやうにして、唇を彼女の薔薇色の唇に近づけた。

『まあ！』彼女は頭を退けながら言つた。『では左様なら！』

ミハイロフは自分を無力な者と思つた。女に對する悪感情は遂に憎悪とまでなつて、ミハイロフの胸に込み上げて來た。横面を張り倒してやりたい、草の上に敲きつけてやりたい、思ふさま踏み蹂つてやりたい——斯ういふ熱望に惱まされながら、彼は小門の所まで女を送つて行つた。

彼女は男と並んで、赤い裾を褰ひげながら歩いた。ミハイロフは彼女が永遠に去つて行くやうな氣がした。

エヴゲニヤ・サモイロヴナは階段を降りながら、不圖足を止めて、狡猾な冷笑の浮んだ顔を彼の方へ向けた。

『貴方も莫迦ね！』不意に斯う言ふと、彼女は再び顔を反向けて、すたく階段を降りて行つた。

ある不明瞭な慾望がミハイロフの頭腦に閃いた。

『何故です……何が莫迦です？』彼は直ちに斯う訊いた。

エヴゲニヤ・サモイロヴナは頭を振つた。

『まあ！』彼女は謎のやうに言つた。『莫迦だから莫迦だつて言ふのよ。』

彼女は響のある聲で魅するやうに言つて、小徑をすたく行つて了つた。

ミハイロフは彼女が小門の蔭に隠れるまで、その後姿を見送つてゐた。聽て彼は踵を廻らした。彼はリーザが待つてゐるのかと思ふと、自分といふものが惱ましかつた。今歸つて行つた狡猾な女と比較すれば、彼にはリーザが味も趣きもない女のやうに思はれるのであつた。

彼女は姿見の前に立つて、ヴェールを着けてゐる所だつた。彼は鏡の中に、彼女の頬が燃えて、今にも泣き出しさうな眼をして居るのを見た。

『リードチカ！』慾望は忽ちの中に眼覺めて來た。彼はリーザを抱き締めたかつた。

『私歸ります……』リーザは微かに言つた。

ミハイロフは彼女の手からヴェールを奪つた。彼女は別に逆ひもしなかつた。彼はヴェールを洋机のうへに置いて、彼女の兩腕を掴んだ。手は顫へてゐた。リーザは彼の顔を見なかつた。

『何うしたの、リードチカ？』ミハイロフは我儘な子供にでも言ふやうに訊いた。

『私を何故彼女に會はせたんです？』彼女は悲しげに言つた。『あれは何の意味なんです？私を愚弄なさるんですか？』

『何が愚弄ですよ？』ミハイロフは宛も驚いたやうに訊いた。『貴女を私の友達に紹介しては悪いんですか？まさか彼の女が来ようとは思ひませんでしたもの……』

リーザは彼の顔を覗いたが、直ぐにまた顔を反付けて了つた。

『何故虚言を仰しやるんです？』彼女は貴女の……戀人です……』

ミハイロフは微笑ひ出した。

『何うして……私は漸と一月ばかり前から友達になつたんですよ。もう嫉妬ですか。たゞの友達ですつて言へば……私の愛してゐるのは貴女です。』

彼は女の腕を柔しく引きよせた。リーザはそれに逆うた。弱々しく逆ふと共に、彼女の柔かな美しい肉體は弓なりになつた。

『それは虚言です！』彼女は言つた。けれども彼女の聲は希望に顫へてゐる。

『眞實です！』

彼女は男の顔を再びチラリと見た。

『眞實？』併し私には同じ事ですわ……彼女の所へ行つていらつしやい。』

『貴女は嫉いてゐるんですか？』彼女の眼を覗きながら、ミハイロフは調戲ふやうに訊いた。『さうぢやありませんわ。嫉妬を起す理由が私にありますか？ 何んにもそんな権利はないぢやありませんか。』

ミハイロフの頭脳には残酷な考へが浮んだ。

『勿論そんな権利はありませんさ。』彼は容赦なく言つて、彼女の腕を放した。

リーザは吃驚したやうに彼の眼を見詰めた。

『さうですわ。無論ありやしませんわ……』彼女は萎れた聲で繰り返して言つた。『私歸ります……もう時間です。』

彼女はヴェールをとるために再び手を延ばした。ミハイロフは素早くヴェールを向うへ推しやつた。

『権利はありませんさ。』彼女に對する自分の威力に快感を覺えて、ミハイロフは同じ言葉を鋭く繰り返した。『貴女は私のものになりたくないんでせう。併し私には貴女を他人に渡す事は出来ません。私は貴女を愛してゐます。けれども私は男です……貴女のすべてを求めてゐるんです。私は苦痛です……貴女が斯んな近くにありながら、私の自由にはさらない……何れほどこれが苦痛だか貴女には解りますまい。』

リーザは蒼くなつて聽いてゐた。彼女の唇は顫へて來た。

『そんな……そんな事をしなければ……戀は出來ないものなんですか？』彼女は辛うじてこれだけ言つた。

『私には出來ません。』ミハイロフはきつぱりと言つた。『每晚私は貴女を夢に見ます……貴女を裸體にして、貴女の肉體を抱き締める……』

リーザの顔にはさつと紅が流れた。彼女は両手で顔を隠さうとした。けれども腕を上げる事が出來ない。羞恥は痛いほど彼女の胸を締めつけた。彼女は男の前に眞裸體で立つてゐるやうな氣がした。そして此の時ぐらゐ男を戀しいと思つた事はなかつた。

『我々は事を定めて了はなければならぬ。』ミハイロフは彼女の方へ身體を屈めながら言つた。彼の黒い眼は彼女の胸底まで見徹してゐるやうに思はれる。眩惑するやうな温氣が男の方から流れて來て、二人の間には或る抵抗し難い物が漂うてゐた。

『何時まで斯うしては居られません。』ミハイロフは緊りのない作聲で齒の間から言つた。

『今日直ぐ貴女が私のものになつて呉れるか、それとも私が……彼の女だつたら貴女のやうに斯うは私を苦しめないでせうよ。』

最後の自負心の閃光は彼女に暫時の勇氣を與へた。

『お好きになさいました。』リーザは傲然と言ひ放つた。

彼女はヴェールを掴んで、それを擴げ始めた。彼女は男の方へは眼も呉れなかつた。侮辱された純潔な少女はヴェールを著て、直ぐにも歸つて行きさうである。

ミハイロフは洋机に腰掛けて、彼女の方を見まもつてゐた。屈み勝ちな彼女の柔かい背や、ヴェールの絡んだ手や、心もち傾げた白い頸筋は、烈しい酷い を彼の五體に起させるのであつた。

彼は彼女の身體や動作の肉感的な詳細を見逃すまいとして、恰も著物を見透す能力でも有するやうに、貪慾な眼を見据ゑてゐた。餘り實驗に深入りして、彼女を逃がして了ひはすまいかといふ懸念もあつた。併し不可解な力が彼を抑へてゐる。彼は眼を据ゑたまゝ口を噤んでゐた。

リーザは長い間ヴェールを弄つてゐた。彼女の動作は次第に遅々として來た。彼女は更に何か動作を捜してゐるらしい。何等かの口實を設けて、此處に止らうとして居るらしい。けれどもヴェールはもう掛けてしまつた。手袋も填めて了つた。リーザは唇に指先を當てながら、姿見の前に立つて、頻りに何か考へてゐる。苦しい躊躇の中に身體を屈めてゐるリーザの女らしい姿には、ミハイロフが憐憫に胸を痛めるほど頼りなさうなところがあつた。唇

へ當てた指先には美しい悲しい風情が溢れてゐた。けれども彼は矢張り腰を掛けて、眼も放たずに黙つてゐる。

彼女は靜かに身體からだを動かした。そして二歩ばかり行くと、再び考へ込んでゐたが、聽て思ひきつて扉口の方へ歩き出した。

ミハイロフは黙つてゐた。彼の全身は怖ろしい緊張に震へてゐた。恰も或る神祕的な力が自分の身體から流れ出るやうである。

リーザは扉口に止つた。聽て急に振り返つて、ちつと男の顔を見詰めた。ミハイロフも彼女の顔をちつと見詰めたまゝ口を噤んでゐた。これは殘酷な遊戯であつた。彼はリーザを憐れむと同時に、生涯に経験のない興味と羞恥とを覺えたのであつた。

『左様なら！』リーザは顔も上げずに低い聲で言つた。

『左様なら！』ミハイロフは落著きはらつて冷酷な返事をした。

彼女は男の言葉を待つてゐる。行かうか戻らうか、明かに躊躇ためらつてゐる。けれども彼は一言も聲を掛けなかつた。

『左様なら！』ミハイロフの胸が震へるほど、彼女は痛々しく繰り返して、扉口の方を向いた。

欠

# 欠

再び彼を訪れて、再び今日のやうな……を自分に與へようとは思はれない。一人になりたい、煙草を喫ひたい、女の氣息と匂ひの籠つた畫室を脱れて、花園の新鮮な空氣の中へ出たい。

併しリーザは出て行かなかつた。彼女は扉口に立ち止つて、唇に指先を當てたまふ、何時まで経つても考へ込んでゐる。ミハイロフは彼女の背後に立つて、髪の亂れた、物思はしげに俯向いた彼女の頭を見詰めながら、彼女が出て行つて了ふのを待つてゐた。彼は羞恥と戰慄に壓せられた彼女の頭腦の内部に急轉してゐる憂慮や恐怖や絶望の混亂さへも意識した。恐らく彼女には今後自分が何うなる事か解らないのだらう。彼女はたゞすべてが終つて、自分の生涯には取返しのない變化の生じた事を徒らに覺らうと努めてゐた。彼はリーザを憐れんだ。けれども疲労しきつた肉體はたゞ安靜を求めて止まない。ミハイロフは殆んど忍耐しきれない程に、彼女が歸つて了ふのを待つてゐた。その上彼女の背後につくねんと突立つて、彼女の頂を目的もなしに見詰めてゐるのは、随分氣の利かない話である。

彼は聲を掛けようとした。その時リーザは突然彼を肩越しに見た。彼女の唇は哀願するやうな弱々しい微笑に顫へてゐた。



『なあに？』彼女の表情を解しかねて、ミハイロフは訊いた。

リーザは返事をしなかつたが、黒い眼ばかりは、顔全體が明るく見えるほど輝いてきた。リーザは靜かに身體を屈めて、彼の強い男らしい腕に接吻した。彼女は淑やかに感謝してゐた。そして自分の運命と彼の意志に對する服従を表情し、自分の氣弱を譴責せぬ事を哀願するやうに、絶えず何となく怯々してゐた。

彼は驚きもしなければ、手を引込めもしないし、口を利きさへもしなかつた。彼にはそれが當然な事のやうに思はれた。彼女は男が自分よりも強大で、すべてのものから自分を救助し、自分を防禦して呉れる事を信じなければならぬのである。

程なくリーザは歸つて行つた。

ミハイロフは畫室の内部を懶げに見廻した。

夕暮は近づいて來た。畫室の大窓は北向きになつてゐるので、花園の外れでは樹木がまだ金色に輝いてゐるのにも拘らず、此處は最早影になつて、緑はエメラルドのやうな冷たい色をしてゐた。畫室の内部は影が濃かつた。寫生畫の色彩や畫布の美しい縞は、此の暗い緑の中に融けてゆく。壁煖爐の上に置かれた剣製の大きな梟も黒ずんできて、恰も生あるものゝやうに思はれる。細工物の黄色い眼玉は物怖ろしい眼附でちつと上の方を見詰めてゐた。

てゐた。

ミハイロフは再びリーザの無言の接吻を思ひ出した。彼は悲しくなつた。そして自分といふものが羞かしいやうでもあつた。

女性の と に恍惚とした後で、斯ういふ不吉な病的な感情を覺えたのは、彼には生涯に初めての經驗だつた。一時的の歡樂は彼女が自分に支拂うた苦痛を償ふだけの價値を有たない。これは自分がリーザを愛してゐないが爲めではなく、彼女を から にした爲めであるらしい。若しさうではなくて、これが戀愛と呼ばれる光輝ある感情であつたなら、今日の出來事は何れほど美しく美しくあつたらう。彼は急に戀を味ひたくなつた。自分の生涯を一人の女に託し、彼女の中に全世界を見、彼女の胸に——一時的の戀人ではなく、永遠に愛すべき妻の胸に安らかな夢を結びたくなつた。

『莫迦な！』ミハイロフは惱ましさうに考へた。『他の女達の美しい事を忘れる氣か？ 彼女が何れほど美しいにせよ、數多の美しい女を一人の女に換へる事が出來ようか？』

彼はエヴゲニヤ・サモイロヴナの事を思ひ出した。彼の眼は黒い炎のやうに燃え上つてきた。黒髪の女、金髪の女、瘠せた女、肥つた女、婀娜やかな女、從順な女、強情な女、猫のやうに敏捷な女、羚羊のやうに溫順な女——世界にはエヴゲニヤが何れほどゐるか分らない。

世界は彼等の美しい肉體で満たされて、地面は彼等の露はな優しい腕の影に蔽はれてゐる。彼等から眼を反向け、彼等を永遠に見捨て、彼等の中から選ばれたたゞ一人の女と生涯を共にするのは、莫迦らしくもあるし、第一退屈で堪るまい。悲痛の思ひが増すのも全く此の永遠の戀のためである。二つの矛盾した感情は逃場のない混乱によつてミハイロフを取圍んだ。

怖るべき災禍の豫感を伴うた怪しい胸の動搖は、神秘的な闇に包まれてゐる畫室の内部に居たゞまらなくなつて、ミハイロフが花園へ出て行つた程、病的な思ひがけないものだった。

出がけに彼は自分の繪の前に少時立ち止つて、黒みゆく色彩をちつと見詰めた。

畫布の上には黄昏の野原が柔かい色合で描かれてあつた。狭霧は高く積み上げられた物思はしげな稻村の間の、刈り取られた野原の上に雲霧いて、地平線の上には赤い神秘的な満月が懸つてゐる。

ミハイロフは此の繪を見詰めてゐた。彼の胸には殆んど感動に近い驚嘆が起つた。自負心は感激の如くに彼の胸を高らめさせた。

『自分が製作したのだ！』彼の頭脳には斯んな考へが閃いた。『何といふ出来栄だ！ 世間

は泥濘と悲痛と倦怠ばかりだが、此の偉大な藝術の世界は、何といふ美しさだ、何といふ清らかさだ！』

そして彼は何故か再びリーザが不憫になつた。

『彼女は何故自分の手に接吻したんだらう？』ミハイロフは惱ましさうに考へた。

彼は花園へ出て濕氣を帯びた樹木の下を歩き始めた。未だ明るくはあつたが、もう黄昏と濕氣が匂うてゐる。彼も漸々に氣が落著いて來た。身體は回復し、頭脳は澄んで、悲哀も何時とはなく消え失せて了つた。

ミハイロフは樹蔭の長椅子に腰を下して、獨唱し始めた。けれども少時すると口を嚙み、柔かい縮毛の髪を撫で、未だ幾分か疲労の残つてゐる美しい眼で、穩やかに四邊を見廻してゐた。

『併し兎に角氣持がいゝ！』彼は斯う思ふた。

彼は黄昏の空や、靜かな花園や、若い女や、自分の青春と才能に對して、恰も善良な何人かに感謝してゐるやうである。

水色の著物をつけた見なれぬ娘が、家の方から小徑を歩いて來た。恐らく畫室に寄つたのであるが、彼が其處にゐなかつたので、花園の方へ捜しに來たのであるらしい。

『まだ何かあるのだな?』ミハイロフは當惑の滑稽な澁面を作つた。そして急にマリヤ・バ  
ーヴロヴナの下女であるのを思ひ出した。エヴゲニヤ・サモイロヴナは彼女の所にゐる。彼  
の胸には軽い好奇の歡喜が起つた。

『何か用かね?』彼は腰掛けたまゝ訊いた。

『お嬢様がお手紙を……』娘は爽やかな聲で答へた。

胸騒ぎと好奇心と不明瞭な勝利の誇りとを覺えて、ミハイロフは小さな封筒を裂いた。

『セルゲイ・ニコラーエヴィッチ! 未だ歸らないのなら、あの百姓娘を逐ひ出して、私の所へい  
らつしやい。あんな鶯鳥のやうな女と一緒に貴方を見るのでは、私の審美眼が惱まされるの  
はお解りでせう。勿論私は何うでもいゝのですが、貴方に相應しい事ではありませんね。』  
女は彼の傍に立つて、著物の端を弄りながら待つてゐた。

ミハイロフはジーネチカの手紙を繰返して讀んだ。淡い嫉妬の情は、一語々々の中に溢  
れてゐる。彼女の黒い光つた眼や、冷笑を浮べた薔薇色の唇は、自信の強い臆面のない文  
章の蔭から覗いてゐる。ミハイロフは喜ばしげに勝利の微笑を洩らした。リーザの幻影は  
忽ちの中に薄らいで、蒼白い哀れなものとなつて了ふ、そしていま一人の Coquette な傍若  
無人な女が自分の美を恣にして現れて来る。ミハイロフはあらゆる疲労を忘れて、春の湯

上りのやうな爽かさを覺えた。

『お返事が御座いますか?』女は斯う訊いて、何故か羞かしさうな微笑を洩らした。

ミハイロフは此の健康な質樸な美しい少女の顔をぢつと見詰めた。白いハンケチが彼女  
によく似合ふ。櫻實のやうな黒い眼がその下から狡猾さうに輝いてゐる。彼は既に幾度と  
なく顔を合はせたのであるが、未だ嘗て此の女に注目した事はなかつた。不圖彼は此の娘  
が女であるのに氣がついた。彼の胸には考へも言葉も計畫もなく、ほんの少時彼女を自由  
にしようとする心地よい慾望が起つた。彼は此の娘に抱きついて、しつかりと接吻してや  
りたかつた。

此の慾望は彼の限附に判然と現れたらしい。娘は急にもぢくしながら、體裁惡さうに  
微笑を洩らした。彼女が抵抗しない事だけは明かである。

## 二十八

夜は眞暗だつた。そして明るい所から振り返つて見ると、何處からが樹木で、何處から  
が谷底のやうに暗い空であるかさへ分らない。樹木の梢は何處か及び難い高所へ飛び去つ  
たやうに思はれる。そして遙か上空には星影が煌々と閃いてゐた。洋燈は樹蔭の洋机の上

に點つて、夜の空氣の中では何時に限らず斯うであるが、何となく祭日のやうな氣分を流してゐる。エヴゲニヤ・サモイロヴナとミハイロフが立つてゐる所から見ると、二人の方へ背を向けて、洋机アツキについてゐる人達の姿が、眞黒な影法師のやうに見える。騎兵少尉クラウゼや、肥大なドクトル・アルノリヂイや、激昂して洋机を敲いてゐるチーシユの顔は洋燈の光に照らされてゐた。荒々しい聲が聞えて来る。彼等は何事か口論してゐる。

併し樹木の下は眞暗で静かだつた。たゞ枝々が闇の中で、毛もくじやらかな動物の足のやうに揺れてゐた。

『信じませんよ、信じるもんですか！』エヴゲニヤ・サモイロヴナは頭を振りながら、調ホム戯カふやうに言つた。

彼女の顔は洋燈の光に弱々しく照らされて、闇の中でも謎のやうに白かつた。

『併し貴女は何うだつていふんでせう。』ミハイロフは肩を縮めながら遮つた。『貴女だつて生涯を私と共にする事は承諾しないぢやありませんか。それが解らないほど貴女は莫迦ぢやない。貴女は欺かれるには餘りに聰明です……新しい女ひとでも矢張り普通の女同様に月並を喜ぶんですかね。ではあの女をかりに私の戀人としますさ。私の考へではたゞ官能に刺戟を與へるだけの事です。』

『私はモルモン教徒ぢやありませんよ。』エヴゲニヤ・サモイロヴナは嘲るやうに言つた。

『若し私があの女と一緒になつたら、罪は貴女にあるんですね……』ミハイロフは抜目ない口調で言葉を續けた。『貴女だつて子供ぢやなし、今時の男が女の足もとで譯もなく溜息などを吐かない位の事は解つてゐるでせう。それは返らぬ過去の人達が演つた芝居です。牧羊者の蜜のやうな唄などは復活させたくありません。勿論貴女だつて歡樂ばかりを求めて、一人の幸福な配偶者に止まる氣はありますまい。お相互たがひに騙し合ふのは止めて、我々の必要とするものを自分に與へませう……貴女は度胸がある。』

彼の熱した聲は彼女の胸を撫で擦つて、露骨むくだけな慾望で彼女の肉體を取圍んだ。併しエヴゲニヤ・サモイロヴナは頭を振りながら笑つてゐた。

『貴女はドン・フオチンですよ。』彼女は宛ら男の心を察したやうに嘲聲で言つた。

『何故です？』ミハイロフは空々しく驚いた様子ぶつをしたが、それでも幾分かは闇の中で顔を赧からめた。

『まあ！』エヴゲニヤ・サモイロヴナは譴責するやうに言つた。『貴方は私が子供ぢやないつて言つたでせう……可愛いもんだわね、セルゲイ・ニコラーエヴィッチ！』

彼女の口調には何物かが潜んでゐる。突然ミハイロフの胸には堪へ難い考へが浮んで來

た。自分以上に口巧者な女を欺かうとしてゐる自分は、實際他所から見たら滑稽ではあるまいか？

『恐らく此の女は幾度となく斯んな言葉を耳にして來たんだらう。』彼の頭腦には斯んな考へが閃いた。

『そんな事を言つて、何うしようと言ふんです？』自分の不利な形勢から脱れるために、ミハイロフは矢張り同じやうな口振りで訊いた。

『あたりまへだわ……』ジーネチカは不明瞭に言つた。『もう少し早ければ、放縱な歡樂の誘惑も利目があつたでせうよ……セルゲイニコラーエヴィチ！ 今ちやちつと遅いわ。もう少し伶俐な手管をお考へなさいな！』

ミハイロフは齒を食ひ縛つた。婀娜やかな姿や、狡猾さと近づき難さを含んだ『まあ』といふ嘲弄と共に、ミハイロフには彼女がこの上もなく魅力のあるものに思はれた。彼は彼女に跳び掛らうとした。彼女を突き倒さうとした。彼女を踏み蹴らうとした。彼女を狂氣の如くに凌辱しようとした。これほど近距離にありながら、これほど遠距離にある彼女の肉體の中に、その時こそ全世界は集中されるのだ。

『もう少し淡泊になるんですか？』彼は戸惑ひしながら、二つの意味をかけて、無遠慮に、

殆んど侮辱されたやうに言つた。

『さうかも知れないわ。』エツゲニヤ・サモイロヴナは不得要領に答へた。

女の眼は羞恥もない期待の中に輝いてゐるらしく思はれる。ミハイロフは野獸が狡猾な牝獸を押へつけるやうに、齒軋りをしながら彼女を抱き締めた。

彼女は男の胸を両手で突張りながら、忽ち後方へと退いた。併し別に彼を突き退ける事もなく、妙に黒光りのする眼でちつと男の顔を見詰めてゐた。

『斯うですか？ 斯うですか？』彼女のしなやかな婀娜やかな腰を屈めながら、ミハイロフは嗔聲で言つた。

彼は燃えるやうな唇を女に近づけた。彼の氣息は殆んど唸聲のやうだつた。併し、唇が彼女の胸に觸れた時、ジーネチカは苦もなく彼を突き退けて了つた。

『もう澤山だわ！』彼女は冷やかに言つた。

彼にはその意味が解らなかつたし、また聞えもしなかつた。彼は再び彼女を捉へようとした。けれどもジーネチカは二三歩退いて、警告するやうに言つた。

『まあ随分ね！』

此の言葉は彼を狂氣にさせるのであつた。地面は足下に揺れる。無益な緊張が惱ましい。

彼は彼女の婀娜やかな温かい肉體の感覺が未だ残つてゐる兩腕を擡げて、彼女の方へ近づいた。——彼は先刻まで絹の著物越しに彼女の冷たい著物で被はれた柔かい胸の接觸を感じる。

ミハイロフは獲物を奪はれた野獸のやうに呻き出した。

けれどもエヴゲニヤ・サモイロヴナはもう數歩隔つた所に立つて、亂れた髪を落著きはらつて繕うてゐた。

『貴方も險難になつたわね……私そこが氣に入つたわ。』彼女は幾分か顫へを帯びた聲で言つた。

彼女は聲高に笑ひながら、黒光りのする眼を彼の顔へ向けて、洋机の方へ駈けて行つてしまつた。

ミハイロフは徐ろに彼女の跡を追うた。彼の肉體は顫へてゐた。燃えてゐた。眞黒な樹木は彼の眼前を緩やかに踊り廻つてゐる。

『畜生！』彼は斯んな粗暴な言葉を考へた。

遠くからナウーモフの鋭い聲や、チーシユの激昂した甲高い聲が聞えて來た。彼等は相變らず口論してゐるのだ。ミハイロフは無意識に斯んな事を考へた。

『彼奴たちはよく厭きもしないもんだな。』

併し此の時にはナウーモフの言葉がもう手にとるやうに聞えた。此の不思議な男は、一度口を開くと、すべての者を謹聽させずにはおかない。彼の狂氣のやうな辯舌の中には、新思想に感染した人達の理論よりは、遙かに聴くべき所のものがあつた。ミハイロフには彼の辯舌が自分の胸に感動を與へ、不吉な思案の中に自分を沈めて行く理由が解らなかつた。そしてナウーモフが口を開く毎に、ミハイロフは彼の荒んだ顔から眼も放さずに聴き入つた。

『ヴィクトル・ユーゴオが堡砦の上に立つた時……』ミハイロフは近づきながらチーシユの聲を耳にした。『ある男は彼に武器をさし出して言つた。「市民ユーゴオよ！ 貴方の手には武器がないではないか！」ユーゴオはこれに答へて、「市民は自由のために死ぬ事は知つてゐる。併し他人を殺傷する事は知らない。』』

『滑稽だ！』ナウーモフは鋭く遮つた。

『或はさうかも知れない。』チーシユも悪意のアイロニイを帯びた聲で鋭く答へた。そして笑つた。

『勿論です。』ナウーモフは言葉を續けた。『血液が最後の一滴となるまで戦つたにせよ、自

由のために戦つたのなら解つてゐる。併し自由のために死ぬのなら——これこそ莫迦の骨頂といふものだ！』

『併しそれは不慮の死でせう。』

『では不慮の死としますさ……併し自由のために他人を殺害するのと、自由のために自分が犠牲になるのとは意味を異にする。群衆も自由のためには死に向つて突進した。けれども自由は何等の幸福をも齎さない。革命や戦争が始つて以来、未だ嘗て幸福の來つた例がない。ユーゴオ程の人物の口から斯んな謔言を聞くのを私は残念に思ふ。』ナウーモフは言つた。『畜群が——群衆が言つたといふのなら解つてゐる。大學生あたりが叫んだら、美しい言葉にさへ響く……雷同——羊の群には相應なところだ。一匹の羊が海へ跳び込んだために、總てがそれに續いたといふのなら解つてゐる。併し羊群が跳び込んだために、牧羊者までがそれに續いたといふのでは、もう見苦しいのは通り越して、單に莫迦らしいばかりだ。』

『さういふ論據では、到底堡砦の上へは上りましますまいね？』チーシユは激昂して、身體を震はしながら言つた。

『何うして？』ナウーモフは冷やかに言つた。『堡砦の上へなら上りまします。發砲して

もいゝです。たゞその發砲によつて、空から月を射落す氣になつてはいけません。』

『貴方は冗談にしてさふ。』チーシユは氣難かしく言つた。

ナウーモフは彼の顔をぢつと見詰めた。

『私は冗談を口にした事がない。また冗談を言ふ術を知らない。私は自分の考へを言つてゐる。何時も同じ事を言つてゐる。』

『萬物は空の空なりですか？』

『今更練り返すまでの事ありませんさ。既に幾度か私はこれを口にした。貴方にしても胸の奥底では、此の事實を認めてゐるに違ひない——貴方がそんな憔悴した神経質な顔をしてゐるのだつて、理由がないとは思はれない。私は此の一事を知つて貰ひたいと言ふんです。假令如何なる政變にせよ、革命や、資本主義や、社會主義の如きものは、要するに永遠の苦惱に運命づけられた人類には、何等の幸福も齎さない。若しも、死が我々の背後に迫り、我々が暗黒へ去り、偉大なる人物が倒れ、如何に焦つても、萬物が不満と苦痛との永遠の保證を自らに荷はし、世界が我々の看守すべき大墓地となつたら、貴方の社會政策は我に何を與へます？ 併し死に就いては言ひますまい。どうで結局は顔を合はさなければならぬ。まあそれよりは生を論じませう。假りに生活状態は平等になるとしても、慾望

や性格や事變を平等ならしめる事が出来ますか。不老不死の靈藥は貴方がたの頭腦を粉碎する岩石によつて否定される。平等は及び難い慾望に對する苦悶の中に消滅する。また富や權利の點に於ては人類を平等にならしめても、賢人と愚人が平等になりますか、美人と醜婦が平等になりますか、虚弱なる者と健康なる者が平等になりますか。戀を有たない者は、戀のために苦悶して、假令一人の女にせよ、自分を愛撫して貰ふ幸福に憧憬する。一人の女を有する者は、無味な生活の中に死ぬ。巨人の女を有する者は、唯一の熱情を渴望する。萬事が斯うです。人類は同一の状態に満足することが出来ない。不老不死は堪へ難いほど退屈なものになる。今日も死なない、明日も死なない——人類は神の恵みを願ふやうに、遂には死を祈り……』

『つまり何うしろと言ふんです？』チーシュは苛々しながら叫んだ。

『要するに死ねばいい。どうで死ぬものなら、一刻も早い方がいい。』

『貴方はさう考へますか？』不意にひよる長いクラウゼがメファストのやうな眉毛を釣り上げながら訊いた。

ナウーモフは彼の方を見た。

『さうですとも。併しこれが總てではない。人類も生命に關する迷信から醒させなければ

ならない。愚劣極まる喜劇を繼續する義務のない事を悟らせねばならない。妊婦を見ると、私の胸には何時も殺意が生じて來ます。若しもその胎兒が發生して、自然の順序として、その子孫が生長する時には、何れほど怖るべき苦痛の川が、彼女の肉體から流出するのであるか想像して御覽なさい。彼女の子孫には不具者も出來よう、悪人も出來よう、殺人者も出來よう、自殺者も出來よう……或る者は戦死する、或る者は轢死する、或る者は發狂する……彼女は未來の不幸者に對して、何れほど怖るべき罪惡を犯すことになるか分らない。彼女は苦痛の中に哀れなる者を出産し、苦痛と疑念の中に養育し、嬰兒の呼吸の一つ一つにさへ戦慄を覚え、墓に入るまで嬰兒の未來を氣遣ひながら、我が子を此の世に残して死んでゆく……全體何の爲めです？ 無数の子孫をして堪へ難い苦痛の中に、自分の記憶を呪咀せしむるためなのです。母の腹に宿つた日が呪はしい、私を孕んだ胸が呪はしい、私を導いた手が呪はしい……生れなければよかつたのだ……』

『なあんだ、舊譯の引用か！』チーシュは氣難かしさうに言つた。

『否や、引用ではない。』ナウーモフは激昂して叫んだ。『これが人生の眞理です。生活の革新を夢想しながら日毎に死んでゆく貴方のやうな不幸者は、何故か人類を欺いて、人道の將來や、正義の黄金時代に關する幻想を、彼等の頭腦に吹き込まうとしてゐる。正義などのあ



り得る譯がない。宇宙は我々を有利な状態には放たなかつた。宇宙は我々の苦痛を必要とするんです。貴方とても何時かはすべてを理解させよう。私の言葉が眞理であることを會得させよう。そして早かれ晩かれ自分の生命を……』

ナウーモフは口を噤んで、少時の間は細い指先で洋机の隅をコツ／＼叩いてゐた。誰も彼も沈黙して、何物かを期待してゐた。チーシュは忌々しさうに彼等を見廻して、鋭い聲で笑ひ出した。

『貴方は人を驚かせる。貴方の話ぢや、明日にも皆が首を縊りさうですね。そんな臆病な人間はありやしない。貴方は怖るべき罪惡を犯してゐるんです。運命が言語によつて他人を感動せしむるだけの頭腦と才能とを興へたのなら、貴方は彼等を向上せしめ、未來に對する希望を興へ、失心した者を鼓舞せしむる義務がある。それに何です、貴方は自殺俱樂部でも建てる氣になつてゐる……眞面目に聽いてはゐられない。呆れ返つて了ふ……』

ナウーモフは彼の顔を見詰めた。チーシュには彼の眼が悪意の鋭いアイロニーに充たされてゐるやうに思はれた。

長い沈黙が訪れて來た。花園で微風の囁いてゐるのが聞える。彼等は或る不可解な恐怖に捉はれた。彼等は心の聲に耳を傾けた。しかし其處にも矢張り陰鬱な聲を聞くのであつた。

生命といふものが極めて暗い微かなものに思はれる。ドクトル・アルノリヂイは力なく溜息を洩らした。自分の生活を或る憧憬の世界に結ぶべき信仰を有たない騎兵少尉のクラウゼは、可もなく不可もなしに退屈してゐた。チーシュは苛々しながら、何事かを自分の胸に問うたが、返答を得るには至らなかつた。ミハイロフは妙に胸を騒がしながら、彼等の莫迦を傍觀してゐたが、此の莫迦は次第に彼の胸を支配して來た。此の家の壁の中には顔色の蒼ざめた悲しい女が病床に横はつてゐた。生活を損はれた哀れなネルリも何處かに隠れてゐるのだ。たゞエヴゲニヤ・サモイロヴナ一人はナウーモフの顔を怪訝さうに見詰めてゐた。彼女の黒光りする眼には、あれほど無頓著に落著いてゐながらも、矢張り恐怖に動搖してゐる彼女の生が閃いて見えた。

『自殺俱樂部か！』チーシュは呟いた。『惡魔にはこれも必要だらうさ。』

エヴゲニヤ・サモイロヴナは惡夢から覺めたやうに戰慄した。

『アルブーゾフさんは何處なの？』彼女は訊いた。

ドクトル・アルノリヂイと騎兵少尉クラウゼは振り返つた。

『何うしたの？』二人の顔附に氣がついたと見えて、エヴゲニヤ・サモイロヴナは訊いた。『何か祕密の事なの？』

ひよろ長いクラウゼは少時黙つてゐた。

三五六

『もう秘密でもありませんがね。』彼は嚴かに眉毛を釣り上げながら言つた。『また秘密にもして置けますまい。將校會議はどうで事件を發表して了ふでせう。』

『では決闘が成立したと言ふの？』エヴゲニヤ・サモイロヴナは好奇心に捉はれながら訊いた。

『さうです。』クラウゼは斯う答へて、洋杖のやうに直立した。

エヴゲニヤ・サモイロヴナは大きく見開いた眼で、彼の顔をちつと見詰めた。

『悲しむべき結果になるだらうにな。』決闘する人も、決闘そのものも呪はしいやうに、チーシは氣難かしい顔をしながら言つた。

『さうですとも。』クラウゼは重々しく同意した。『勿論さうです。アウグーストフは聯隊でも指折りの射手ですが、アルブーゾフは短銃を手にした事もない。彼の男は屹度アルブーゾフを射殺して了ふ……さうだ、射殺して了ふに違ひない。その上彼の男は冷酷な残忍な……』

騎兵少尉クラウゼは果してアルブーゾフを射殺して了ふ程、副官アウグーストフが残忍であるか何うかを熟考するやうに、少時の間はちつと黙り込んでゐた。彼等はある期待を以て、

クラウゼの顔を見まもつた。四邊は靜乎として物音もしない。恰も一同が彼の思索を追うて居るやうである。

『さう、どうも疑問ですね。』クラウゼは總てを考察して、愈々動かすべからざる結論にでも達したやうに言つた。『射殺して了ふに違ひない。』

彼は此の言葉を口にするに、確信と嚴肅とを以てした。彼等は思はずも戰慄した。周圍には物怖ろしい冷氣が搖めいてゐる。此の言葉を耳にすると、エヴゲニヤ・サモイロヴナは何故かミハイロフの顔を見返つた。これが動機となつて、一同は無意識に彼の方を向いた。

既に一同が席を離れてからも、ミハイロフは頂垂れたまゝ、たつた一人洋机に残つてゐた。彼の顔は蒼白かつた。暗い眼もそれがたにめ黒味を帯びて見えた。けれども洋机掛を執拗く見詰めてゐるので、彼の表情ばかりは分らない。

此の時側の方から近づいて來て、洋机に凭りかゝつた者があつた。忍び足ではあつたが、彼等は不圖それに氣がついて、吃驚したやうに振り返つた。

兩手で洋机の端に凭り掛りながら、ネルリが其處に佇んでゐた。洋燈は彼女の蒼ざめた顔を照らした。眉毛は動いてゐる。

『私は何も彼も聞きました……眞實の事なのですか？』彼女は斯う訊かうとする者のやう

に、クラウゼ 顔をぢつと見詰めた。

怖ろしい緊張の一分間が過ぎた。ミハイロフは怖ろしさの餘り、殆んど跳び上らないばかりだつた。彼はネルリが此の家に住んでゐるのを知らなかつた。——彼等が今日エヴゲニヤ・サモイロヴナの家を集つた時、ネルリは一度も顔を見せなかつたのである。ジーネチカは今にもネルリに抱きつきさうな勢ひだつた。ネルリは細い眉毛を彼女の方へピクリと動かした。エヴゲニヤ・サモイロヴナは激しい緊張の中に身體を沈めた。

ネルリの薄い唇は動いた。

『決闘は何時で御座います？』彼女は固くなつて、物靜かに訊いた。

決闘の日に就いてはクラウゼも未だ言はなかつたのであつた。彼等は自分達がこれを質さなかつたのを訝かしく思つた。騎兵少尉はひよる長い身體を直立させながら、ネルリの顔を嚴かに冷やかに見詰めてゐた。彼は自分の返答の結果を熟考してゐるらしい。ネルリは驚愕したやうな、威嚇するやうな眼を、彼の面から放さず待つてゐた。

『明後日です！』騎兵少尉クラウゼは不意にきつぱりと答へた。そしてネルリに挨拶すると洋机を離れて、闇の中に姿を隠して了つた。

ネルリは洋机の端に凭れて、騎兵少尉が消えて行つた方を見まもりながら、依然として一

つ姿勢で佇んでゐた。ミハイロフは死人のやうに蒼ざめた顔をして、彼女の方へ近づいて行つた。彼は何を言はうとしてゐるのか自分にも解らなかつた。ネルリは冷酷な眼附で彼の顔を見詰めた。彼は狼狽へて立ち止つた。

一同は途中で不體裁に立ち竦んだミハイロフの方を見まいとして、氣遣はしげな聲で何か怯々と話し始めた。

『全體決闘では短銃の名手が必ずしも勝つとは定つてゐない。』ダヴィヂェンコが言つた。『短銃の持ちかたも知らない男が有名な射手を射殺した例は幾らもある。』

『無論さうですわ！』エヴゲニヤ・サモイロヴナは斯う答へて、無意識に自分の動作を進めながら、ネルリの手を握つた。

ネルリは其處を動きもしなければ、手を振り拂ふでもなく、片方の手で矢張り洋机に凭り掛つてゐた。

『さうですとも！』ツレーネフも口髭を捻りながら彼女に同意した。『單に標的を狙ふのと、相手の銃口が自分の方へ向いてゐる時に狙ひを定めるのでは大いに趣きが違ふ。』

不安が襲うて來た。彼等は自分達さへ疑問にしてゐる事を、ネルリに信服させようとした。けれどもネルリは不意に笑ひ出して、洋机を離れて、家の方へ逃げて行つて了つた。

再び沈黙が訪れた。彼等は茫然として別辭を告げ始めた。

三六〇

『セルゲイ・ニコラーエヴィッチ！』エツゲニヤ・サモイロヴナはミハイロフを呼んだ。『貴方に少し話したい事があるの。』

ミハイロフは頂垂れたまゝ足を止めた。彼には彼女の言はうとして居る事が能く解つてゐた。他の人達は急ぎ足に歸つて行つた。何となく胸が重苦しくて不愉快である。エツゲニヤ・サモイロヴナは身體を揺ぶりながらミハイロフの前に立つてゐた。彼女の顔には嘲弄と皮肉が浮んでゐる。

ミハイロフは黙つてゐた。彼の喉は何物かに締めつけられる。彼は自分といふものが、此の瞬間に於てさへ、最も露骨な凌辱や突撃に抵抗する事も出来ない程、哀れな小さな物に思はれてならなかつた。

『正直の所を話して頂戴な！』男の態度を察し、その無力を知つて、復讐的な快感を味ひながら、エツゲニヤ・サモイロヴナは鋭い聲で言つた。『此度の狂言では役割が悪いやうな氣はしなくつて？』

ミハイロフは精力が忽ちにして挽回したやうに全身を痙攣させた。血液は彼の面部に溢れた。眼は曇つた。

『私はそんな権利を誰にも……』彼は嗄聲で言つた。

エツゲニヤ・サモイロヴナは鋭い聲で笑ひ出した。

『誰も権利などを求めてゐやしませんよ……貴方は好きなやうになさいな。私は驚きはしません。私は言ひたいからこそ……』

ミハイロフは彼女の方へ向き直つた。彼は殆んど狂氣のやうであつた。彼女が何かもう一言口にしたら、彼は此の傍若無人な美しい顔を張り倒したかも知れない。エツゲニヤ・サモイロヴナは急に二三歩退いて、聲高に嘲り笑ひながら、逃げて行つて了つた。

ミハイロフはひとり其處にとり残された。彼は悪臭を放つ泥濘の中に頭まで埋り込んでしまつたやうな氣持になつた。

肥大なドクトル・アルノリチイは元氣なく彼と腕を組んで、彼を引き連れて行つた。

## 二十九

ツレーネフとトーツキイ中尉は前室に立つて、副官に別辭を告げてゐる所だつた。ツレーネフは陰鬱な蒼白い顔をしてゐた。中尉は大袈裟に眞面目くさつた顔をしてゐた。もう相談もすつかり済んだので、副官は交るゝ足を揺りながら、二人の歸るのを待つてゐた。ツ

三六二  
レーネフもそれに気がついた。彼は冷やかな顔をした美しい士官が、平生のやうに氣に喰はなかつた。彼は副官の横柄な口振りや、金屬のやうな眼や、妙に武張つた脛に限りない憎惡を覺えた。けれども何故か歸りたくない。

『では、明日はきつちり六時半にお宅へ寄つて行きませう。』彼は口髭を捻りながら言つた。『何よりも氣を大きくもつて、安眠する事が必要です……手が顫へないようにな……』トイツキイ中尉は重々しく言つた。彼の赤い大きな顔は大袈裟に震へ出した。彼は落著きはらつて口にした此等の怖ろしい言葉を聞いてゐるか何うか——ツレーネフの顔さへも覗き込んだ。

『さう、安眠——これが肝要ですな。』自分を歸らせまいとする感情に苛々しながら、ツレーネフは無意識に呟いた。

脛の大きい副官は口を噤んだまゝ、交るゝに足を動かしてゐた。彼の横柄な美しい顔には、言葉が喉に支へて了ふほど、冷やかな侮蔑の色が浮んでゐた。

『左様なら！』ツレーネフは漸く斯う言つて、再び腕を差し延べた。

『左様なら！』副官は冷やかに答へた。

ツレーネフとトイツキイ中尉は扉口の方へ行つた。中尉はハンドルを握んだ。副官は矢

張り前の所に立つてゐる。彼の蒼白い顔は闇の中で二人の跡を見送つてゐた。室内はもう暗かつた。彼はたゞひとり立つてゐる。ツレーネフは急に胸を掻き毟られるやうな氣持がした。此の人間も明日は慥かに死んで了ふのだ。彼は最後の夕暮を人氣のない眞暗な部屋に寂しく佇んでゐる。ツレーネフは彼を愛する者が一人として此の街にない事を思ひ出した。此の男には眞の友人といふものがなかつた。——飲仲間とても心の中では彼を毛嫌ひしてゐた。

ある力はツレーネフを闇の上に止らせた。彼は素早く振り返つて、副官に近づくと、氣息を喘ぎながら興奮して言つた。

『では失禮しますよ！』

彼はたゞ抱きついて、副官に接吻したかつた。

『左様なら！』副官は一足も動かずに繰り返して言つた。ツレーネフには彼が闇の中で冷笑を洩らしてゐるやうに思はれた。

彼の胸を暖めてゐた優しい感情は忽ち消え失せて了つた。凌辱の鋭い鎧はツレーネフの胸を突き刺した。彼は自分の態度が餘りに滑稽であつたのに気がついた。餘りに感傷的であつたのに気がついた。

『犬は犬らしく死ぬがいゝ！』彼は部屋を出ながら故意に斯う考へた。

彼は中尉の饒舌を避けて、道々二つの事を考へながら家へ歸つて行つた。

『アウグーヌトフは冷酷な人間だ。聯隊に於ける短銃の名手には相違ないが、自分は何うしてアルブーゾフの死を確信して了つたのであらうか？ またあれほど氣に喰はない男であるにも拘らず、薄暗い部屋の中に寂しく佇んで、自分達の跡を見送つてゐた彼が、何うして斯う痛々しく思ひ出されるのであらうか？ 自分が友人らしく彼の手を握り締め、少時一緒に居ることを、彼は望んでゐたのかも知れない……平生の度胸から冷淡に横柄に見せかけようと努めてゐたのかも知れない……兎に角彼の傲慢は假面である。彼に恐怖の念を起させようとする人々から、自分の素顔を隠さうとしてゐる假面に過ぎない。ナウーモンの言葉は眞理である。人類は不幸なものだ。副官も不幸者だ、アルブーゾフも不幸者だ、自分とても不幸者だ……あゝ誰の所へ行つて、自分の苦痛を物語つたらいゝのだらう？ 自分に最も親しい者はカーチャであるが、彼女は嫉妬の舞臺にのみ没頭してゐる……他の者は妻を怖れてゐる放埒な男の情事としか思ふまい……あゝ自分は何といふ重苦しい生活を送つてゐるのだらう！』

ツレーネフは鬱々として街を歩いた。彼は惱ましかつた。寂しかつた。そして翌朝の怖

ろしい嫉妬喧嘩は萬々承知しながらも、自分の家へは立ち寄らず、彼は踵を廻らして、倶楽部の方へと足を運んだ。彼は翌朝まで其處で骨牌を弄つてゐた。無闇に酒を飲んでゐた。そして五時には一睡もせずにとりつき中尉の家を襲うたのである。

副官は一人になると、書齋へ入つて、洋机の椅子に腰を下した。そして眞白な綺麗な腕に頭を置いたまゝ、窓の外を眺め始めた。

彼は毫も明日といふ日を怖れなかつた。また相手を射ち逃すことも、彼にとつては別に氣懸りでもなかつた。心臓は緩やかに鼓動を打つてゐた。たゞ胸の奥底には重苦しい物が潜んでゐて、頻りに残忍な復讐的な激昂を起させてゐる。彼の頭脳には冷酷な考へが浮んで来た。

『あの莫迦を殺しさへすれば、女はどのみち自分の所有になるのだ。』

彼は彼女の瘠せぎすな姿や、見るから弱々しい肉體や、細い眉毛や、暗い眼を思ひ浮べた。そして自分の默慾に服従する彼女の無残な姿を、何等の動搖も慾望もなしに想像してみた。其處には何物とも知れず冷やかに蝕ひ入るやうな物が潜んでゐた。彼女が若し自分に身體を許すものとすれば、彼は決闘の終るべき日——明日であつて貰ひたかつた。これは單に肉慾のためばかりではない。ある不可解な、全く冷靜な嘲弄の意味が含まれてゐた。けれども

此の慾望は、大きな勝が彼をして齒軋りをせしめるほど激しいものだつた。そして此の動作の中には何處となく野獸を想はせるやうなものがあつた。

部屋の中に誰か入つて來た。

「誰だ？」彼は落著きはらつて言つた。彼は此の時初めて、自分が眞暗な部屋の中に坐つてゐるのを意識したのである。

從卒の眞黒な姿が闇の上に動いてゐる

「副官殿！ 御婦人が參られました……御用があるさうで。」

闇の中に揺めいてゐるほつそりした他の姿が從卒の後方から動いて來た。

副官は吃驚して立ち上つた。

「何か御用ですか？」彼は訊いた。

「貴方にお話がありますので。」女の低い聲が答へた。

從卒は靜かに扉を鎖した。

副官は洋机の傍に立つてゐた。女は扉口に立つてゐる。彼は視線を女の顔へ向けたが、誰であるか判然分らない。

「何の御用ですか？」彼は再び冷やかに問うた。

ほつそりした姿は物靜かに動いた。けれども依然として扉口を離れない。その時副官は彼女に近づいて、身體を屈めながら細い眉毛の動いてゐる彼女の蒼白い顔を見詰めた。

「あッ……貴女ですか！」彼は吃驚して叫んだ。

「私です……」ネルリが低い聲で答へた。

石のやうな勝をした彼の傲慢な面には悪意の表情が閃いた。彼は少時震へてゐたが、聽て歩を進めて、肩から力なく垂れた彼女の冷たい弱々しい腕を引摺んだ。

「貴女でしたか……」彼は斯う繰り返して、そのまゝ口を噤んで了つた。

洋机に向つてひとり考へてゐた事件は、思ひもかけぬ所に近づいて來た。彼女が何のため自分を訪問したのであるかは彼の頭腦にも浮んで來ないが、たゞ残忍な冷酷なそして野獸のやうな情慾は、威嚇するやうな力を伴うて、肉の引き緊つた彼の全身を支配するのであつた。ネルリも嘗て訪れた時のやうには、容易く彼から脱れ得ぬ事を、同じ瞬間に直感した。

併し彼女は心を亂さなかつた。彼女にとつてはそれ程の事柄でもない。彼女の頭腦は唯一の考へに支配されてゐるので、他の事柄などは殆んど物の數にも思はれなかつた。

「私は……お願いに來ました。」彼女は言つた。

「何をですか？」副官は斯う言つて、狼のやうな白い齒を見せながら、彼女のいま一方の腕

を掴んだ。

三六八

ネルリは自由にならうとして、弱々しく身體を藻掻いた。

『後で……』彼女は男の暴力に夢心地で答へた。『私お話しなければ……』

『え、お話しなさいとも。』副官は白い齒を光らせながら、彼女の腕を放さずに言った。

『貴方は明日……アルプーゾフと決闘なさるでせう？』

『多分そんな事になるでせう。』

『私知つてゐます……それは私から起つた事です。』ネルリは謔言のやうに言った。『お願ひですから止して下さい。』

副官は彼女の腕を放して笑ひ出した。

『それはまた何故なんだか伺へませんか？』

『だつてその原因は私でせう……』

副官はニヤ／＼笑つた。

『美しい女はよく原因になるもんですよ。』

ネルリは眉毛を動かしながら、彼の顔をぢつと見詰めた。彼女には副官の言葉の意味が解らないらしい。また聴いても居ないらしい。暗い瞳の蔭からは、凝結した考へが覗いてゐる。

る。

『罪は私にあるんです。それなのに貴方は彼を殺して了ふんでせう。』彼女は繰り返して言った。

『殺す事も出来ませうさ。』副官は調戲ふやうに言った。

『私はそれが苦しいんです。』ネルリは絶望的な力を奮うて言った。彼女の聲は家中に響いた。彼女は足踏みさへもしない。

『ほう……』副官は驚いたやうに、調戲ふやうに言った。

彼女は彼の面前に立つてゐる。黒髪は彼女の頬を蔽うて、彼女の蒼白い顔を凄艶にさせた。金属のやうな副官の眼は、銀灰色の火花のやうに閃めいた。彼は矢張り氣味の悪い微笑を浮べてゐる。

『私知つてゐます。』ネルリは苦しさに言った。『貴方は私の悪口を仰しやつたんでせう……どうせ私はさうです……けれども彼を射ち殺すといふ事はありません……それが何んなに怖ろしい事になるかはお解りでせう……それは罪惡です。そんな事をなすつては不可ません。』

副官は踵を上げたり下げたりしながら聴いてゐた。此等の言葉は激しく彼の心を喜ばせた



らしい。ネルリは悲しさうに指先を鳴らしてゐた。

『貴方だつて人間でせう。』彼女は疲労しきつたやうに言つた。『貴方はお解りの筈です……もしもの事でもあつたら、それこそ大變な……』

副官は黙つて身體を揺ぶつてゐた。此の冷たい沈黙——石垣の如くに透徹し難い沈黙はネルリの胸を壓するのであつた。彼女の言葉は混亂した。彼女は斯んな言葉を口にするとではなかつたと思つた。此處へ駆けつけて來た時には、たゞ一言を傳へるだけで、他の事は一切口にしない積りだつた。彼女は此の男を厭うてゐた。赤熱された針金のやうに男の面部を刺す、憎惡に充ちた言葉を吐きかければ、男は敢て聴くまいともしなければ、一言でも反駁しようとはすまい。けれども此等の言葉は突然何處かへ消え失せて了つた。彼女は口にすべき言葉のないのを識つた。彼を壓すべき物のないのを識つた。たゞ涙を流して、彼に哀願するより他には手段があるまい。

『貴方が考へる程怖ろしい事ではありませんよ。』副官は幾らか鼻にかゝつた聲で言つた。

彼の灰色の眼には冷たい調戲が閃いた。彼は明かに彼女を弄んでゐるのだ。ネルリも不圖彼が玩賞するやうな眼で、頭の頂から足の爪先まで、自分の全身を見詰めてゐるのに氣がついた。

彼女は恐怖に捉はれた。彼女は男が考へてゐる事を了解した。自分が危険状態にある事を意識した。既に忘れられた處女の羞恥は彼女を征服した。ネルリは扉口の方へ駆け出さなげかりだつた。併し自分が此處を去れば、明日の決闘が成立して了ふであらうといふ考へは、彼女を辛うじて引きとめたのである。『聯隊でも指折りの射手です。』と言つた騎兵士官の言葉は、黒壁へ白く書かれた文字のやうに判然と浮んで來る。ネルリは我知らず男に近づいて、頰れるやうに跪いた。

『お願いです！』彼女は燃えるやうな指で男の腕に縋りながら呟いた。

怪しい、氣味の悪い微笑が副官の薄い唇に浮んだ。

『貴女は頼むと言ふんですか？ それは別の問題です。要求には報酬が……』彼は聲を震はしながら言つた。

ネルリにはその意味が解らないらしい。

『何の事なのです？ 何うすればいゝんです？』

副官は冷やかに笑つた。

『貴女は綺麗ですね……』彼は肉感的な表情をしながら言つた。

ネルリは徐ろに立ち上つた。彼女の顔は白かつた。眼は嚴としてゐた。齒はガタ／＼震へ

てゐた。

三七二

「またそんな悪口を……」彼女は氣息を詰らせながら言つた。彼女は扉のハンドルを探つて、捜し得なかつたやうな手附をした。

「さうかも知れません……」

ネルリは少時黙つてゐた。彼女は副官の冷やかな美しい顔から眼を放さなかつた。

副官は自信のありさうな微笑を浮かべながら、何事かを期待してゐた。

「貴方は酷い方です！」ネルリは嘆聲で言つて、扉の方へと足を運んだ。

微かな極端な副官の大きな唇に浮んだ。彼は灰色の眼を無意識に瞬いた。併し彼は一言も答へなかつた。そして洋机に凭れたまゝ、兩手を騎兵洋袴のポケットに突込んで了つた。

ネルリはちよつと振り返つて、素早く扉の方へ逃げて行つた。副官は彼女の後姿を見詰めてゐた。此の灰色の眼に凝視せられては、ネルリの氣力も衰へたらしい。彼女はハンドルを掴んだが、扉を開けようとはしなかつた。彼女は扉が怖ろしい重量を有して、自分の全身が鋼鐵で鑄造されてでもゐるやうに思はれた。彼女は哀傷と哀願のこもつた眼で、周囲を見廻した。

残忍な冷酷な面は彼女を見詰めてゐる。副官は焦つたさうに床板を踏んでゐた。ネルリ

は霧の中を行くやうに、記憶も自覺もなく、踉蹌く足を男の方へ進めた。そして再び崩れるやうに跪いた。

「お願いです！」彼女は手を差し延べながら、濕氣のない唇が噛いた。

副官は冷やかに頭を振つた。

ネルリは立ち上つた。黒髪は肩に垂れてゐる。肩は顫へてゐる。眼は狂人のやうに濁つてゐた。

副官は手を持ち上げて、爪先を見た。ネルリは嘆聲で何か言つた。

「何です？」彼は訊いた。

ネルリは彼の近くへ行つて、蒼白いしなやかな腕を下げたまゝ立ち止つた。顔は斑點に蔽はれてゐた。眼は怖ろしい憎惡を浮かべながら、彼をぢつと見詰めてゐる。

「よう御座います……」彼女は重荷でも動かしながら口を利くやうに呟いた。

不意に鋼鐵のやうな腕が彼女を抱きかゝへた。ネルリは最後の羞恥を燃やして、男の腕から脱れようとした。けれども男は愈々強く抱きしめる。彼女は谷底にでも落ちたやうにもう手出しはしなかつた。彼女は夢幻に副官の冷やかな顔を見た。腕の戦慄を感じた。そして眼前に寢臺のあるのを識つた。彼女は憎惡と恐怖の無言の叫聲をあげながら、いま一度脱

れようとして、寢臺の上に轉げ落ちて了つた。

『イヤイヤ、ナセ』副官も憎惡を含んだ嗔聲で言つた。

ネルリは眼を閉つて、唇を噛みしめた。彼女は汗ばんだ男の腕が無作法に觸れるのを感じた。そして絶々な男の息を耳にした。

『ちいさ、わ……早く……』

彼女は急に身體が自由になつたのを識つた。何となく腑に落ちないので、ネルリは眼を開いて、自分の露な足を眼にした。彼女は戦きながら、下著で膝を隠した。

副官は彼女の傍に立つてゐた。彼の顔には狼狽の色が見えた。

『貴女は……貴女は妊娠して？』彼は顫聲で訊いた。

ネルリは羞恥に捉はれた。これは哀れな熱い涙に充たされた羞恥の情だつた。彼女は兩手で顔を蔽うて、膝の邊まで身體を屈めた。亂れた黒髪はあらかた彼女の膝を隠した。

『私は……知らなかつた。』副官は嗔聲で言つた。

ネルリは泣き出した。彼女は哀れな涙を流して、虐げられた不幸な子供のやうに泣いた。

生の苦痛も、見捨てられた悲しみも、不可避の怖ろしい未來も、孤獨も、虛弱も——此の絶望的な無言の歎歎の中には、すべてのものが潜まれてゐる。

副官は狼狽へながら彼女の前に立つてゐた。彼の大きな髭は震へてゐた。彼は洋机の方へ行つて、硝子壺を手にとつた。そして水を注いで、ネルリの所へ持つて來た。

『泣く事はありません。さあ、これを飲んで……』彼は呟いた。彼の温かい聲は、自分に對する羞恥と、彼女に對する憐憫と不安とに充たされてゐた。

ネルリは不意に頭を上げて、信賴するやうに男の顔を見た。そして自分の懦弱に對する寛恕を善良な友に乞ふやうに、無邪氣に、羞かしさうに微笑つた。

副官は顔を反に向けた。ネルリの燃えるやうな指は彼の腕を捉へた。彼は女の手を振り放して、二三步足を運んだ。そして彼女の方へ背を向けたまゝ言つた。

『貴女に誓ひます……明日は決して狙ひません。赦して下さいね、私が……』

ネルリは眼を見開きながら聽いてゐた。彼女の苦しい胸には明るい物が擴がつて來た。

『お歸んなさい！』副官は嗔聲で繰り返した。『私は約束します……』

ネルリは立ち上つた。

『貴方は……』彼女は明るい聲で言つて、彼の方へ兩手を差し延べた。

『お歸んなさい！ 歸つて下さい！』副官は苦しさうに繰り返した。彼は洋机の傍に腰を下自分の頭を抱へた。

少時は物音もしなかつた。ネルリは寢臺の傍に立つて、彼の顔を見詰めてゐた。涙に濡れた彼女の燃えるやうな顔は顫へてゐた。やがて彼女は副官に近づいて、彼の肩に指先を觸れた。

副官は振り向きもしなかつた。

ネルリは少時立つてゐたが、やがて身體を屈めて、彼の頭に優しく接吻した。そして少時考へてから、緩やかに踵を廻らして、副官の部屋を出て行つた。扉口の所でもう一度足を止めたが、彼女は漸くにして扉を開く事が出来た。

副官は扉の閉まる音を耳にした。彼は身動きもしなかつた。

従卒が入つて来た。そして何か持つて、直ぐに出て行つた。副官は矢張り腰掛けてゐた。ある新しい感情に隠れて、怖ろしく緊張した彼の心の中では、何物かゝ唄を歌ひながら顫へてゐる。

總ての物が眠つた眞夜中に、彼はマスクワ縣の妹に當て、手紙を書き始めた。そして書き終らない中に、著物のまゝで長椅子に俯伏した。

## 三十

太陽は未だ昇らないが、四邊はもう明るくなつて、矮林の後方の空は漸々に金色を帯びてきた。霧は遠く野原に消えて、街には教會堂の十字架が輝いてゐた。朝の冷氣に洗はれたやうな清淨な鏡の響きが聞える。小鳥は林の中で忙しうに囁いてゐた。新聲を迎へに出る花嫁のやうに、白樺の樹は優しく淑やかに立つてゐた。たゞ眞黒な樺の樹ばかりは、遠の静穩を嚴かに守つて、緑色の大きな頭で林の上から見下してゐる。

緑の草原の上に動いてゐる人達は何となく氣遣はしげに思はれた。

アルプーゾフは綺麗に磨かれた長靴の踵を柔かい土に埋めながら、草原の上を彼方此方歩いてゐた。顔は平生より蒼白かつたが、暗い眼は夜を徹した人のやうに充血してゐた。

白樺の細い格子を透して、野原や大空が廣々と展開する林端のあたりまで來ると、アルプーゾフは足を止めて、長い間暗い眼を見張つてゐた。けれども彼は朝日の薄紅に染つた野原を見てゐるのではない。明るい空を見てゐるのでもない。彼は地面を見詰めてゐるのだつた。ある耐へ難いほど重苦しい物が、額の廣い彼の頭を壓して、此の楽しい美しい世界を彼の眼から隔つたのである。

ひよろ長い騎兵少尉のクラウゼは鶴のやうに足を上げながら、アルプーゾフとは反対の方を歩き廻つてゐた。メフファストのやうな彼の眉毛は、何事かを熟考するやうに釣り上つてゐ

だが、顔ばかりは飽くまで平生の品位と嚴肅とを保つてゐた。いま一人の介添人である若い將校は切株に腰を下して、巻煙草を嚙くちやしてゐた。煙草を喫つて了ふと、彼は白樺の幹を狙うて、吸殻を投げ捨てた。そして直ぐに皮製の新しい巻煙草入からもう一本抜きとつた。彼の胸は苦しかつた。そして何物かを憐れんでゐた。併しそれは交際の浅いアルプーゾフの事でもないし、自分が憎悪してゐる副官の事でもなかつた。恐らく彼は硝子よりも脆い人間の生命に無常を感じたのであらう。

最初——彼等が街からやつて來た時、若い士官は空元氣を出して、決闘に必要と思はれる事柄を話さうとした。けれども彼に返事をする者はなかつた。で、三人は今口を喋んで、てんでに他人には解らぬ自分の事ばかり考へてゐた。時間は刻一刻と懶げに過ぎてゆく。

此方へ近づいて來る士官達の姿が樹木の間にチラ／＼見えた時、胸は激しく鼓動したものの、若い士官は何となく嬉しかつた。彼は直ぐに立ち上つて、氣遣しさうな顔をしながら、彼等を迎へに歩いて行つた。彼は膝の顫へを覺られまいと努めた。腫れぼつたい詰ら顔に美髯を蓄へた肥大なトーツキイ中尉は、眞面目くさつた顔をして彼に挨拶を言つた。彼は此の重大な事件に携つてゐるのが自分一人でない事が物足りなかつた。彼は自分の意義を識つて、明かに氣息を詰らせた。そして決闘が法式通りに實行される事を望んだ。ツレーネフ

は彼に挨拶すると。「何うでもしろー！勝手にするがい。」とでも言ひたさうな顔をして、長い口髭を捻りながら、直ぐ側の方へ行つて了つた。

若い士官は吃驚びつくりしたやうな眼で副官の方を見た。彼は眞白な上著と、鈕を外した長い外套を著込んでゐた。傲慢な無愛想な顔には綺麗に剃刀が當てられてあつた。彼は今し方冷水で顔を洗つたらしい。金屬のやうな灰色の眼は透徹つてゐる。若い士官は此の眼附に威嚇された。聯隊の人達は誰もさうであるが、彼も副官を愛してゐない一人だつた。彼は副官を怖れてゐた。けれども此の眼附ばかりは全く別人である。胸中の感激が眼の中に輝いてゐるやうに思はれる。

『事によると彼奴は勝つかも知れない。また……負けないとも限らない。併し彼奴は勝つ氣でゐるんだ。』中尉は斯う思つた。

太陽は地平線の外れに重々しく昇つた。樺の白い幹は赤や薔薇色の斑點に燃えた。空氣は一入新鮮になつて、羞恥を帯びた若々しい歡喜よろこびが林の中から漂うて來る。彼等は決闘を何う始めたらいゝか迷うてゐて、てんでに口を切るのを躊躇ためらつてゐた。そして最も愚かな者は、相變らず眞先きに跳び出して來るのであつた。トーツキイ中尉は顔を赧らめて、嚴かな聲で言つた。

『さあ……もう時間だらうと思ひますが。』

三八〇

ひよろ長いクラウゼは無言のまま進み出て、草原の中へ歩いて行つた。彼は昇りゆく朝日を横に見て、鶴のやうな長い足で距離を測り始めた。彼が歩き出した所には、彼の細い洋剣が、草の中で鎌首を擡げた蛇のやうに突立つてゐた。緑色の濕つた土に洋剣が鋭く突刺してあるのを見ると、何故かそれが訝しく思はれた。クラウゼは測り終つて、周囲を見廻して誰一人その意味が解らない。彼は腹立たしげに眉毛を釣り上げて言つた。

『何か持つて来て……』

彼が言ひ終るより先きに、トーツキイ中尉はガチャ／＼洋剣を抜いて、クラウゼに手渡しした。彼は何故かそれを見詰めてゐたが、少時すると草を踏み分けて、銃を地面に突刺した。洋剣との間は二十歩の距離があつた。今は二匹の蛇が草の上に鎌首を上げて、執念深く睨み合つてゐるやうに思はれる。彼等は二十歩が餘り近いのに怖ろしくなつた。

『莫迦、莫迦……』ツレーネフは獨言を言つて、顔を反向けた。

トーツキイ中尉は忙しうに動いてゐた。庇の下が白くなつてゐる彼の額にはポトリと汗が落ちた。

『では位置に著いて貰ひます。』彼は嚴然と言つた。他の者が少しも推量しないで、何から

何まで自分一人にやらせてゐるのを、彼は快く思つてゐないらしい。

アルプーゾフは嚴と振り返つて、歩いて行つた。副官は先づ自分の短銃をとつて、定められた位置に著いた。アルプーゾフは反對の方を斜めに見、何事かを詰つてゐるやうな明るい眼を見て、若い士官の手から短銃を受取つた。そして頂垂れたまゝ、重い足を自分の位置の方へ運んだ。

誰もトーツキイ中尉に指導役を委任した譯ではないが、すべてを本式通りにやるためには他人に容喙されないだけの面倒をみて、彼は馬鹿正直に馳せ廻つてゐた。そして警同士をそれ／＼の位置につけると、二人を阻むやうに真中に立つて、重々しい聲で言つた。

『我々介添人は十二分に盡力すべき義務があると思ふ……』

副官は時々と彼の方を見て、片方の眼に微笑を浮べた。

アルプーゾフは力なく頭を振つた。此の動作の中には決意と氣力が籠つてゐる。中尉は面と向つて、『勝手にしゃがれ！』その位の事なら俺達だつて知つてゐる。何時まで愚圖愚圖してゐるんだ！』と言はれたやうな氣がした。

中尉は斯んな場合に相應な、溜息を吐いたり、手を開いたりする事を忘れずに、丁度二人の間の距離の中央から二三歩退いて、自分の掌を高く上げた。

他の介添人達と軍醫が立つてゐる所からは、中尉の得意さうな緒面や、長い短銃を手にした二人の身動きもしない姿が判然と見えた。太陽は朝霧の中から現れたらしい。小鳥の私語は増して来て、副官の晴々とした不可解な眼や、頂垂れてゐるアルプーゾフの暗く撃んだ眉毛までが見える程、四邊は急に明るくなつた。

『一ちー』中尉は斷乎と叫んだ。

アルプーゾフは素早く顔を上げて、前方を見た。晴々とした眼は瞬きもせず、彼の直ぐ前からちつと此方を見詰めてゐる。そして『一ちー！二い！三ん！』の短い叫聲の間には、自分を優しく愛想よく見詰めてゐるやうにさへ思はれた。その眼は、何かを物語つてゐる。明るい二筋の光線を彼の方へ流してゐる。けれどもアルプーゾフはそれが解らなかつた。彼は愈々眉毛を擧げた。彼の顔は見る／＼死人のやうに蒼ざめて来た。

『三アん！』中尉は斯う叫んで、無意識に一足退いた。

副官は發砲した。鋭い砲聲は白樺の幹の間に碎けた。小枝は揺れたが、直ぐに鎮まつた。白嘴鴉は騒ぎ立つて、緑色の椋樹の上に舞ひ上つた。

一秒間といふものは發砲そのものを忘れて、アルプーゾフの頭脳には、數千の思想が旋風のやうに過ぎ去つた。

『反れた……彼奴は故意に外したな。人を嘲弄しやがる氣か？ よし、そんなら俺も外してやらう。』

此の士官一人に限つた譯ではないが、彼の數日間胸に抱いてゐた怖ろしい憎悪や、嫉妬の苦痛や、愛情や、悪意は、忽ち野獸のやうな狂怒の衝動を喚起した。

副官は徐ろに短銃を下した。瞬きもしない晴やかな眼は、矢張りアルプーゾフを見詰めてゐる。

『むう……人を嘲弄してゐやがるんだな。』アルプーゾフは矢張り斯う思つて了つた。『貴様は名人だ……よし、これでもか。』

彼は眞白な上着の胸を狙つて發砲した。

銃聲が轟いてから、相手が何うなつたか分らなかつたが、彼は介添人達の立つてゐる樹木の下に、驚愕したやうな叫聲の起つたのを耳にした。彼はたゞ介添人達が眼を圓くして、副官の方へ走つて行くのを見た。

『命中したな！』斯んな言葉が恐怖と歡喜の惡寒のやうに彼の頭腦の中を走つた。

副官は蒼白い面に異様な微笑を浮かべながら、彼の方へ二三歩足を動かして来たが、臆て感覺を失つたやうに身體を屈めて、ばつたりと濕つばい綠草の上に倒れた。介添人達の背は彼

を圍繞いた。そしてその後の事はアルブゾフには何にも見えなかつた。彼は長い短銃をポケットに突込んだが、再びそれを取り出して、側の方へ投げ捨てると、すた／＼後方へ歩いて行つた。彼は馬車の方へ歩いてゐる積りだつたが、實際は全く反對の方向だつた。誰か彼に追ひついて、彼の肩を敲いた。アルブゾフは振り返つた。

『行つて下さい……呼んでゐますから。』ツレーネフが妙に眞面目くさつた聲で言つた。彼の顔は蒼ざめて、悪寒でも覺えたやうに顫へてゐる。『来て下さい……貴方は射殺したんです。』

『犬は犬らしく死ぬがいゝ！』アルブゾフは荒々しく言ひ放つた。

ツレーネフは自分自身の言葉を思ひ起して狼狽した。

『もうそんな事を言つてゐる時ではありません……行つてやつて下ろす。』

アルブゾフは哀願するやうな、當惑したやうな彼の眼を見て、肩を縮めた。そして蹶と振り返ると、足早に引返して行つた。

副官は兩足を投げ出したまゝ、地面の上に倒れてゐた。ダブ／＼な軍服を着て、帽子を阿彌陀に被つたドクトルが、折敷をしながら彼の腹部に手當を加へてゐた。アルブゾフは何よりも彼の手の蔭に、生々しい血だらけのルバーシユカを見た。

『腹に當つたな！』彼は無意識に斯う考へた。痙攣は彼の脊筋を走つた。膝は心地よい程度に痛み出した。

聽て彼は副官の顔を見た。

顔は蒼ざめて、青味がかつた變色さへ來たしてゐた。大きな齒は美しい口髭の下に弱々しく光つてゐた。晴々とした透明な眼は、近づいて來るアルブゾフをぢつと見詰めてゐる。トーツキイ中尉と騎兵士官クラウゼは彼の兩腕を支へてゐる。副官は磔刑になつたやうに、兩腕を延ばしてゐた。

アルブゾフを見ると、副官は微笑を洩らした。彼の齒は更に弱々しく光つた。大きな顎は顫へてゐた。

『死にます……』彼はアルブゾフを迎へるやうに嗄聲で言つた。『手を……もう握手してもいゝでせう。』

アルブゾフは根が生えたやうに突立つてゐた。

『握手して下さい……握手を！』誰か側の方から彼に囁いた者がある。

彼は驚いて周圍を見廻した。そして眼に涙を溜めた見なれぬ士官の、無髯の若々しい顔を見た。



副官は彼の方へ延び上つた。彼の眼は一入暗々として来た。恰も死の深淵が眼の中を過ぎて行くやうである。

三八六

『貴方のネルリが……』微笑を浮べて、齒を光らしながら、彼は何となく腑に落ちない聲で言つた。『昨日私の所に……昨夜です……』

アルプーゾフの頭脳には全身の血潮が逆上した。突然跳びかゝつて、悪夢のやうな怖ろしい幻影と共に、犬でも殺すやうに彼の息の根を止めようとする物狂ほしい考へが彼の頭脳に閃いた。

『貴方を射たない……私は誓ひました。』副官は更に低い聲で言つた。彼の顔は内部から明るくなつて来たと思はれる程、不可解な恍惚とした表情に輝いた。

『私は可哀さうになつて……哀れな女です。』副官は斯う言ふと、ぐつたり腰を落して、手足を藻掻きながら兎のやうな聲をあげた。

アルプーゾフは彼を何處へか運んでゆくのを、見透し難い眞赤な霧の中に意識した。騎兵士官は冷たい聲で彼に何か言つた。けれどもアルプーゾフには分らなかつた。たゞ彼の言葉を通して怖ろしい叫聲ばかりが聞える。

『苦しい……苦しい。うゝ……』

林端に昇つた太陽は痛むほど眼に刺戟を加へる。力強い光で人を眩惑させる。世界は何といふ廣さだらう。白い雲や、瑠璃色の空や、光の漲つた緑の野原は、何といふ美しさだらう。

### 三十一

青白い夕焼の縞は地平線に近づいた。一塊に融け合つた樹の間の眞黒な家には、怯えたのやうに灯が光つた。嵐を前にしたやうな夕風が吹いて、樹木は花園に囁いてゐた。

夏も終りに近づいた。以前の優しい安らかな響きも、もう花園の私語の中には聞かれな。樹の葉は荒々しくざわめいて、冷氣と空虚とが何處からともなく漂うて来る。

ネルリは洋燈を手にして、露臺の上に現れた。彼女はそれを洋机の上に置いて、両手で頭を支へながら腰を下した。彼女の前には書物があつた。併し險しい眼はちつと花園の暗闇を見詰めてゐた。何か思案を要する程のものが其處に見えるらしい。

洋燈の輝いてゐる所から見れば、四邊は眞暗な闇に思はれる。けれども洋燈から顔を反向けると、空が地上より明るい事や、黒雲が風に追はれて行く事や、恐怖の中に梢が揺めいてゐる事が分る。風は時々洋燈を襲うた。洋燈はネルリに黒煙を吐きかけて、彼女を闇の中に

沈めながら、不意に燃え上る。そして少時すると再び明るくなつて来る。

三八八

ネルリは瀧頭を抑へて、細い眉毛を動かしながら、闇の中をきつと見詰めてゐた。蒼白い石のやうな顔をした彼女の頭脳の内部には、空を走る黒雲のやうに、惶急しい、模糊とした切れ切れな考へが突然に浮んで来た。

エツゲニヤ・サモイロヴナは不在だつた。ネルリは彼女の出先を知つてゐた。彼女は事實以上にさへ疑つてゐた。併し以前のやうな苦しい妬ましい想像はもう浮んで来なかつた。決闘が終る。清い記憶の残つてゐる、傲慢な顔をした不可解な副官が死ぬ、アルプーゾフが何處かへ姿を隠す、彼が絶えず泥酔し、賣笑婦達と破廉恥な真似をして、すつかり憔悴してゐるといふ噂も耳に入る——ネルリの胸は捨鉢になつた。彼女は自分に「還つて、死人のやに身を潜めてゐた。彼女の心はたゞ暗黒と空虚ばかりで、もう未來の考へもなければ、激しい苦痛もなかつた。彼女は何れほど醜いものにせよ、何れほど恐ろしい物にせよ、何れほど汚らしい物にせよ、總てを平然と生に委せて、何等かの終局を期待してゐるらしかつた。階段を力なく踏みながら、入口階段の上に昇つて来た者がある。ネルリは顔を上げたが洋燈を前にしてゐるので何にも見えなかつた。

『私です。』ドクトル・アルノリチイが闇の中で言つた。そして露臺の上にやつて来た。

ネルリは、蒼白いしなやかな腕を黙つて差し出した。肥大なドクトル・アルノリチイは彼女の引緊つた顔や、びく／＼動く眉毛や、きつと据つた眼を見詰めて、何にも口を利かなかつた。

ネルリも黙つてゐた。風の私語ばかりが聞える。空では物音を立てながら黒雲が走つてゐるのだらう。ドクトル・アルノリチイは腰を下した。彼は洋杖を前に立て、太い腕をその上に重ねた。

『先生！』ネルリは不意に言つた。

ドクトル・アルノリチイは顔を上げた。

『何ですか？』

『先生！』生が解く事も出来ないほど纏れてしまつたら……何うしたら宜しいんでせう？』ネルリは元氣のない聲で訊いた。これは質問ではない。返事を期待せず、無意識に唇に浮べた彼女の思想の一片なのである。

『私には解りません。』ドクトル・アルノリチイは答へた。彼は頂垂れた。

ネルリはしつかりと瀧頭を抑へて、再び闇の中を見詰めた。ドクトルは黙つてゐた。風の音がする。すべての物は動搖に充ちた闇の中に静寂として来た。大地は何か怖ろしい事を期

待してゐるのだらう。煙のやうな黒雲は恐怖の中に大空を走る、樹木は愁訴するやうに動く、風は自分の位置を見出し得ずに、惶急しく走つて行くのだ。

部屋の中から弱々しい聲が聞えた。けれども風の音に妨げられて、判然と聞きとれなかつた。

ドクトルとネルリは顔を上げた。そして耳を澄ました。

『ネルリ！』弱々しい聲は繰り返した。

『マリヤ・パーヴロヴナが呼んでゐます。』ドクトル・アルノリチイは言つた。彼の聲は何故か顫へてゐた。

ネルリは直ぐに立ち上つて、扉口の方へ行かうとした。けれども急に立ち止つて、ドクトルの方へ身體を屈めながら、彼女は苛々しく訊いた。

『彼女は死ぬんでせうか？』

ドクトルの大きな顔には痙攣が走つた。彼は少時何とも答へなかつた。聽て唇を動かしたが、一言も口にする事が出来ずに、彼はたゞ空しく頭を振つた。

ネルリは長い間ドクトルの顔を見詰めてゐた。彼女は少時すると突然に言つた。

『生命は呪はしい！』斯う言つて、彼女は聲の方へ出て行つた。ドクトルの耳には絶望と憎

悪に充ちた呪咀の聲が残つた。彼は思はず戦慄した。

病女は寢臺の上に横はつてゐた。彼女はネルリを迎へるやうに細い腕を差し延べた。

『ネルリチカ！ 私なんだか怖い……風が吹いてゐるのね。少時一緒にゐて頂戴……彼處で貴女誰と話してゐたの？』

『先生がいらつしやるのよ。』たつた今絶望的な聲で生命を呪うたとも思はれない程、ネルリは白々しく眞面目くさつて言つた。

病女優の眼は開いた。死にゆく人の弱々しい歡喜は彼女の顔を照らした。顔はネルリが悲しげに眼を反向けた程、急に美しく愛らしくなつて來た。

『此處へお呼びませうか？』ネルリは力なく訊いた。

『呼んで頂戴……先生！』病人は自分で聲をあげた。

重々しい足音が聞えた。ネルリは部屋の眞中に立つて、病人と扉口を等分に見てゐた。マリヤ・パーヴロヴナは入口から眼を放さずに、嬉しさうな微笑を洩らしてゐた。そしてドクトル・アルノリチイの足音が直ぐ扉口に聞えた時、彼女は急に手を上げて、細い弱々しい指先でこつそり髪を撫でつけた。

ネルリはそれを見た。ドクトル・アルノリチイは入つて來た。

『いらつしやい。先生がいらつしやらないので退屈でしたわ。人間は死ぬ二三日前になつても、矢張り退屈しますのね。少時此處にいらして下さいなね。』  
 ドクトル・アルノリヂイは帽子と洋杖ステッキを置いて、椅子を寢臺に近づけた。そして腰を下した。

病人は晴れやかな眼でドクトルの動作を追うてゐた。そして帽子を置いたために、ドクトルが顔を反向けした時、彼女は再び手を舉げて、亂れた髪を繕ふのであつた。ネルリは露臺の上に出て行つた。

此處で再び顛顛を抑へて、騒がしい花園の暗闇を見詰めながら、彼女はちつと考へた。マリヤ・パーヴロヴナはドクトルを慕ひながら、遠からず死んで了ふのだ。何んな絶望の中に彼女は氣息を引きとるだらう。何れほど生と争ふだらう。何れほど哀れな力を盡して、生に獅嚙しがみつかうとするだらう。彼女は墓の中へ去る。地上には胸を引き裂かれ、心を傷けられた陰鬱な老醫師が残される。これほど近くを通りながら、恰も何人かが哀れな陰鬱な生涯を嘲弄するやうに、永遠の闇に消え去つた幸福が、彼には何れほど明るい美しい物に思はれるだらう。併し彼女が若し至快でもしたら、それこそ平凡な人間の退屈な月日が過ぎるのだ。半年も経てば二人は争ふやうになる。情熱は日毎に薄らいで行く。彼等は相互に相手を重荷にする……彼女は屹度ドクトルを捨て、了ふ。幸福といふものはない。たゞ幸福の幻影に過ぎないのだ。波の上に唱ふ海の女王は、美しい腕を延べ、肉感的な胸や魅力のある眼で人を誘ふが、岸の上へ持つて来れば、魚類のやうな尾と蛙のやうな腹をした二眼と見られぬ化者になつて了ふだらう。

マリヤ・パーヴロヴナの部屋では、洋燈が厚い笠の下に點つてゐた。寢臺の上にも、瘠せ衰へた肉體が描かれてゐる眞白な敷布シツにも、病人の蒼白い腕にも——明るい光は撒き散らされてゐる。けれども、白い顔と、大きな眼と、滑らかな金髪だけは影になつてゐた。憔悴せうすいれた頬や、眼の下の青い影は、緑色を帯びた薄闇の中に見えなかつた。病女優は戀に悩む少女のやうに初々しくて美しかつた。彼女は明るい眼でドクトルをぢつと見詰めながら言つた。

『今日は大變氣持がよろしいんですよ。私癒るやうな氣が時々しますの。變ですわね、前には氣持が快くつても、もう直きに死んで了ふんだと思つてゐましたのに……子供のやうに身體が弱くなつて、ネルリやジーネチカの手を借りなければ、寢臺から起き上がることも出来ないのに、私矢張り丈夫のやうな氣がしますの。斯んなことをお話しするのは羞かしいんですけれど……』彼女は體裁かままりが悪さうに微笑つた。『私夢を見ましたの……その時から希望が……』